

Miracles!

ミラクルズ

フィオーレ・フィオーレ

ながたかずひさ

2

Miracles!

Episode 2

- フィオーレ・フィオーレ -

2ND

美原
はなこ
HANAKO

天満蘭
RUN
DF

堺愛
LOVE
11
FW

和泉流乃
RENPUKI
5F

長居美緒
MIO
10
MF

難波鳴海
NANA
7
MF

1ST

平野
エレナ
ELENA
8F

吹田千里
CHEETAH
8K

西九条
明日葉
12
DF

住吉古都
COTTON
12
Manager

天王寺ありす
ALICE
21F

此花可憐
KALLEN
9
FW

守口忍
SHINGOU
1K

マキ・
189.
モリサ
MARUKA
18/FN

3RD

森之宮胡桃
COO
13FW

八尾由美子
YUUME
13MF

梅田もも
MOMO
DF

■あらすじでござる

女子サッカークラブ「ミラクルズ」は、とある街の人気者。高校1年から3年までの一六人+マネージャーが、超色男（ただし自覚なし）コーチに率いられ、楽しく激しく恋に笑いに涙に人生にそしてサッカーに勤しんでおります。

ただいまの目標は、毎年お正月に行われる日本最大のオープン大会「クイーンズカップ」への出場、そして夢はどうか、優勝です！

はてさて今回は、どんな騒動が巻き起こりますことやら。

■目次

委員長

写真屋

部室にて

撮影会

ママの店

言葉よりも

堅守

フィオーレ・ミッシーレ

大切な写真

【本日の主演】

・美原はなこ（みはら・はなこ／はな）DF2

2年生。多少神経質で多少うるさ型だけど、学年トップのど根性秀才、作戦参謀兼任。クレバーなスピードDF。

・駒川匠（こまがわ・たくみ）2年

プロ顔負けの腕前を持つ写真部のエース。隙あらばなんでも撮っちゃう。ところが彼にも撮れないものがあつて……

【ミラクルズ・メンバー】

「2年生」

・長居美緒（ながい・みお／みー）MF10(c)

一見地味だが強く優しく頼もしい、ピッチ内外問わずの大黒柱。パーフェクトボランチ、キャプテン。

・難波鳴海（なんば・なるみ／ナナ）MF7

ユース代表を張るサッカー小娘。二四時間ギャグ・ドリブル。超絶テクニカル司令塔。

・和泉流乃（いずみ・るの／るー）DF5

センス抜群切れ味抜群、なんだかんだで頼りになるいい女。光速サイドアタッカー、副将。

・天満蘭（てんま・らん）DF3

天真爛漫豪放磊落、食いしん坊万歳なナチュラルガール。超攻撃的パワフルリベロ。

・堺愛（さかい・あい／プリンセス）FW11

無口ながら存在感抜群の超絶美少女。実は結構、お茶目。フィジカル自慢のパワーFW。

「3年生」

・梅田もも（うめだ・もも）DF4 3年

B三桁のだいまないとばでーを誇るスイーツ魔神。フェアプレー・DFリーダー。

・森ノ宮胡桃（もりのみや・くるみ／くー）FW14

クールで捉えどころのない、けど特に何も考えてないネコ娘。高々度戦闘爆撃センターFW。

・守口忍（もりぐち・しのぶ）GKI

時にカジュアル時に武人、麗しき見た目に騙されてはいけない。不屈の守護神。

・八尾由美子（やお・ゆみこ／ユミ姉）MF 16
頭脳明晰でも気さくな姉御。ガッツと肝っ玉は
天下一品。守備職人、MF・DF。
・マキ・パメラ・キシワダ（まき・ぱめら・きし
わだ／PK）MF 19
ブラジル人日系4世留学生。誰にも止められな
いだんじりサンバ娘。トリッキークーイング。

「1年生」

・此花可憐（このはな・かれん／カレ）FW 9
ド単純でもそこが可愛い、憎めない暴れん坊。
ユース代表の逸材。エース・ストライカー。
・吹田千里（すいた・ちさと／チータ）GK 20
ボーイッシュナンバー元氣も一番、いつもチ
ームのムードメーカー。FW兼任の超反応GK。
・平野エレナ（ひらの・えれな／エレ）MF
8
日露ハーフの元フィギュアスケーター。物腰柔
らか、微笑み一杯。大型MF、中盤の働き蜂。
・天王寺ありす（てんのうじ・ありす／あー）M

F 21
砂糖菓子少女っぽいが底の知れないキャパを
持つ天才少女。攻撃的MF、ファンタジスタ。
・西九条明日葉（にしくじょう・あすは／はっぱ）
DF 17
天下無敵のボケ倒せお嬢様。敵も味方も大混乱。
鉄壁のDF、右サイドバック。

・住吉古都（すみよし・こと／いこと）Manager
ど派手な見た目に似合わず思慮深い、縁の下の
力持ち。心配りのマネージャー。

「男性陣」

・上町大地（うえまち・だいち）2年
超オットコマエ・ミラクルズ・コーチ。
サッカー戦術と乙女心掌握の天才。
・空堀三十六（からぼり・さとる）2年
冴える頭脳に軽い足腰、チームの盛り上げ役。
ミラクルズ・チームプロデューサー、ナナと夫
婦漫才。
・千林哲哉（せんばやし・てつや）2年

応援団の明日を担う漢気あふれる好男子。

豪放磊落、情に厚い。声がでかい。

・高安和輝（たかやす・かずてる）2年

放送部のしゃべってないとすぐしんじやう星人。
かしましくチームとサポを盛り上げる。

委員長

——自習の教室が、ざわめきだした。

そもそも高校生に「自習」などという高度な自律作業を要求すること自体が無理難題なのだが、スケジュールというものは組んだ瞬間から狂う運命にある。そしてそうなれば、ここぞとばかりに暴れてしまうのは、古今東西どこの高校生でも変わりはない。

こうなると、このクラスの連中は、一人の人物をちらり、ちらりと見るようになる。

委員長。

正確には「前」。が、任期中生徒会副会長も兼務し、なによりいかにもそれらしい風貌と性格から、もはや学年でその普通名詞は、彼女を指すことになってい

る。

教室が騒ぐ。すると彼女が、天地も驚く一喝を下し、乱れた世を平定するのだ。その華々しさたるやこのクラスの名物でもあり、中には「それ」を見たい聞きたいがために、大げさに暴れる者すら居る。

見事な本末転倒だが、なに、高校生なんて、目的と手段がゴチャゴチャなものだ。そんな季節を、青春と呼ぶ。

——ざわめきは高まりつつある。

だが、当の委員長——美原みはらはなこは、今日は腰が重かった。

細いフレームごく薄い度の眼鏡の奥に、淡い色の大きな瞳、細く強い眉。小さな鼻小さな口が可愛らしいのに、輪郭は美しい卵形の美人顔。背筋が伸び実にバランスよくスマートなのに、小柄。サラサラのショートヘアが、陽の光に明るく

輝いている。

美しくしかし可憐な彼女、叱咤の声さえ、凛々しく耳心地良い。「叱られたい」などと言いつ出す男子生徒の気持ちも、その横顔を見つめその声を聴けば、わからなくはない。

しかし今日は、その「意志」そのもののような強い瞳をボンやり鈍くして、窓の外に放り投げている。

はなこには最近、そういう時間が多かった。

いろいろ、考えることがある。

彼女には、三つの顔がある。

まず学年トップの大秀才・真面目委員長の顔。次にサッカーチーム「ミラクルズ」、切れ味抜群の高速DFの顔。そしてミラクルズの頭脳、戦術参謀としての

顔。

そして悲しいかな、どの顔にも、満足はしていない。

成績優秀？

それだけじゃなんの意味もない。

「なんのために」。正直、私には、今はまだそれが無い。

クレバーな高速ディフェンダー？

ただの控え選手。戦術に合う合わないなんて、嘘。いや、戦術を変えさせるような、美緒や可憐みたいな選手じゃない、ただそれだけのこと。

戦術参謀？

コーチが私の提案をそのまま聞いてくれたことなんて、これっぽっちも記憶にない。むしろ逆。提案と真逆のことを、あの人はよくやる。

そしてそれが……成功する。魔法のように大当たりして、局面が打開され、

勝利する。

私の存在意義って、なに？

大きさにいえば、そうなる。

青春の一ページで誰もが惑うその問いは、しかし大きな問いである。

答え、死ぬまで見つからぬ人も多い。

いやそもそも、問うことすらせぬ人も、多いのだ。

聡明なはなこには、そんなこともわかつていた。しかしそれでもなお、問うことは無駄ではない、そう信じていた。

その辺、優等生である。やれば、なんでもできる。その絶対の事実を信じられるか否か……それは、なにごとにつけ進歩上達するための大きな資質である。はなこ、現状はともかく、その資質は、あった。

もーすこしななんとかなんないものかな……

勉強でも、サッカード。

なんかこう、局面打開できるような大きなきっかけがあればいいんだけど……いや、そんな当てもないことを考えてるうちは、ダメかな。自分でなんとか、しないと。

「……ちよう、委員長」

「え？」

クラスメイトに肘をつつかれて、我に返った。

「クラス、うるさいよ？」

くすくす笑いで、囁かれる。

面白がられてるのがわからないほど鈍くはない。けど、それで教室が静かにな

るなら、それでいい。

秀才だからか、あるいはそうだから秀才なのか、はなこは変に合理的だった。この合理性が女性には疎ましく、男性には可愛げが無いと言われることがある。だがそんな言葉には微動だにしない。

んなこと言われたって、私はこういう人間だもの。

そしてまたそれを口にし行動にするから、「委員長」と慕われ畏れられる。ガタリ。

立った。

それだけでもう、期待の視線を向けて、教室中が静かになる。

……座った。

「「ええ——？」」

「いいんちよーそりやねーよー!!」「はなこきーん!!」「「ここで一発ぶちかましてくれなきゃ、俺達が騒いでる意味がねえだろう!?!」」

「だって静かになつたんだから、それでいいじゃない」

「そういう問題じゃねえんだよ！ 俺達の熱いパトスは！」

「そうだそうだ!!」

「委員長の叫びが、あの魂を震わせるシャウトが聞きたいのさ!! なあみんな

ッ!!」

「「おおおおお!!」」

「いくぞ委員長コ——ッル!!」

あそれ・み・は・ら!! み・は・ら!!」

「「みつ・はっ・らっ!! みつ・はっ・らっ!!」」

……ちよつと、小腹が立ってきた。

なんてメンドクサイ。

というか、これってそもそも私の役目じゃないじゃない。

「はっ・なっ・こっ!! はっ・なっ・こっ!!」

まったく、ウチのクラスは子供なんだから。ううん、近頃じゃ小学生でもこんな幼稚なことはないかも。

や、ウチの学年は全体的に子供なのかな。チームでも2年は……というよりも、あいつ。

ピッチではあんなにカッコイイクセに、普段どこまでボケてんだか、というぐらいボケてる。まるで五歳六歳の子供。

あいつ……うえまちだいち上町大地は。

あんな子供みたいなヤツに、私は、いろいろ、負けてる。

思考とか、直感とか、プランとか、それから……：迫力とか。

私は、あいつより、まだまだ、足りない。

なにかもが、足りない。

それを考えるといつもイライラする。

焦る。

足りなすぎる、どこに向かっても歩いていない、自分に。

「みつ・はつ・らつ!! みつ・はつ・らつ!!」

……静かにしてよ、集中できないじゃない。

うん、私は……

えと、私は……

「はっ・なっ・こっ!! はっ・なっ・こっ!!」

ガタリッ!!

「BE QUIET!」

「Yeah——!!!」

拍手、喝采、大盛り上がり。

イエス、本末大転倒。

なぜ英語かと言え、こうして初めて場を鎮めたのが、英語の時間だったから。
真面目すぎるにもほどがある。

「BEE QUIET!!」

「みつ・はっ・らっ!! みつ・はっ・らっ!!」

「BEEEEE QUIEEEET!!」

「はっ・なっ・こっ!! はっ・なっ・こっ!!」

隣のクラス。

「……おい上町」

「はい」

「隣うるさい。なんとかしてこい」

「どうして僕なんですか、先生お願いしますよ」

「お前がチームの責任者だろ」

「プレーの責任までは持てませんよー」

「結果に責任は持て」

「腹でも切りましょうか？ たぶん現状になんの変化も見られません」

「頼りにならんやつぢやな」

「相手はおはなちゃんですよ？　僕が行っても怒られるだけです。だから先生が」

「相手は美原委員長だぞ。俺が行っても怒られるだけだ」

「頼りになりませんねえ！」

「廊下へ立ってろ」

「ええっ!？」

わははははははは……

ひとしきりこちらも、大盛り上がり。

写真屋

——さても、悪い噂が、ある。

ミラクルズの美しき戦士達のあられもない姿を写真に撮り、それを売りさばいて巨万の富を築き上げているものがある、と。

空堀三十六、からぼりさとる チーム・プロデューサーには、そんな真偽定かならぬ情報も入ってくる。

だが、真面目に耳を傾けようとはしなかった。

そのあたりは、彼が美少女揃いのこのチームの黒子を引き受けて以来、特に気をつけてガードしているところだった。部室も仕掛けカメラや盗聴器などを定期

的にチェックしている。

ありえない。

確かに、練習の前後で、解放感を好む蘭なりマキなりが上スポーツブラ一枚でウロウロしていることはある。マキに至っては油断すると下もサポ一（サポ一タ一一枚の意）というあられもない姿でいることもある。というよりヤツは油断すると簡単にスッポンポンになる。いつも誰かが慌てて止める。

しかし、それ以上はサッカー・ユニフォームである以上はありえない。透けもしないし隙間もない。というよりそんな写真があるなら今すぐここへ持つてこ…

いや。

そげなこつゆうとるばあいやなかとですたい。

三十六は自分と他人を誤魔化す際にネイティブの大阪弁ではなく余所の方言を借用する。言霊を大切にする文章家らしい配慮である。考え自体をどうにかしよ

うと考えないのもまた、文章家らしい得手勝手加減だ。

ともあれ、しつかりやつてる自信と自負もあつて、噂は聞き流した。

しかし、三十六は甘かった。

どんな分野でも「その筋」の人間というものは、目的に対し非常なる執念を持つて立ち向かう。それも、自らもその執念に一目置く親友に、足元を掬われることになる。

後ろ暗い事が発覚する時は、鮮やかである。

まるでその事実自体が、陽の当たる場所へ出たがるかのように。

——あるお昼休み。

はなこは、部室からの帰り道を体育館裏に取った。理由は特にない。しいて言

えば、日陰が多くて歩きやすそうだから。卓球部や剣道部の有志が汗を流していることもあるが、今日はその声も聞かない。

スタスタ歩いていると、少し前に、妙な光景がある。

地べたに座り込む男の子と、さらにその前にしゃがみ込む男の子二人。持ち前の好奇心が、頭をもたげた。

「グラス、置いてくるんじゃないかった」

ごく軽い近眼の目を細める。

CDケースのようなクリアボックスを弄りながら胡座をかいている男の子は…

…あら？

「……駒川君？　こんなところで、何を」

同級生の、こまがわたくみ駒川匠。

匠が聞けばがっかりするかもしれないが、はなこが彼を認識したのは、その手

の大きな物体からだった。

一眼レフカメラ。

彼は写真部のエースである。老舗写真雑誌の常連投稿者、授業中も含め、どこに行くにもあの巨きなカメラを両手に抱えている。腕は実に確かで、新聞部、天文部、美術部……それにももちろん学校行事、愛機を抱えヘルプに駆け回る姿は、ちよつとした校内有名人である。

もちろん、しつかり者はなこ、間違えるはずはない。少しくせつ毛気味の髪が面長の額に優しく掛かり、座つててもわかる長身に、ごく軽い度、ごく細いフレームの眼鏡。

“……やっぱり、駒川君だ。”

なにしてるんだろ。こんなところで”

と、しゃがみ込んで熱心に地面を見つめていた男の子が、こっちに気づいた。

驚く。慌てて、もう一人の肘を叩く。もう一人も驚く。二人してバネ仕掛けのよ

うに立ち上がり、飛ぶように去った。

“……なに、あれ？”

下級生らしき二人を見送って、はなこ、匠の前に来た。

「……あ、またどうぞ」

のんきな、だけどとても優しいような、ちよっぴり気弱そうな声の下から響く。

ケースの中の整理に夢中で、こちらは見ていない。

どうぞ、と言われたからでもないが、覗いてみた。

“……ほー……”

運命なんてものは、実にわからない。

例の噂話、三十六が誰にも話してなかったのがよかった。もし変な先入観があれば、真面目なはこのこと、ここで大騒ぎになつていただろう。匠、ついてる。

二人の前の地面には、薄手のビニールシート。その上に並ぶのは……

“みんなの写真……”

ミラクルズ・ピンナップス。サービス版サイズの、生写真だった。

まるでトレーディングカードのように、一人三種類ずつ。ユニフォーム二種、制服一種、背番号順にキチンと並べられていた。

はなこ、思わずスカートを膝に折り込んで、しゃがみこむ。

人間おかしいもので、こういう時誰でも、まず一番に自分を探す。

1番、忍様と3番、蘭の間に……ない。

……？

見渡せば端の方にはなんと、上町大地や空堀三十六までが居るではないか。なのになぜ私は。疑問は、訊いてみるに限る。

「ね、駒川君。として私のは無いの？」

ひよい、と在庫ケースから顔を上げた匠、いつものように優しげに微笑みながら。

「あ、美原さん。」

あのね、美原さんのは僕、納得のいく写真があまりなくて、それで今のところは販売休止にさせてもらっとうわあああああああああああ!!!」

わたわたと後ずさる。

手のクリアケースから写真が滝になつて流れ落ち、カメラが手からずり落ちそうになる。慌てて、肘を地面に打ちつけながらすくいあげた。

「いて、いてて、あ、あわわわわわ」

「？」

何をそんなに驚いてるんだろう。また、訊いてみた。

「……私の顔、何かついてる？」

「はい!? あつ、あの、う、ううん! ついてない! なんにも!!」

「ほんと？」

「うつ、うん!!」

バブルヘッド・ドールのような匠の首の動きに一抹の不安を覚えながら、視線

を写真に戻す。

カメラマン本人が納得いかないというのなら、私にはどうしようもない。代わりにみんなの分を見た。

最前列にはユニフォーム姿。戦闘中の「決めポーズ」が並んでいた。9番、

此花可憐。
このはなかれん

「あ、これ！ 『レイザードライブ』だ」

「え……あ、う、うん、そ、そう！」

左斜め前から右脚のシュートを撮ったショット。身体を二つ折り、背番号が大きく映え、突き出された右の足裏が見るものを刺さんばかりの大迫力。宙を舞う大きなポニーテールが構図上の面白いアクセントになっている。可憐によく似合う濃紺の2ndユニも効いてて、実に激しくカッコイイ。

「カッコイイねー！」

「う、うん」

さらに5番、和泉流乃^{いずみの}。

「……お、これもいいね！」

「あつ、えーっ……えつと、ちよつ、それはちよつとやりすぎたかも……」

流乃といえばその狂的なスピードが持ち味だ。左サイドを切り裂くその瞬間を、右サイドから望遠で狙ったものか。跳ぶようなストライド、顔を僅かに右後ろに向け、パスの出所を確認している。流乃好調の証、長い後ろ髪が水平に流れている。

やりすぎ、というのはたぶん流し撮りのことだろう。背景は全て水平に流れ、流乃だけがクッキリ浮かび上がっている。まるでF1か新幹線、凄まじいスピード感の演出。確かにマンガみたいだけど、流乃のイメージって、こんな感じ。

二枚見ただけで、早くも脱帽。

「上手だね！ 駒川君！」

「えっ!? え、えーつと……い、いや、いやあ……」

顔を真っ赤にして、俯いてばりばり、その長めの髪を掻きむしった。照れてるらしい。

匠の腕は見て聞いて知ってるつもりだったが、よく知る対象が写真になると一際わかりやすい。

「もう少し見ていい？」

「えっ!? あっ、もっ、もちろん！」

いい写真って、見てるだけで楽しいな。

写真に興味なんかまるで無かったけど、こうして見ればなるほど芸術だ。被写体の魅力を、グンと引き出している。あるいは実物以上に。

目がふと、10番に止まった。長居美緒ながい みお、キャプテンである。

「ブッ」

噴いた。

制服の二の腕で口元を隠そうとしたけど、遅かった。

写真の中であのおばちゃんは、きよとん、と小首を傾げ、人差し指を小さく顎に当てている。刺したるか、と思うタヌキ・フェイス。

“……これに騙されるのよ、男の子は——”

興味が湧いて、訊いてみた。もちろん、笑いを嚙み殺して。

「このキャプテンもいいね、かわいいね」

「そ、そうだね！ 凄く人気あるよ、その写真！」

「ブッ」

今度は早めに袖に顔を埋めて、事なきを得た。

“だー……やっぱ男の子って、基本的に馬鹿だわ”

その永遠の真実を確認する、と同時に、そうは言っても、これも美緒の得意技。

すなわち、美緒の魅力そのものを表現していると言えなくもない。

「そうだ。みんなに買っていつてあげようか」

見回すと、『ALL100円です』と丁寧な文字の書かれた小さな値札があった。だけど。

「……あ、おさいふ。教室」

「えっ？ い、いいいいよ美原さん、あの、えっとタダで！ 何枚でも！」

「そういうわけにはいかないわよ、だってフィルム代とか現像代とか掛かってるんでしょ？」

「あ、僕ほら写真部だから、現像はタダみたいなもんで！」

「手間賃だつてあるじゃない」

「被写体からお金取るカメラマンなんて、聞いたことないよ！」

「記念写真は全部そうじゃない」

「あー……そういえばそうだね」

「あ！ そうだ！ それよりほら、この写真、みんなに見せてあげてくれな
い？」

「え、ええっ!?」

匠、現在の状況をようやく思い出した。それはマズイ。ヒジョーにマズイ。

「い、いや、その、それ、それは」

「この写真だったらみんな喜ぶわよー！ ね！」

にこつ。

うつ。

匠、かがんだままのはなこに微笑まれ、詰まった。

み、美原さんやっぱり綺麗だ。

……じゃない！

健全極まりないといつても、黙って撮った写真だ。どんな責めを受けるか
しれたものではない。……といつても、ここで美原さんに見つかった以上、もうど

うすることもできない。

「ほらほら、行こうよ！」

制服の袖のあたりをくいくい、と引つ張られた。

ワケもなくカーツと顔が熱くなる。

「え、えつと、あの」

「片づけ、手伝うね」

はなこ手早く、その写真を重ねだした。思わず匠、慌てて手を伸ばす。

「い、いいよ美原さん、僕やるから」

「二人でやった方が早く終わるじゃない？」

言いながらすばすば片づけるはなこ。かがんで作業、はらり、と前髪が額に掛かる。ピンで留めてない方。それを左手の人差し指で耳の後ろに、掛けた。

ふわふわしたもみあげの薄い色と、えもいえぬ顎の美しい曲線と、柔らかそうな白い耳朶。

匠の右の人差し指がピクリと、反応した。

言うまでもなく、シャッターを切る動きである。

“こ、こんな時に何考えてんだ僕……”

だけど、こんなピンチでもシャッターチャンスのことだけしか頭がない、それはちよつぱり、自分が誇らしかったりも。

そこばかり見ると、すつ、と明るい栗色の宝石が目に入る。

はなこと、眼が合う。

「……どうしたの？」

「あつ、あ、ご、ごめん！ み、見とれてた」

「なにに？」

「わ、わあああつ!! いやつ、あのつ、あのつ！ いや、なんでも！ なんでもおお！」

「……変な人」

こんな時に何考えてんだ、駒川匠。

∞

「匠、おま……」

「……い、いや……その……」

呆れてものが言えない空堀三十六。その前で突っ立ったままちいちゃーくなってる、駒川匠。その周りには……

「あん、カラン、そんな怖い顔せんでええやん、写真見よやん」

難波鳴海。なんばなるみ 夫婦漫才コンビ、亭主の機嫌には敏感。

「そうだね、駒川君の写真だもの、きつといい写真」

長居美緒も気をきかす。和泉流乃はこういう時、まず日和見を決め込む。

天満蘭は物事が動いてから反応する。堺愛は……何を考えてるのか、いつもわか

らない。そして、何も考えてない人も、居る。

「ああ、そういえば記念写真とかあんまり撮らないもんねえ、ウチのチーム」

上町大地。ミラクルズ・コーチ。ミラクルズ2年生、ご一同。

「うん、いい写真だよ。ほら、駒川君」

「う、うん」

はなこに促されて、匠も腹をくくった。さつき畳んだ店を、また開く。パラパラパラ……

「わー!」「おおー」「へええー」「おー」「おー」「ほー」

匠の不安を吹き飛ばすかのように、感嘆の声が上がった。わいわいと手にとつて眺める。やつぱり、みんな気になるのは自分の写真。

「おほほ、これええ感じー！　ウチかつちよええー！」

ナナが自分のドリブルを掲げてはしゃぐ。舌を小さく出し、DFを挑発する笑みさえ浮かべ、足元のボールをどう料理しようか思いを馳せる。サッカー雑誌の表紙も狙える、見事な一枚。

「これとかほら見てみい蘭吉、めっちゃエエで！」

「ん。……あはは、ホントだね！　うひひひひ、て、照れるよ」

蘭も珍しく、その大柄を縮こめるように両腕を前に笑った。

ゴールライン上、キーパーも取れなかったボールをクリアした後か。会心のプレイに拳を握り、吼えている。実に頼もしい。

「あのね、るーのはこれとかどう？」

はなこが差し出すのは、きつきの流し撮り。

「ん？ ……あははははははははは、こつ、こんなのなに、アニメヒーローじゃあるまいし、あははははははははは」

「どれどれ……わはははははは、これ、これエエで流乃！ これ最高！」

「なになに、あ、あはは、るー、これがるーだよ！ 光速サイドアタッカー！」

「そ、そんなことないってー！ これヒドイよこれー！ あはははははははは」

気分屋の流乃にまで馬鹿笑いされては、三十六にも怒りようがない。楽しそう
なみんな、愛も眼前3cmに自分の写真を掲げ、舐め回すように見つめている。

匠と三十六、普段は仲がいい。

文藝部時代、三十六が脚本を書いた演劇部の舞台を、記録していたのが匠だった。それ以来。

三十六はプロが好きだ。やさおもての匠がいざや写真機を構えると、そこだ

け空気が引き締まる。「本物」の風情が漂う。一方、夏休みの読書感想文に一週間かかる匠にとつては、分厚い脚本を数日で書き上げる三十六は、魔法使いのよう to 思えた。

「……つたく、女の子ってなあ、自分が好きだねえ」

「カラのもあるよ、ね、ほら、駒川君」

「は？ 俺？」

「うん。えーつと……はい」

「……おわ、なつ、なんだよこれ、一体いつ撮ったんだよ」

と言いつつ、緩む唇と頬。

そこには、実にきりりとした眼差しで、観客席からピッチを睨む三十六が居た。試合中の一コマ、いかにもチームの黒子役、その仕事熱心っぷりがにじみ出てくるようだ。やや俯瞰、嫁言うところの「知的な目」、切れ長の眼と長い睫が伏せ

がちに見えて、自分で言うのもあれだが……

「……俺、かつこええな」

「見して見して……うわ、ひどい！　こんなアンタちゃうやん！　なにこれ、どこの男前！？　こんな人ウチ知らんわ！」

「アホ、俺以外にないやろ、いやあ、カメラは正直やなあ！　こらエエ写真や、さすが匠」

「現金やなあ、さつきまで怖うわい顔しとったくせに！」

「はは……うん、その写真も人気ある」

「「えっ!？」」

驚きは二人分。三十六とナナ。

「俺の写真が、人気ある？」

「うん、新作が出ると、二〇枚ぐらい出るよ」

「「二〇枚!？」」

ということは、空堀三十六の写真を欲しがる人間が、この学校には二〇人近く居る、ということだ。

「……ほお。」

「ちょーあんたー、なにニヤけてんのん!？」

「いやあ、ヴえとうにい。」

……匠、確認するけど、女の子やんな」

「うん、ほとんどは」

ほとんど、というところに微妙にひっかかるが、細かいところはこの際まあ良
い。

「世間には物好きも多いもんやな!」

ナナ、その物好きの筆頭みたいなものだが、心中穏やかでない。で、煽るよう
な質問を試してみる。

「なあなあ、たくみん、ウチのはもーつと売れんねんやろお!？」

「えと、難波さんはやっぱり人気あるから、かなり。いつも一〇〇用意して、ちようどぐらい」

「ふふん」

「そうか、二〇も出ますか、そうか」

「匠ちゃんの話聞け——!!」

「アホかお前、ミラクルズの司令塔言うたら『義経千本桜』で言やあ弁慶みたいなもんやぞ!? そんな主役級と舞台裏走り回ってるしよばこい演出屋との差とは思えぬ好数字やな」

「ぐっ」

なぜ最近男の子の人氣が下降氣味か言うたらアンタのせいやん、と言いたかったがグツと堪えた。それ自体言えば負けである。

「たくみん、ウ、ウチそない人氣無い?」

「そんなことないよ、『中の上』って感じかな。難波さん絵になるプレーが多い

から、女の子もよく買っていくよ」

カケラも慰めになってない。

「うううう……」

「なんやねんお前、別に男に人気なんかなくたってええやろ？　なに気にしてんねん」

「べ、別に気にしてないけど、なんかで誰かに負けんのイヤやん」

「なんや、そつちか」

「なにい、ちよつとジェラってくれたん？」

「まあ」

「ううーん、なんやーん、そんなこと思ってくれんでええのにーん」

人差し指で三十六のシャツの胸のあたりをしわしわにするナナ。これ以上進むと昼休みの教室には似つかわしくない光景が現出しかねないので、美緒が話題を変えようと口を開きかけ、

「じゃあ」

大地に取られた。大ちゃん、国から記念物に指定されているアホ、すなわち「それだけは」ということを言っちゃうやっちゃう天然物、一番訊いてはいけないことを、訊く。

「誰が一番人気？」

ぴしーん。

ストップ・ザ・ワールド。

だって女の子だから。

やっぱり気になるから。

誰が、誰が一番人気があるのかつまり、

誰が一番、可愛いのか。

匠、三十六に助けを求める視線を送った。三十六は眉間に指を当てたまま動かない。「自分で考えろ」。ずるい。

匠、ものすごい血流が側頭葉のあたりを走りに走るのを感じた。
そうだ。

事実だ。事実を述べればいい。

事実には、僕の責任はない。

「……上町大地……」

「「ええ——っ!？」」

「あつはつは、そりゃオモロイ!」

「ボ、ボク？」

顔面ぐしゃぐしゃにする女性陣、一人ケタケタ笑う三十六、意味がわからない
大地。

「うん。いつも三〇〇じゃ効かないね」

「学校中の女性の視線釘付け、つてことですよん旦那。さすがですなあ！」

「そ、そういうことなの？」

「そうでもないよ、大地君の写真は、男の子にも人気がある」

匠も、そこそこ天然物らしい。

「ま、まあそれもまたカッコイイ、憧れつてこつちやね。

羨ましいですなあ、なあ、ナナ！」

「いや、ウチらが今訊きたいのはそういうことじゃなくて」

「素で返すな！」

三十六の頑張りは今一步及ばない。

「選手で誰が、つちゅーことやな」

睥睨するナナ。匠の言葉をかなり真剣に待つ美緒、流乃、蘭、愛、ただはなこだけが関心無いのか、ずっと写真を繰っている。

しょうがない。ここも正直に行こう。

だって事実には僕の責任は……

「……えつと、えー……枚数で言うと、天王寺さん」

「「……」」

沈黙が支配する。やはりその辺か。

しょうがない。ヤツは確かに美少女だ。立ち居振る舞いも実にキュートで可愛らしい。確か個人サポーター・グループの人数が一番多いのも、ヤツだ。

「これとか？ これカワイイ」

はなこ、話はちゃんと聞いてるようで、ストックから写真を一枚抜き出した。

登校途中だろうか、制服、バストアップで零れんばかりの天使の笑顔。これは女の目にもたまらない。ピントぴったし、両翼にぼかしたエレと可憐を引き立て役に従える、パーフェクト・ショット。

「あ、うん、これ、ロングセラー。累計枚数、一番多いかも」

「「むむー」」

「こ、こんな奇跡のショットはずっこいやる。つ、次は誰なん」

「次は、えーつと……西九条さんかな」

「「……」」

ま、まあ、はっぱも人気あるだろう。実物にはかなり振り回されているんだけど、置物として見るならあれほど素晴らしい日本人形はない。

「……はっぱだと、これ？」

またはなこが抜き出した。

「あ、うん、そう、これが一番人気ある写真だね」

これもいい。交差点だろうか、登下校中、制服姿。引き気味全身、腰を捻って振り返った瞬間。そう、名画「見返り美人」の構図。膝つき合わせた細く長い足、両手で持った鞆の位置、そしてフツ、と振り向いた静かな表情。顔身体の造形の良さが抜群にアピールされる、素晴らしい写真だ。

「むむむー」

やっぱり男の子は、ああいうのがいいのかしら。

「やっぱり、乳はない方がええんかなあ」

「いや、そのファクターの影響はすごく限定的だ」

「ということは、次はくーちゃん？」

「和泉もまたそんな失礼な」

「えと、次が、えーつと、あそうそう、たぶん堺さん」

「やっぱりそこかー」

おほほほほ。

声は立てずにシルクのハンケチで唇を覆うプリンセス。しかし、その上の目は誤魔化しようもないぐらいめちやめちや笑っている。

後は、残念、というため息をついたり、天井を見上げたり。

「あ、でも」

匠、フォローも込みで、いろいろ思い出してみる。

「和泉さんは予約が一杯入るね。きつと情熱的なサポーターが多いと思う」

「ほ？ 予約？」

「うん、一試合終わると新作を出すんだけど、それを予約する人。出来も見ずに、和泉さんの写真が欲しい人、だね」

「ほー……あ、そ」

そう言われれば悪い気はしない。

情熱的サポーター、あたしにぴったりじゃん。

思わずにたつと笑いも出る。

「あと、天満さんは下級生かな。特に女の子。女の子のサポーター多い人も何人か居るけど、うん、あと、ユニフォーム姿が売れるね。やつぱりプレーがカッコイイんだと思う」

「えへへ、そうなんだー」

またさつきのように身体を縮めて大型犬のように照れる蘭。

確かに彼女のサポーターには、慕う、という表現が似合うかも。

「意外だね、蘭が女の子に人気なんて」

「あー、そういえばボク、中学の時にチョコレートとかもらったことあるよ」

「えー、ホントに!？」

「うん」

「へえ、案外、写真一枚が実情をあぶり出すもんだねえ」

「じゃ駒川君、私は？」

「長居さんのファンは……えーつと……」

変

「「わはははははははははは」」

「へん!？」

「だってほらほら、見てみこの写真！　こんな写真、今時買うヤツおらんで!」

ナナが指すのは、さっきの小首かしげである。

「長居さんのファンは要望がすごいんだ。とにかく、あんな感じでこんな感じで、こんな写真ないかあんな写真ないかって、一番うるさい」

「むー」

それは一体どういう意味？

生の姿、普通の姿、これではいかんとても申されますか。

「で、ようやくそれが撮れたら、そればっかり売れて」

「むむー」

美緒、自分で自分のそれをしげしげと見つめてみる。

確かに駄目だ、これは。

どこでこんな隙を。

さすがにこんな、私だって自然には出ない。しかし出す時は計算ずくで出してるはずで、駒川君などという外部の者がいそうなところで出した記憶はないん

だけど……

そういうタガが緩んでるのかな。

いやいや。そうじゃない。写真は嘘をつかないはず。

実は私は……

「いつもこんな風に可愛いのは、私」

「早退するか、みーちゃん。なにかしら沸いてんで」

「何をおっしゃる。だってほら、こーんなに可愛い」

「自分で可愛い可愛いゆうな！」

「でもこれ、良くできてるよね、ほんとに。ふふ」

はなこが、その写真を美緒の手から取って大地に渡した。美緒を一番よく知る人といえ、まあ、客観的には、この人だ。

「どれどれ……うん、とっても可愛いね」

「でしょおお!?」

勝った。

かなり勝った。

心身共にガッツポーズの美緒。宙を舞う周囲。

まず宇宙遊泳から戻ってきたのは、比重の重いナナ。

「大吉！ 肝心のあんたが騙されててどおすんねん！ あんたこそ一番その化けの皮の下を知ってるはずやろお!？」

「うん、まあ、これは化けの皮なんだけど、化けの皮が可愛いのは、事実で」

「「だー」」

今度は地面を転がってみる。

いつも思うんだけど、我々はたぶん「リアクション甲子園」みたいなのがあれば、サッカーより簡単に全国を狙える。

「せやから!」

「くくつ。ま、まあ」

大地から写真ひったくった流乃、笑いながら。

「みーからこの化けの皮を剥いたら、ただの料理バカ鬼キャプテンじゃん」

「るーもひどいこというねえ」

「長居さんは、普段は怖いキャプテンなの？」

「うん、めっちゃこわい」

駒川の間の抜けた問いに、流乃ナナ二人で答えた。

「なにを言うですか、普段からこの写真そのままの可憐な少女ですよ」

「「ブツ」」

噴いたのは、はな、愛、蘭。

「なぜにそこで噴くですかー」

「どつちにしろあかんで、この写真。嘘や。完璧な嘘や。たくみん、今度素顔のキャプテンを撮らなあかんで。エレあたりがパスミスして、煮えくり返るハラワタを嘘笑顔で固めた写真とか」

「あとラストパス通す時の人殺しそうな視線ね」

「だから写真家の先生がお撮りになつたこんなステキな写真以上の真実はどこにもない」と

「まあそしたら……」

ヘラヘラ笑つていた三十六、ちよつと真面目な顔に戻つて、腕組みをして、ゆつくりと言葉を継いだ。

「また、近々、匠に思いつきり撮つてもらふことにしよか。みんなで」

「お」「さんせーい」「それええな!」「いいよー!」「こくこく。」

「いいよな、匠」

「そ、それはもちろん!」

「ただどあの、三十六……」

「ん?」

驚く匠が、まず大慌てで答えて、少し、もじるように。まるでママに何かを

尋ねる、小さな男の子のように。

「怒ってない？」

「はは。

いやまあ、最初はちよつと引つかかったんだけどさ、こうしていい写真見せられて、それでみんなが喜んでるのを見るとな。

ていうか、写真撮りたきや俺か大地に一言言ってくれりや」

「……あの、実は……」

とんとん。

言いにくそうにする匠の肩を叩いて、近くから持ってきた椅子に座らせてあげるはなこ。はなこにしては優しい気配り、流乃、こつそり驚く。

“……珍しいねー。こういう話じゃ、いつも一番攻撃的なのに”

匠の横に立つ姿、まるで保護者のお姉ちゃんかなにかだ。

「金取つてたのが後ろ暗かった？」

「あ。えーつと、うん……」

まあこの辺は三十六はさとい。さらに小さくなる匠に笑って、続ける。

「何十万と儲けたんだろー」

「「ええっ!？」」

「……えと、うん、まあ」

「そらあかんで、匠ちゃん! そんな、学校でお金稼ぎなんてまっとうな高校生のやることやないで! 九・一やな! もちろんウチが九」

「バカモノ」

身を乗り出すナナを押さえて、三十六。

「使い道は……というかまだ使っていないと思うんやけど、カメラや。な、匠」

「う、うん。そう。……やっぱり、バレてる?」

「つたりまえだろ、お前最近ずっとパンフ持ち歩いてるじゃないか」

「う、うん……」

「カメラって、だってそのカメラだって」

流乃が指さす、匠の得物。黒いその巨大な物体は、手入れの丁寧さ、つまり匠の性格を物語る様に、鈍く輝いている。

「高級品じゃないの？　すごいゴツイんだけど」

「和泉、さすがご慧眼。これはこのメーカーのフラッグシップ・モデルだよ。世界中のプロが使ってる」

「じゃ、どうして」

「……これの、デジタル版が出たんだ。『J1』ってモデルで、これが凄いカメラで……」

「なんとたつて35mmフルサイズ画像素子、レンズ資産がそのまま使える。素子の素性の良さと画像処理エンジンの先進性がずば抜けた画質を生み、強力なバッテリーと膨大なメモリで、連写能力秒間……」

「あーもー、細かい話はエエねん、それって、そんな何十万もすんのん!?」

「定価一〇〇万」

「ひゃつ、ひゃくまん!？」

「うひょー」「へーつ……」「……」「おー」

いや、一〇〇万円も凄いのだが、それを自力で稼ぎ出そうという匠の意気込みにも、心動かされた。確かに、肖像権だなんて小うるさいことを言い出さなければ、自分で撮った写真を売って稼ぐ、これ以上彼に合うお金の稼ぎ方もないだろう。

「……プロの方も、今や仕事はデジタル一眼でなきゃ、って感じなんだ。そろそろ始めなきゃ、と思って焦っちゃって……」

すいません」

深々、頭を下げた。

そうされると、こっちもちよつと困る。

どちらかというと、楽しませてもらってるし。

だけどもあ、チームの中にはひよつとすると、こういうの嫌がる人もいるかも……

と、意外な人物が匠の肩を叩いて、口を開いた。

「ま、少なくともこのみんなはいいと思ってるし、そんな気にしなくてもいいんじゃない？ あとはお金の話かな。そこはど？ プロデューサー」

はなこだ。

悪事を見つけた委員長のセリフではない。

「うーん……」

普通、こういう時に話をまとめるキャプテンより早いはこのフォローに驚きながら、三十六は思案した。ロイヤリティを取るか、いや、友達にそういうのも水くさい。あるいは……

キンコンカンコン……

ちょうど、予鈴が鳴った。

三十六も匠の肩を叩きながら、立ち上がる。

「ん、まあ、ちよつと考えるわ。匠、よかったら、放課後部室へ来てくれ」

「わかった。必ず行くよ」

「オーケー、以上解散」

「なーなーたくみん、写真何枚か貰ってええ？」

「あ、もちろん、何枚でも。みなさんも」

「ほなウチ、これとこれとこれとこれとこれとこれと……」

「お前店開くつもりやろ！」

「ドキー」

「あははははは……」

笑顔の理由は、ナナのギャグだけじゃなく、手にした自分の写真にも。

人を幸せにするのがイイモノなら、匠の写真は間違いなくイイモノだな。

三十六が感心していると、ふと流乃と目が合う。ニツタリ笑って、親指の先は、

明るいショートヘアの後ろ姿。ニツタリ、同じ目で笑い返してみる。

さつすが和泉。こーゆーことはよく気がつく。

「……おかしいよね？」

「よな」

「なんだろあれ」

「春にきまつてんだろ、はな咲く季節がきたんですよ」

「上手いこと言うね……でも、あんまりそれっぽくないな」

「まだ気づいてないんだよ……両方。おはなちゃんの写真、無かつただろ」

「無かつたよね」

「あれきつとあれだぜ、『ぼ、僕の腕では美原さんの美しさを写しきれないよ…

…ど、どうしてだろう』」

「うひひひひ。『ふ、普通に撮ればいいんじゃないの？ 私、そんな可愛くもな

んともないし』」

「委員長言いそー」

「あはは、なんかおもしろい」

「和泉、案外野次馬だなー」

「なにになに、なに二人で内緒話してんのん!？」

「いや別に。コンビ解散の危機について、ちよいとね」

「ま、あたしは誰とでも組める器用な芸人だから」

「そんなセリフ言つてると、写真予約してくれるサポーターが夢から醒めちゃうよ?」

「ふふ。じゃもうちよつと刺激的な写真でも撮ってもらって」

「あかんあかん、それは焼畑農業や。限られた量食いつぶして終わり……いや待てよ、刺激的な写真、か」

「てのは冗談だけど」

「ちよーなんなん、なんなん、なー」

「あ、授業授業。ほら行くぞ」

「あ、ちよつ、カラちゃん待ってえな」

ナナカラを見送つて、流乃、もう一度自分の写真を見てみた。例の流し撮りは文句言いながらも気に入っていたが、制服のそれは今ひとつ。ツンとすまして、変にアンニュイな表情。あたしなら、もうちよつとアクティブなのがいいんじゃない？

“……なんて考えちゃうのがすでに、タクミ・マジックに掛かつてる証拠？”

この和泉流乃が、写真一枚、気になるなんてね。

それにもまた、一人クスクス笑つて、跳ねるように教室に向かった。

部屋にて

「新着ですー」

「おーこつとんサンキュー！ どだった」

「うーん、見るべきものは特に……あまり面白くない試合でしたー」

「なんだよせつかくの黄金カードなのに……ま、一応早送りで流してみるか。みんな来るまで」

「ん」

うなづく大地、三十六、マネージャー・住吉^{すみよし}古都^{こと}から受け取ったテープをセ

ットする。

古都には、世界の注目試合をチェックするという役割がある。ワールドクラス

のプレーに触れ、いいイメージを持ち、あるいは盗めるアイデアは無いものか……コーチ、上町大地が一週間に観る試合の数は、一〇や二〇ではない。

——W杯南米予選、ブラジル対アルゼンチン。この両者の対戦は常に白熱の真剣勝負だ。

一〇分ばかり流して、三十六が口を開く。

「ややブラジル？ ボランチが目立つな」

「そこだけだね」

斬って捨てる大地。サッカーになると、厳しい。

「アルゼンチンが駄目なんだ。このブラジルのボランチを潰せばぐつと楽になるのに、サイドアタックにこだわらすぎてる。DF前バイタルエリアほつたらかしだし」

「ウイング置く3トップか……これでここんとこ結果出てないんじゃないかなかったわけ」

「監督自身の人気と支持は高いらしいから」

「ウイング置くのは格下にはいいですが、同格を相手にすると途端に厳しくなりますね」

「ウイングは攻撃専任みたいになっちゃうからね。１トップでも三人も守備をしない人間が出ると、ボール回収がかなり困難になる」

「あ、またボランチが取った。落ち着かせて……長いフィード、で、サイドバックが走ってる、と。そして中へ切れ込んで……シュート」

はずれた。

「対するブラジルはブラジル式、か……」

大地、癖のようにして腕組みをすると、もういい、といわんばかりに椅子の背にもたれた。

「ブラジル式？　といいますと？」

怪訝な顔の古都が尋ねようとすると、部室のドアがガチャリと開いた。ドヤド

ヤと、声と人影。

「もどりー！」

「おつかれさま」「おつかれー」「おつかれさまでしたー！」

今日は軽い調整日、ランニングと何種類かのボールタッチを終え帰ってきたのはナナ、流乃、美緒、それにはなこ。が、目ざとく見つけるTV。

「……南米予選？」

「そう。久しぶりにブラジル式4バックが見られるよ」

「ふむ」

はなこ、作戦参謀の顔になる。

「意地でもやりたいのね。オランダの4―3―3やスペインの4―5―1と同じ。そんなにいいものなのかな」

その美しい眉をひそめるはなこ。古都、尋ね直す。

「あの、ブラジル式って、どういうものですか？」

「「えつと」」

「……美原参謀から」

大地が笑って、はなこに譲った。

「はい」

はなこは、いわゆるガリ勉タイプ。ゴリゴリの力尽くでまんべんなく点を取る。その土台になっているのは、豊富な知識と論理的整理能力。そしてそれこそ、参謀としての高い資質である。

「基本は中盤ダイヤモンドの4―4―2。うん、ウチのDD（ダブルダイヤモンド）を想像してくれればいいんだけど。スタメンも、いつものメンバーね」

「はい」

D F 右から、明日葉、蘭、もも、流乃。

M F 底、美緒、右サイドナナ、左サイドエレナ、トップ下ありす。

F W 胡桃、可憐。

「で、そこで中盤底、菱形の下の点に居るキャプテンが、DFラインに食い込む。

と同時に両SB、右の明日葉と左の流乃が、グツと位置取りを高くして、WB

サイドバック

ウィングバック

の位置まで上がる。すると、

DFライン、右から蘭、キャプテン、もーさん。

MF右ワイドに明日葉、ボランチにナナ、エレーナ、左ワイドに流乃、トツ
ブ下あります。

3―5―2になる」

「おゝ」

「3バック系のサイドアタックと、4バックのサイドディフェンスを両立できる、
つまり3バックと4バックのいいところを取って悪いところを消せる」

「すごいですね、さすがブラジル!」

「ふふ。そう、さすがブラジル。欠点は」

「サイドバックの位置取りと意思統一が難しい？」

「さすがこつとん、技術的にはそれが正解」

はなこが限定的なまるを出した。さらにいい解答に挑戦する。

「それができるボランチがなかなか居ない？」

「確かに、ウチでやるとなると私かナナになるね。エレにはまだちよつとCB

センターバック

真ん中は厳しいから」

「キャプテン勘弁してーや、長い蹴れるから言うて後ろへ後ろへ持つていくの。確かにそれもあるんやけど、まあ、CB系の人間なら長いフィード得意なのも結構おるから、それだけやないね」

「うーん」

考え込む古都に、はなこがヒントを出した。

「要するに、セレソン・ブラジレイラ（ブラジル代表）でしか、このフォーメー

ションを見ないのね。つまり……」

「セレソンにしか、できない？」

「……挑戦したことは、無いけどね」

と言う大地を見ると、口元には笑み、目元には鋭い光で、TV画面を凝視している。みんなも思わず釣られるように、画面を見やる。

上町大地は、戦局と戦法によって、めまぐるしくフォーメーションと選手を変えるコーチである。それにより目的と意図をはっきりさせているのだが、逆に言えば、そんな指示が無くとも、局面局面で人数や位置取りを自分達で自由闊達に変えていけるチーム、それが理想だ。

世界最強のセレソンは、それを具現化している、とも言える。

——またボランチにボールが入る。ルックアップ、開いて高い位置取りの右WB（右SB）を走らせる。フォローする右ボランチ（右攻撃的MF）。右WB、

トップ下へパス。トップ下、左へ流れて、真ん中へ走り込む右ボランチにパス、そこを読まれて、クリアされる。

防御されたが、流れるような高速攻撃だ。おそらく純4バック系だと、あそこまでSBを高くできないから、今の攻撃をやるには一人足りない。

ミラクルズは3バックもよくやる。その時の流乃やマキのサイドアタックがどれほどの武器になるか、みんな骨身に染みて知っている。もし、いつものフォーメーションにこの鋭いサイドアタックを加えられたら……

「……キャプテン」

「はい」

「やれるか」

「命令ですか」

キャプテンの真剣な表情、コーチは目も合わさない。

やりたいわけではない、ということだな。

ようやく、見た。笑う。

「負担が重い？」

「それはいつも」

美緒も笑って、続ける。

「それよりも、私の好きなスタイルじゃない、かな。私は走り回るのが好きだから。これ、だと、上下はともかく左右には動きづらいよ。CB真ん中の職務を放り出すわけには」

「なるほど、理解」

大地、もう結論は出たようで、厳しい顔ではない。

「ま、みーちゃんが好きやない、ゆうんやったら、これは無しやな。念のため言うとなつけどウチも嫌やで」

「正確なフィードと守備力、それに戦況を冷静に判断する戦術眼、あとは度胸……なかなか、難しいですね」

「コーチ、ブラジル代表を見て、真似したくなつた？」

「まさか」

茶々を入れる美緒に、苦笑する大地。

「セレソンのように、自分の判断でどんな形を崩していく姿が理想的だな、と思つたのと、あとは……明日葉をもう少し走らせられたら、つてね」

「あー……なるほど」

明日葉といえば守備専任、チーム屈指の守備力でガツチリ守る右サイドバックだが、実は脚も速ければ、ドリブル・クロスも速く正確。彼女が左の流乃のようにガンガン攻め上がることができるなら……これは強い。

このブラジル式なら、それができる、かもしれない。

しかし、もし明日葉が攻めるならバランスを考えなければならぬ右MF・ナナが難色を示す。

「せやけどはつぱはまずディフェンスやで。たまーにウチが中へ切れてる時にオ

ーバラップしてくれたら御の字、つてぐらいで。あんまり欲こくと、ええことないで」

「確かに」

「私が下がった時に、単純な5バックじゃなくて、こういう気分もありますよ、つて感じでいいんじゃない？」

「そうだね」

美緒のフォローにうなずいて、大地、もう一度画面を見つめた。

これは、ブラジル代表である。世界の頂点に立つ銀河系選手達の、オールスタ

ー・チーム。

“……最近、『欲こき』すぎだな”

——コンコン。

ちょうどそこに、ノックの音。

「あの、駒川です」

「おー、入れ入れー」

「失礼します」

三十六が大声を出すと、その長身をかがめるようにして、匠が入ってきた。

「こんにちわー」

満開の笑顔で応対するマネージャーの鑑。三十六がお互いを紹介する。

「こちらこつとん。1年で、マネー……知ってるよな」

「うん」

「こつとん、これ、駒川匠。見たこたあるだろ、我らが学園が誇る名キャメラマン」

「はい、もちろん！ 新聞とか、旅行の写真の貼り出しとかでお名前は」

「そ、そうですか」

ぱりぱり、とまた頭を掻いた。照れるとこれが出るらしい。三十六、そこでニヤリと笑って。

「今日、ミラクルズと専属契約を結んでくれたんだ。これから毎試合、みんなの勇姿を写真に収めてくれるってさ」

「うわあ、ホントですかー！　すごーい！！」

「え、ええっ!？」

「な!!　たくみ!!!」

「あ、あああ」

「いやー、たくみに写真撮って貰えると思うと力が出るなあ」

「試合後の楽しみも増えるよね」

「ありがとう駒川君」

次々に埋められていく外堀。

「えーつと、その代わり匠先生のお写真はミラクルズ公式写真ということで、こ

の私めに販売等々のやり方を一任していただきたく」と

「えつ、えと、それは全然いいけど」

匠、いろいろ考える余地もなく、三十六のペースに巻き込まれる。

「まかせろ、悪いようにはせん。売って売って売りまくって、J1買うちやるきに。レンズもエエの買うちやるきに」

「うん、あの、元々ちよつと後ろめたかったんだ。今までの分も返すよ」

「うほ！ ええんか！ ちゅーてもまあ、それもおいといてカメラ資金にしよや。よし、交渉成立！ いやー、お前が居てくれれば助かる！ な、こつとん！」

「そうですね！ 私と空堀先輩だけだと、忙しくて記念撮影も手が回らないぐらいで。よろしくお願いします！ 駒川先輩！」

「え、あ、はい、えつと……」

よろしくお願いします」

それでもう、決まりだった。

古都はどういう時、実に決定力がある。チームに欠かせぬ得点源。

「あは、駒川君、こつとんスマイルに負けてちゃダメよ。いくらでも貢ぐはめに」

「そうなんだ」

「はなこ先輩ひどいですー。この自然な笑顔のどこが作り笑顔なんですかー」

「作り笑顔だなんて一言も言っていないよ」

「あ」

「「あはははは」」

なんか……ミラクルズって楽しいところだな。

あの激しい戦いっぷり、フィルムに映える強い表情の戦士達、もつと厳しいチームかと思っていたけど。

「ふふ。あ、そうだ駒川君、こつとんにも写真、見せてあげて。いい写真あるでしよ、こつとんなら」

「あ、うん。部室から、アルバム取ってきたよ」

「わ、もう私の写真があるんですか？」

匠が大量のA4紙アルバムを取り出した。一人一人の名前がネームシールで几帳面に貼られている。

「うひゃー、駒川君几帳面」

「写真はその都度整理しないと、ホントにどうしようもなくなるから……」

「駒川君、A型？」

「ううん、ABだよ」

「ABって天才肌だよね。やっぱり芸術家向きかも」

「芸術家なんて、そんな……」

『住吉古都』。そのファイルを、広げてみた。

「どわああああああ」

一枚目の写真を見てのけぞる2年生一同。

古都が、ステージに立っている。

伝説の文化祭の写真だ。ど派手なフリルとりボンだらけのアイドル衣装、マイクを持って笑顔全開。

こつとん・ファンで超満員の講堂で、マイナーアイドル・ポップスを大絶唱して、マイクが壊れて、アンプが壊れて、ライトが割れて、気絶者二桁。犠牲者救出に向かった保健委員チームが、二次災害で次々に倒れた。

古都の歌は、人を殺せる。

「どうしてのけぞってるのですかみなさんー！」

「たつ、匠、お前、これ、この位置にいて、き、聞いてなかったのか!？」

「あつ……えーつと、あの、住吉さんごめん、僕、カメラ構えると他のこと考えられなくなつて……」

「豊田商事事件を黙って見つめ続けたマスコミ陣みたいなもんかな」

「ロケット弾飛んでる戦場でカメラを回し続けるジャーナリストと同じね」

「なにをおっしゃっておられるのやら」

「しかしよー撮れてんなあ、これもー！ ホンマ写真が音出さんでよかったで！」

「むー」

なんとなく引つかかったが、古都、その写真を見た。この衣装はちよつと派手すぎかと思っただけ、こうして客観的に見てみれば……

「……へへっ」

「あ、笑ってる笑ってる。自分の可愛さに酔ってるで」

「ち、ちがいますう！」

「こつとん、ええねんええねん、ここにおられるお姉さま方も先ほど散々自分の可愛らしさに酔っぱらっていらっしやったから」

「「なによー!!」」

「こつとんも人気あるだろー」

「そうだね、1年では天王寺、西九条の両巨頭に次ぐ三番手かな」

「むっ」

「おつ、ムツとしたムツとした、なぜ負けてますかという顔やー」

「ち、ちがいますう!」

「こつとんエエねんエエねん、ここにおられるお姉さま方も先ほど散々誰が一番誰が二番って大騒ぎされていらつしやったから」

「「なによー!!」」

「たぶん、住吉さんはユニフォーム姿の試合中がないから、それで随分損してると思う。そこだけの差だよ」

「コーチ! 私、試合出ます!」

「「あはははは……」」

笑う場だが、古都は割と真剣。そんなこと聞いて黙っていられるほどプライドの低い女じゃないもん私。

「じゃせめてユニフォーム着た姿だけでも駒川先輩に撮ってもらったり……」

「ああそうそう、それで思い出した、大事なことを」

ポン、と手を打って三十六が立ち上がった。咳払い一つ。

「コホン。えー、こつとんには悪いですがそれはすこし待っていただいて。次の金曜……」

2年生の撮影会やりたいのですがー！」

「おお——!?」

もちろん拒否する理由などなにもない。大ウエルカムである。

「ああつ、2年生だけなんてずるいですう！」

「待ってこつとんこれには理由が。つまりそれを写真集にして売りまくりたいと考えておるわけだが……三分冊なら利益三倍！」

「おおつ！ さすが悪徳プロデューサー、悪知恵だけは世界一！」

「わつはつは、せや！ 金は絞れるところから絞り取るんや！ 世の中ゼニや！ 銭や銭や銭だつせー！

……てい！」

「きや」

「あ、でも六人ぐらいがちょうどいいよ。一七人にもなると、テーマがボケちゃうから……」

と、友人を優しくフォローするいいひと匠。

「という理由です。最初から」

「ホントですかー？」

「ともかく！」

場所は上町大地邸！ 衣装はとびきりのヤツを各自持ち込み！ なにか注文ある人は貸衣装や借り入れ検討します、空堀まで！」

「りょうかい!!」

「ね、カラ、衣装はいいとして、どうして上町邸なの？」

はなこがもつともな疑問を提出。スタジオとかの方がいいのでは。

「よく知ってる場所の方が、みんなリラックスしていい表情が撮れそうだからね」

「なるほど」

「それともう一つ理由があるのだが……それはまあ、当日のお楽しみ、つてことで」

ニヤリと笑う空堀三十六。この人、こういうことになると凄くイキイキする。生まれつきこういうことが大好きなのだ。

「ようし。気合い入れるでー」

とりあえずナナ的には打倒・愛である。同学年ナンバーワンは奪わねばなるまい。なにより、彼女には現在休業中ながらモデルの経験もある。撮影会で素人さ

んに負けるわけにはいかない。

「ふふふ」

流乃が不敵に笑う。私服なら、あたらしいカッコもできるはずだ。そう、ちよつぷり刺激強めでも。

美緒はすでに腕組みで視線を中空に彷徨わせている。はなこは困ったな、と眉をひそめる。要するにみんな、真剣。

「僕もフィルム、新品買ってくるよ」

「まかせたぞカメラマン！」

「なんだか甘そうですね」

「じゃキャラメルマンにしようか。コイツ優しいからなあ。ジジババ子供イヌネコ受けが滅茶苦茶いいのよ」

「えへへ、犬口説きには自信あるよー」

ああ、やつぱりこの人も変人だ。

どうしてウチのチームに関わる男の人は、カッコイイけど変人ばかりなんだろう。

答えは簡単で、女性陣も……いやいや。

「キャラメルマンさんは女の子にももてるんじゃないんですか？ とつてもハンサム」

「ううん、そんなこと全然無いよー！ 三十六とかと違って、彼女とかも居ないし」

「待ちいやあんた、彼女なんかいつ作ったん!?」

「お前、パーでパンパンビンタするぞ」

「うん。はい。して」

「うつ」

「して」

「じゃ、じゃあ……離せ和泉」

「駒川君、その二人変なスイッチがそこら中にあるので、ウカツに触らないように」

「う、うん……む、難しいんだね、そ、それじゃあ、大地君と違って彼女とかも」

「「大地君には彼女は居ません」」

「えっ!? そうなの!?ほんと、大地君!?」

「キャプテン、民主主義って知ってますか」

「衆愚政治のことだね」

「彼女か……欲しいなあ」

「「ウイ——!!」」

いきなり始まるニュージージーランド・オールブラックスのウオークライあるいはまたバリ島禁断のマッシュルーム踊りに、目を白黒させる匠。

「お前、パーでパンパンビンタするぞ?」

「ど、どうして美緒に殴られなきゃならないんだよお」

「ウイ——！」

多少声が甘ったるいのが気になるが、細かいことはこの際問わない。

「キャラメルマンさん、面食らってます？」

「う、うん、ちよつと」

「大丈夫です、2年の皆さんが一番『ヒドイ』ので」

「いやこつとんそれちよつと待て聞き捨てならん、3年もキツイで!? 1年に

は大砲がおるし」

「うーん……まあ平均すれば」

「なんだか自信が無くなつてきちゃったよ」

「まあ、言うても黙つてりや美少女揃いだからな。黙つてりや。匠は無心でシャッター切りやいいんだ。結果なんざ勝手に出る」

「それも聞き捨てならんなあ……ウチの声色つぽいって言うてくれてたやん」

「脳内で思い出をでつち上げるのは止めろ」

「ほんだらなに、ウチの声あかんのん？」

「いや、そうじゃないさ、お前の声一つで……離せ和泉」

「このアホプロデューサーの言うとおりに。駒川君なら、大丈夫。というか、大丈夫だから、あたし達乗り気になつてんだもん。誰でもいいから写真撮られて喜ぶような、そんな安っぽい女じゃないわよん」

「流乃先輩がこんなになつてゐるなんて、滅多に無いことですよ。 キャラメルマンさん、頑張つて」

「うん」

につこり笑う駒川先輩。

……やっぱり、本物だ。ワザと三度ばかり「キャラメルマン」呼ばわりしたのに、ツツコミもない。それどころか、ちよつと嬉しそう。

「衣装かー……困つたなー……」

珍しく弱音を吐くはなこ。驚く美緒。

「えつ、おはなちゃんが一番衣装持ちじゃない？」

「せやせや！ センスええ服いっぱい持つてるやん」

「うーん、いやだつて、どうせみんなとんでもない衣装着るんでしょ？ クマの着ぐるみとか、白鳥の湖のプリマ姿とか、ジャンボジェットがこう、胴体から生えてるとか」

「「さすがにそこまでは」」

やらんが、どういうネタでインパクト取るか、そこが大事なのは間違いない。

「私、そんなスペシャルなの全然持つてないもの」

「じゃあ逆に制服でいいんじゃないの？」

「ん？」

「はな、閃く頭脳が売りなんだから。勉強してるところとか、いいんじゃないの？ だから制服。それか、家で勉強してる時のスタイルね」

「ふむ」

家で勉強……ゴツイ黒フレームのメガネ掛けて、ヘアバンドで髪落ちないようにして、イージーパンツ履いて、素足が好きで、Tシャツで、上からカーディガン着て、あ、そうだ冷え性解消必殺アイテム、ザ・ハラマキ。

webで買った可愛い品で、夕陽の沈むアフリカの大地に、写実的なアニマルたちがこちらをグッと睨んでいる。ピース・ジ・アース。

……駄目だ。いや、駄目じゃないかもしれないがあまりにもマニアックだろう。

ますます考え込んでしまったはなこを見て、匠、キャラメルマン、思い切つて声を掛けた。

「あ、あの……美原さん、なにも特別なことはしなくても。和泉さん言ったとおり、制服でも」

「うん、まあ、それはそうなんだけど、なんか手、抜いてるみたいで」

「真面目だね」

「楽しんでるだけよ」

ふつ、と笑って、そういえば。

「駒川君の撮りたい服とか、ある？」

「えっ!？」

「あ、そりやはなちゃん、反則やろー」

「ほら、私、撮りにくいとか言ってたじゃない。じゃ、撮りやすい服がいいかな、
つて」

「いや、撮りにくいんじゃないよ、納得いくのが撮れないだけで」

「あ、そう言えばはなこ先輩のファイルないんですね」

「う、うん、あの……なんだか、撮っても撮っても、上手く撮れなくてね」

へえ、これほどの写真を撮る人でも、やっぱり不得意な被写体であるんだ、

芸の道は奥が深いな……と真面目に考えかけて古都、ふと周りの変な雰囲気気づく。流乃先輩ニヤニヤ、空堀先輩につたあ。私の視線に気づくと、二人とも目で笑った。

……なるほど、それで撮りにくいんだ。

にくいねこの。

「私やつぱり、被写体として魅力無いのかなー。凹凸無いしねー」

「そんなこと無いよ！ ああ、凹凸なんか関係ないよ、だって天王寺さんだって森之宮さんだってそうだし」

「その二人はほら、それを補って余りある別の魅力があるじゃない」

「み、美原さんにもあるよ、しつかり！」

「うーん、たとえばどんな？」

「なんと厳しい質問だろうか！」

「それ、ナチュラルで言ってるの？ やっぱはなキツイなー、生で」

“はなこ先輩秀才なのに……”

「えつ、えつと、えーつと」

“がんばれ駒川匠!!”

「厳しいところ」

「「だ——っ!!」」

ダメだ。どっちもどっちだ、この二人。

……てことは、お似合いなのかな？

「私やつぱり、そんなイメージなのかなー」

「ううん、あの、えつと厳しいのはほら、自分、自分に！ プレー中も、ずっと
厳しい顔してるから、ほら、えーつと……」

「まあ実際、美原参謀のチームでの立ち位置は」

ようやく助け船を出す三十六。

「うるさ型というか、一番厳しいこと、ヤバイことを考えてくれる、いわば危機

管理担当だから。美原はなこが止めるから、上町大地もアホみたいな作戦が取れるわけでね。な、大地」

「うん。はなちゃんにはいつも助けてもらってるよ」

「だから、厳しい顔がイメージなら、とびきりそういう写真撮ればいいんじゃないの？ 『キツめマニア』だって世の中多いよー？」

「……だけど」

匠、三十六の言葉を少し噛みしめて、でもやつぱり、という風に口を開いた。

「人間は、笑顔が、いいよ。基本的には。」

美原さんも、もちろん」

「じゃ、さ。衣装はとびきりの笑顔一つ、つてことで」

「和泉巧いこと言うねえ！ それもらい」

「笑顔、ねえ……」

苦笑いのはなこ。なんだか無茶苦茶言われてるのか、誉められてるのか、わか

らない。

「そのまゆげ歪めて『しょーがないな』ってな笑い方ばかりしてるからあかんねんって。笑う時には心の底から笑わなあかん。ほれ、笑ろてみおはな。大きな口開けてガハハハと」

「わ、笑えと言われて笑えるもんじゃないわよ。ナナじやあるまいし、そんな下品に笑えますか」

「よし、ほなウチが笑わしたろ。いくで、えー……」

「ガハハハ」

「まだなにも言うてない!!」

くすつ。

カシユイーン。

はなこの一瞬の笑みを、匠のカメラが逃さなかった。

驚く。なんてスピード、クイックネス。

すごい、やつぱこの人、プロだ。本物だ。

「……や、やだ、駄目よこんなとこ撮らないでよ」

らしくもなく手を振るほんのりピンクのはなこ、しかし本物はいざとなると、めげない。

「あ、い、今いい表情なので、撮ってもいい、ですか？」

「ば、バカ」

「撮ります」

カシャン、カシャン、カシャン。

「わ、や、やめてよ、だめ、だめだってばも——!!!」

手を振り上げて、ふうとふくれて、頬がピンクで、困り切った眉と目で。

“こつ、これや、おはなちゃんのベストはこれや！ さつ、さすが匠！”

“な、なんか微妙にえつちい気がするんだけど”

“あのはなこ先輩があんなに崩れるなんてー！ むしろこの現場を写真に撮りた

いー！〃

〃『だめだつてばもー』。メモしておこう〃

迫られても動じず、シャッターを切り続ける匠。振り上げた手をどう下ろしていいかわからずさらに困り果てるはなこ。

「ああ、もう！」

カシャンカシャン。

「おはな！ エエ表情かおしてんで！」

「どこがいい表情なのよッ!!」

カシャンカシャンカシャンカシャン。

「あああああ、もおおおお！」

カシャンカシャンカシャンカシャンカシャンカシャン……

はなこが声を上げれば上げるほど、匠のカメラも小気味いい音を奏で続けた。

“……つて、言われてもね……”

手元のファッション誌を繰りながら、はなこ、ため息をつく。

人には誰しも、思いもかけない趣味や特技が一つぐらいはあるものである。真面目優等生といえど、そんなイメージにまるで合わず、はなこは実にファッションセンスがいい。

それも安くていい服を上手く探し出しコーディネートし着こなして、目に優しくサッパリと奇をてらわない、羨ましいほど素敵なスタイルを作り出す。みんなで私服でうろつく時は、「はなちゃん、今日はどんな服かな」と楽しみにするほ

どだ。

ただ今回は。相手があることである。

“……みんなああ見えてもめちやくちや可愛いからな……”

『黙っていれば』、この学年ほど粒ぞろいも他にない。どこから見てもお姫様・愛を筆頭に、カッコイイ流乃、プレイメイツ蘭、リトルダイナマイトナナ、そしてタヌ、いや庶民のお総菜、美緒。

いくぶん切ない結論ながら、結局着る物は着る人だ。

美しい服は美しい。

しかし、美しい人はもつと美しい。

そこがファッションの限界であり、でも、だからこそ、面白い。人の魅力を引き出す、見せつける。

ふと思えば、そうだ、写真は、服に似ている。

だからだろうか、あんなに、駒川君の写真に興味があるのは。

そう、駒川君が撮ってくれるって言うから、私はこんなに悩んでる。

みんなの写真みたいに、「その人」をクッキリと写し出して、見せてみて欲しい。

私って、どういう人間なのかを。

そう考えれば、あのきらびやかな美少女の群れの中に、私みたいなフツの子がいるのも、それはそれでいいかも。

フフ……我ながらちょーつと消極的かな

だからといって、

「写真ゆうたらコスプレやろ！ 『西遊記』やろ 『西遊記』！」

「なんなのそれー」

「えーつと姫が三蔵法師、悪知恵の回るサルがみーちゃん、皮肉屋のビビリ河童が流乃、うちが美形の天蓬將軍やって、お蘭は牛魔王」

「ぎゅ、牛魔王!? それはひどいよー」

「アホ、何言うてんねん、一番の強敵ベスト悪役、準主役やんけ。エエ役やで

ー?」

「そ、そおかなあ」

「ちよつ、ちよつと、私は!?」

「おはなは馬」

「うまあ!?」

「あれ天馬やで、めちやめちや由緒ある馬やで」

「てんま、つていうんなら蘭の方がいいんじゃない?」

「むつ、あんたたまにはエエこと言うな。ほなアレや、蘭を馬にして、あんた牛

魔王」

「えー、せめて沙悟浄が欲しいなー」

「じゃるーを悟空にコンバートして、あんたカップな。いや待て、そうするとみ

「ちゃんか……」

「あ、私にぴったりの役があるよ」

「なんじゃ」

「お・しゃ・か・さ・ま」

「「ヴ~~~~~ッ！」」

“コスプレ系もね……結局、私、笑顔が苦手なのよね”

指摘されて初めて気づいたけど。

はなこはどちらかというと激しやすく、感情が顔に仕草にガンガン出るタイプだが、ゆえに「表情を作る」のは極めて苦手だった。

どうもこの技術は一部の女の子にとってはかなり重要な技術らしく、こつとんとか見ると信じられないぐらい上手い。美緒なんかもそうだ。愛想笑いなど、それと気づかせずいつでも好きなだけ作ることができる。それで人受けが非常に

いい。

みんな騙されてる。

私は、人を騙すのは、イヤ。

“……あー……もー……どーしよー……”

机に突っ伏して青空を眺めると、白い雲が縦に流れていった。

しばらくそれを見つめていると、

くすつ。

小さな笑いが、漏れた。

こうしていろいろ考えるのは、とても楽しい。

昨日までの答えのない問いよりも、同じように答えがなくても、こういうおバかなこと考えてる方が、ずっとずっと。

青い空は、人の心をさわやかにする。背筋を伸ばして、深呼吸ひとつ。

“……ま、いつか”

人は人、自分は自分。

私のいつもを、駒川君に、上手に撮ってもらお。

そう思えば、逆に簡単。

一番のお気に入り入りのセットで行こう。街を歩く時そのままに、鞆も、靴も。それでいいじゃない。

ううん、待つて待つて、そうだ、やっぱり買いに行こう。

こんな時こそあの人の出番だ。そういう視点で、選んで貰うに限る。うん、そうしよう。

雑誌をめくる。冬色の服が並ぶ。鈍い配色、落ち着いた色。苦手だったけど、うん、大人っぽくていいかもしれない。挑戦のしがいはある。

ペラ、ペラ、ペラ……

教室最前列。

「福山さん福山さん」

「なんでしょう先生」

「はなこちゃんは、病氣？」

「それ、クラス中で心配してるんですよ。ありえないことが起きてる、天変地異の前触れか、明日は槍が降りそうだ、晝被って来なきやつて」

「あのはなこちゃんが授業中に雑誌を見てるなんて……私の授業、面白くないのかしら」

「そんなことないと思います、ぜんぜん面白いです」

「ホント？」

「だってエイミー先生だもん」

「？」

「というより、注意してください」

「ムリですよ、はなこちゃんに注意するなんて。注意されちゃう」

「じゃ当てるとか」

「そんなの完璧にやつてるに決まってるじゃないですか、そんな面白みのないことできません」

「それなら気にする必要もないような気がします」

「……あ、そうねー。福山さん頭いいわねー」

「バカだと思われてたんですか」

「しかし授業を聞いてもらえないのは教師の名折れ、ここはひとつ、是が非でも注目を。」

こほん。えー皆さあん。この辺で一休みして。

先生の初恋の話など」

「やすッ!! 先生、あまりにも手段を選ばなさすぎます!」

しかし学園一の美人教師高槻英実の恋の話となれば、誰もが耳をそばだてる。

「いよつ！ 唐突だけど待ってましたッ!!」 「いigoエイミーちゃ——ん

!!」 「GOGO——!!」 「聞かせて聞かせて——っ！」

満を持して言い放つ、教壇のミス・エイミー。

「先生の初恋はあ、三つの時にい、

おとうさん」

「ええええええええええ!?」 「ふざけるな——!!」 「二八にもなつて客をなめるな

——!」 「金を返せ金を——!」

「だって本当なんですものゝ」

「じゃセンセー、理想の男性像とか！ 好みのタイプとか！」

「うん、優しくて包容力のある人かな」

「たとえば芸能人と言うとー!?」

「ヨハネ・パウロ二世」

「包容力ありすぎ！」 「芸能人か!? ローマ法王を芸能人言うてええのか!?」

「確かに芸で喰つてると言えば……」 「二八にもなつて客をなめるな——!!」

「そんな毒にも薬にもならん人物を——」

「ううん、すごいお薬よ?」

確かに、そうだが。

「センセ、じゃなくて恋愛対象で。」

こう、『この人になら抱かれてもいいっ』とか!」

「「キャ—— ツ!!」 「ウオオオオオオオ、ドキドキだぜ——」

!!」

「うゝゝゝん、そうねえ……」

B組の、上町大地君」

「「それは、言っちゃ駄目——!!!」」

「……みんな、難しいのね。お年頃かしら」

「難しいのは先生です——!!!」

そんな教室の喧噪をよそに、おはなちゃんは、ヴァーチャル・コーディネートに余念がなかった。

集中力。それは、秀才の必要条件である。

撮影会

撮影会だ。

女の戦いである。

当日金曜日は、放課後練習中から気合いが違った。事情を知る3年1年が近づこうとしないほど。クールダウンもそこそこに、いくぞー、と咆吼一発、各々の得物を小脇に抱えて、ドヤドヤと上町大地邸。

大地には、すでに母は亡い。父は遠くスペインで仕事をしている。三つ下の弟も、父についてユーラシア大陸の逆の端にいる。

豪邸と呼んでいい美しく広く堅牢な良い家に、ただ一人。けれども寂しさはあまり感じなかった。家族が居ない気楽さにかこつけて……

「みーちゃんおかわり——!!」

「慌てなくていいよ。ちゃんと炊いてます」

「あかんねんって、はよはよお。うわ、カラ、肉取りなやー！」

「取り皿に上げときゃいいだろ！」

「もう取り皿一杯やねん」

「まずそれを喰え!!」

友達が、いつも来てくれる。

2年の連中にとつては、二軒目の我が家といつてもよかった。

今日も長居シェフの特製お鍋を、脇目もふらずに喰いまくっている。いつものように美味しい料理に、呆れてはなこ。

「……けどホント美味しいよね、これでなに、一人五〇〇円？」

「ミンチボール鍋は手早くできるし、もやしと白菜で水増しできるし、オススメだよ」

「しつかしこんなスーパーの材料を切つて水で煮込んだものがどうしてこんなに美味いんだ。わけがわからん」

「ふふふ。そこはほら、秘密のスパイスが」

「いやまったく、不思議だ謎だ」

「スパイスの名前を訊いてはくれませんか」

「がつがつがつぷはー、おかわり——！！」

「お前食い過ぎや！」

「なにゆうてんのん、おなか減つてんねんもん、中盤が一番ハードやねんもん」

「んぐんぐ、そんなことないよー、DFだつて大変だよー！　ねえ、流乃」

「ん。だつてナナ動かないじゃん」

「あれは右に張つとんねや。センジュツテキヒツヨウセイや！」

「……はふ。ふおわーど」

「「あんたはもつと動きなさい」」

もちろんそんな会話は、忙しく箸と顎とを動かしながら。取り皿が、テーブルに休まる暇はない。鍋、取り皿、ワンタッチで、イン・マウス、トウ・ストマツク。

「あ！ 姫君！ 肉は、バラして、バラして!! 一枚ずつ!!」

「だいじょうぶ」

「ウチが大丈夫やないねん!!」

近頃じゃ飯場の土方さんでももう少し上品だろう。

「……ごめんね駒川君、うるさくて。いつもこんな調子だから、気にせずどんどん食べてね」

「はな、なに言うてんねん、メシは騒ぎながら喰わな美味ないやろ!? これがスペイン流や!」

「ここは日本よ! 駒川君ビックリしてるじゃない!」

「あはは……大丈夫、美原さん。あんまり食べて鈍くなっちゃうと困るから、ゆ

「つくり食べてるだけだよ」

匠がにつこり笑って言った。はなこ、感心。

「偉いね、匠君。もうプロの風格だね」

「ううん、そんなことないよ」

「ん!? ちょっと待って、そうするとあんまり食べ過ぎるとお腹出てまう?」

「ナナは常に出てるから大丈夫」

「やかましい。この辺で止めとこか」

「ほな残り俺が貰つとくわ」

「てい!!」

「なんでや!! もう要らんねやろ!」

「要らんとは言うてない。止める、言うたんや。撮影が終わったらまた食べる」

「まだ喰うのか!」

「あ、じゃああとで雑炊か、なにか麺を炊いちゃおうか」

「さんせ——い!!」

「はー……」

「ほら、駒川君今度こそ呆れたよ？ みんな、自分の性別を忘れてない!？」

「んなこと言うたかて減る腹は減る」

「食べたいものは食べたい」

「中華そばがいい——!!」

「せやからおはな、新参の前やから言うてエエカッコしいな。いつもウチよりガツガツ食べてるやんか。すぐ剥げるメツキは、メツキやないで!」

「メツキじゃないわよ！ いつナナより食べたのよッ!」

「甘いもんはウチより強いや——ん!!」

「あつ、あれはあなたが『太るから』ってガマンしてるだけじゃない」

「あ、でも『エスポ』でウチの学年で一番強いのは、はなだよね」

「そうそう」

「ちよつ、ちよつと、ちが、えー……」

あ。

甘いものをお酒のように強い弱いで表現するなら、確かに2年で一番強い。でも、もーさんみたくホールのチーズケーキを手づかみで食べるようなことは……

「^もバ^もケ^ちモノ^んを除くと『エスポ』ではトップランナーだね。チームオールでも」

「はっばちゃんは粘るけど一発の力強さは無いからね。やっぱ総合力ならおはなちゃんですよ」

「ケーキバイキング記録三三個やったつけ。ウチそんなん絶対ムリ。糖尿なつてまう」

「だつ、だつてあの時はほら、ブルーベリーソースが凄く美味しくて」

「あはははは」

ついに笑い出す匠に、はなこは顔を真っ赤にした。

「あの、えつと……」

「あはは、あの、笑ってごめん、美原さん。笑ったのは、みんなすごく楽しそうだからつられちゃっただけで」

そう言うのと立ち上がり、いつもの愛機を、ピシリと構えた。

「みなさんとてもイキイキしてるので、撮りたくなりました！」

よろしいでしょうか！」

「もちろん——ん!!」

笑顔の答えをもらうが早いか、シャッター音と、眩しいフラッシュが幾度も。

「……ふう。やれやれ」

みんなもみんななら、駒川君も駒川君。

縁があるんだろうな、きつと。昨日今日なのに、もう、チームの一員になっている。とけこんで、何の違和感もない。

はしゃいでポーズをとるみんなを見ながら、白菜を口に放り込んだ。やっぱり、とても美味しい。

——ひとしきりおなかもいっぱい、一休みして、いよいよ。

「トップバッターは？」

「ウチいつていい？」

「もちろん。いいよ、ね、みんな」

「ま、ウチ、セミプロやから、撮影のお見本見せましょ」

「おお」

ナナ、大きなスポーツバックを抱えて、更衣室用の部屋に消えた。リビングではソファを隅に寄せ、ごく小型のスタジオライトも二つ三つセットする。

ルールは、一人フィルム一本三六枚。もちろん、匠が本気になればものの数秒で使い切る枚数だが、それを言い出すとキリがない。ので、この制限で。

しばらく待つと。

「……ざんつ!!」

「「ああつ!!」」

「やはりそう来たか〜!」

ナナが着るのは、制服の可愛らしさが全国に鳴り響く喫茶店のそれ。純白のブラウス、袖口胸元フリルひらひら、ごく短めのピンクのスカートがふわっと膨らみ、裾にまたフリル、髪にカチューシャ、脚は白の薄手のニーソックス、小物はご丁寧に丸い銀のトレー。

パシャン! パシャンパシャンパシャン!

大きなフラッシュが次々に焚かれ、シャッターが落ちる。

ナナも手慣れたもの、次々にポーズを作り表情を作る。ちよつと前にかがんで唇を尖らせる、胸元でトレーを抱きしめて恥ずかしげな顔、そのトレーを後ろ手

にしてくるり、半回転。手ぶらで伸び、右手を伸ばして、その肘を左手で持つ。あるいは肘を絞って両手を拡げて、なにかに驚いた顔。ドジった瞬間の表現かと、思うやトレーを右手の指で高く支え持つて、『おまちどおさま』。

「……すげえ……」

三十六、思わず唸った。なかなかここまで、「演じる」のは、簡単じゃない。

「ふふつ、惚れ直したカナ？」

というセリフでさえでつち上げ、人差し指をひよい、と振ってウィンク一つ、甘く言う。

「ひええ……」

あのナナが、このナナか。

女つてのは、怖い。

「うん、どうしてそんな顔するの？ 冷たいきとるクン、き・ら・い」

くるり、スカートの裾をひらめかせて、そっぽを向いて、後ろ手を組む。

「ひええええええええ……」

さとするクン、て。

お前そんな呼び方今までいつぺんもしたこと無いやろ。

「いいよナナー！　新しい魅力にさとするクンもメロメロ」

「いや、いや確かにメロメロやけど」

「んふふっ！」

両手を軽く握って、合わせて、口元へ持っていて、上目遣い。

「かつ、かんべんしてくれ〜！　俺が、俺が悪かった〜！！」

「あはははは……」

無闇に謝る三十六を笑っていると、そこでフィルムは終わった。

「……でや！！」

「ナ、ナナ」

「ふはははは、思い知ったか本気のウチの美しさををををを」

「もうどこへも行かないでくれ〜」

「よちよち、どこにもいけへんで、ウチは。どんなに美しくても、ウチは……ウチは難波鳴海や！」

などとわけのわからんことを言うてると、ジャンケンで決めた二番手準備完了。

「……匠君、準備OK？」

流乃ネエである。

「いけます、どうぞ！」

匠もいざカメラを構えると、実にキビキビテキパキリズム良く動く。シャッターチャンスは、待ってくれない。

「……じゃん」

「「おおおっ!？」」

「カーッ、そう来たかー、こりやまいったー！」

ちよつと照れながら現れた流乃、なんとグロスの黒レザー・ルック。上ビスチエで大きな胸谷間剥き出し、胸下までしかない短い上着羽織ってお腹もちろんおへそ丸出し、下はショートパンツ、ぴっちんぴっちんで形良いお尻のラインがそのまま出てる。そこから売り物になる白く長い脚がぎゅいーんと伸びて下はショートブーツ。もちろん黒、光沢。

「……黒肌黒だとおかしい？ やっぱり網タイツ履こうか？」

「だいじょうぶ！ 生足の方がいいです！」

もちろん匠の声も、ちよつと上ずり気味。

「ちよつ、ちよつと目のやり場に困るな、大将」

「う、うん、出た方がいいかな」

三十六と大地がヤニさがりながらさういうと、

「ダメダメ、どうせあとで写真見られちゃうんだもん。今実物見といてよ」

流乃はもうノリノリ。ナナのを参考に、いろんなポーズを取ってみる。流乃が

かがんで寄せてこの服だと、もう、胸なんだかお尻なんだか。

「どつひゃゝゝ、すつげゝゝ！」

「ホント？　じゃこんな感じも」

バツ、と上着の諸肌を脱ぐ。白い肩が見えて、背中が見えて、カメラに向かって挑発の微笑。

パシヤッ、パシヤッ、パシヤッ！

「三十六！　バイク持つてこな！　ハーレー！　ハーレー！」

「さすがの俺でもそりや無理だ。でも合うだろうな」

「ほなあれや、マンハッタン持つてこな、マンハッタン」

「お前口先だけでしゃべってるだろ」

「ちくしょーカッコエー、ウチも網タイツ履くべきやったー」

「やめとけ、ボンレスハムになるだけや」

長い髪掻き上げて、アップで止める。なかなか見られない流乃の白く長いうな

じ、バサバサの髪が千々に乱れて、ワイルドなお色気抜群。仕上げはレンズに向かって、Chu.

パシャ——ン！

終了。あつと言う間の三六枚、流乃、短い上着を抱えるように身をかがめて更衣室へ走る。照れて笑って叫びつつ。

「はずかし——！！　これ思ったよりはずかし——！！」

残された方も叫ぶように感想を。

「……いやしかしこれは出来上がりホンマ楽しみやな！」　「キレイだったねー」

「ナナも良かったけど流乃も凄かったねー」　「むむー、ウチちよつとみんなを侮つてたわー」

「次は愛ちゃんだよ、きつとまたキレイだよー!?」

「おお！　本命やな！　ウチ呼んでくるわ！」

「いつでもいけます！」

「匠もノッてるでー！」

——そして現れる、「プリンセス」堺愛。

「うわああああああ……」

まさに、プリンセス。

純白の、ロングのドレスが、裾を引く。

「ほっ、本気や！　すげえ、すげえっ！」

パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ……

匠はもう、床を転がるようにしてその美を切り撮り続けていた。

先ほどの黒い流乃が小悪魔なら、愛はもう、天使以外ではありえない。なんと
いつでもその白いドレスは……

「そつ、それ、ひよつとしてウェディングドレスちゃうの!？」
こくり。

「ど、どこから借りてきたの、そんなの！」

ふるふる。

「……おかあさん」

「お母さんの!? うひゃ——!!」

「それは反則だよー」

「手袋、取ってみてくれますか！」

もう写真家も遠慮無し。こくり、うなずくと、シルクらしい輝く手袋を取る。愛の、絹と変わらぬ白く細くどうみても柔らかい指が露わになる。その指に輝く、プラチナのリング。もちろん左手の、薬指。

「こころにくいつ!!」

その声に答えるように、唇の前に左手をかざし、

くすり。

微笑む。まるで式次第をど忘れした新郎に微笑むように、朗らかに、優しげ

に、そしてなにより、美しく。

「これ小道具——！」

もうすっかり式場の世話おばちゃんとな化したナナ、フローリングに一抱えの巻物を拵げた。それは緋毛氈、すなわち小さな小さなヴァージンロード。

ふわり。

マーガレットのようにドレス拵げて、その上に座る、ウェディング・プリンセス。

ニコリ。

パシャ——ンツ!!

もう最後のシャッターが切れた。今までで最速だ。

「匠、構わねえ、もう一本行こうぜ」

「……いや」

実に苦渋、という顔で、絞り出すように奥歯を噛んで、言う。

「モデルさんのモチベーションに関わる。アンフェアは、無し」

「うーむ」

「ありがとう、堺さん。いい写真、撮れてると思います！」

につこり笑う愛。ああ、この瞬間だつて撮れたのに。

まったく、改めて見ると、愛ちゃんは死ぬほど美しい。『美人は三日で慣れる』と、嫁さん捜しで顔を基準にすることを戒める言葉があるが、それは本物の美人を知らぬ者の言だ。

本物は、どれほど観ても、慣れない。

愛が更衣室に帰った。次は……

目配せの三十六。事前に作戦概要を伝えておいた相方ナナ、立ち上がる。これこそ大地邸を撮影場所に選んだ理由、シークレット・オペレーションB―B。

「よっしや蘭ちゃん、行こか！ 着替え手伝うわ！」

「あ、いいよ、ボク普通の服だから……」

「ええからええから」

——そして更衣室から響く、悲鳴、揉み合う音、どたんばたん、漏れ聞こえるお説教。

難波鳴海は口八丁手八丁脚八丁、サッカーで駄目なら詐欺師で喰つていける。
純朴な蘭が敵う相手ではない。

静かになった。丸め込まれたらしい。

出てきた。

バスタオル巻いて、背中丸めて、顔真つ赤で、こそこそつ。

「……ううう……」

バスタオルから見える長い脚は素足だ。

そ、それはひよつとして……

「あかでラーン！ 胸を張れ胸をー！ ホラ！ 正面！ 敵のエースフオーワー

ド!! ぶちかませえええええ!!」

ナナの煽りに素直な蘭ちゃん、つつい反応。

胸を張る。背筋を伸ばす。

落ちる、バスタオル。

ばい~~~~ん。

B—Bそれはブラック・ビキニ。

まさに核爆弾級の衝撃が、リビングを走る。

「うお——!!」

ギャラリーが沸いた。蘭のスーパーボディは夏の海や日々のシャワールームで散々知ってたはずだが、改めてこうしてローライズの黒ビキニなど着られると、もはやどうしようもない。

なんというど迫力。

まさに裸一貫、この力。

アメリカでも喰える。いやむしろこれで喰うべきだ。今、今なら、英国情報部・レイボイス・パイアクションヒロイン、通称「接着剤娘」だつて充分、充分狙える。日本じゃちよいと濃いめクドめの顔立ち、パーツ全部大作りで眉なんか濃い、それが、それがきつと魅力になる。西洋人のフィールドで勝負のできる日本人など、何万人に一人も居ない。

だけど蘭ちゃん残念ながら、そーゆー意識は全くない。ああ天は二物を与えず。

「あ、あう、あうあうあう、は、恥ずかしいよう……」

今にも消え入りそうな情けなーい声を出して、また背中を丸めてかがみ込んでしまう。これでは、撮影にならん。

「ええい蘭吉、なにをしてんねん！　ここは・夏の・海辺！　ホラそこに青い海

白い砂！ あのライトは太陽！ ホラそこには焼きそばのマズイ海の家が！」

「そんなこと言われたって」

「ポーズポーズ！ ええポーズせな！ 『見て私を！』 ってヤツを！」

「見て欲しくないもん！」

「ああ、もう、じれったい！」

「……あの、天満さん」

怒鳴り散らすナナの後ろから、先生が声を掛けた。優しい声、撮影中もつと厳しいのかと思っていたら、意外にそうでもない。顔も、微笑み。解きほぐすように、落ち着いた声で。

「変なポーズ取らなくていいです。天満さんそのままの方がいいです。ちよつと気分でなくて申し訳ないですけど、そう、あの、室内プールの更衣室で、これから泳ぐぞーつてところだとしても想像してください」

「……う、うん」

「水着に着替えました、泳ぎたいですよね」

「うん」

「じゃあ、準備体操、要りますよね。体操でもしてみましようか。ストレッチとか」

「あ……はい」

匠の優しさに、いくぶん緊張がほぐれたのか、蘭は背伸びをした。お馴染みのラジオ体操第一。

「……こんな感じ……かな？」

「そうそう、そんな感じですよ、適当に撮りますので、続けてくださいーい」

「は、はい……」

ポーズと言われれば困るのに、ストレッチと言われれば抵抗が無くなる。まさに気は持ちよう。匠、気配も出さずに静かにカメラを構えていく。

「しつかり準備体操しないと、今プールではナナさんが溺れてまーす。助けに行

かなきや」

「なんでや！　ウチはそう簡単に沈まへんっちゅーねん！

脂肪ばっかりやからな！　うわくくん」

「あはははは」

ギャラリも巻き込んで、場がなごむ。

「プールサイドでかき氷とかいいですね。天満さんなにご好きですか？」

「あは、ボクはみぞれ！」

「あ、シンプルでいいですねえ！　僕は宇治金時大好きなんですよ！」

「あははっ」

笑いながら蘭、準備体操を続ける。匠、会話続けながら、ゆつくりと所々で、シャッターを切る。

「うまいなあ……」

あの真面目でシャイな匠が、こんな口車でモデルをノせるなんて。しかも体操

だから、変なポーズよりアクションが大きい。ほら、軽いジャンプの運動とか…

ああ、別の生き物のように弾ける胸に視線釘付け、それは悲しい男の性なの
でしようか。おや目の前がいきなり暗く。

「見いな」

「すまん。これだけは見せて」

「見・い・な！」

三十六がナナの手を眼前からひつpegした時には、もう蘭は深呼吸をしていた。
その腕がぴたり、畳まれて、

カシャーン！

「終了です。ありがとうございました！」

「えへへ、こちらこそー。こんなのでいいのなら、いくらでもー」

蘭ももうすっかり照れ恥じらない。

写真家の力というのは、絵づくりだけではないと思い知った。

「……凄いすな、大将」

「う、うん。ちよつとときどきしたよ」

「夏のビーチになりましたなあ……」

どうしますキャプテン？ 大ちゃん、今のかなりドキドキ来たらしいですぜ？

やっぱ水着でも？」

「ふっふっふ」

お。

出たぞ不敵な笑いが。

この笑いの出る時の長居美緒は……強い。

とにかく、強い。

しかし、しかしあのスーパーバディがパーフェクトナチュラルに迫る、その大
自然の驚異に、人間の小賢しい浅知恵などで太刀打ちできるのだろうか。

無理だ。さしものキャプテンを持つてしても、無理に決まっている。

「かわいさ、かつこよさ、うつくしき、そして大自然。もう要素は出尽くしてますぜ!」

「『美』というものは」

「む」

美緒、軽く目を閉じて、人差し指を振った。

学校一の文章家空堀三十六と、セミプロ写真家駒川匠を前に、美を語る。どれほどの自信だろうか。

「形ではありません」

「では、なんだ!」

しまった。問うてもた。ついうっかり。

「『愛』です」

やっぱり。

「だが、どうやって表現するというのだ。そんなものを」

「お見せしましょう。少々、お待ちを」

美緒が着替えに立った。

「……すつ、すごい自信やなー」

「ああいう時つて、ホンット、強いよね」

「いやまあ、どうやってその主題を表現するか、お手並み拝見……なんかやな予感がいつぱいするなあ」

「……下着とか」

「うひょー、さすがそれは……いやあの女はどんな手でもやりかねん」

「黒レースのガーターベルト付き、薔薇くわえてカスターネット持ってるね」

「やりかねん、やりかねん」

親友をネタに無茶苦茶言っていると、間もなく、現れた。

「「むむむ!?」」

なんだ、いつもの服じゃん。

白いブラウスに紺のロングスカート、胸当て付き後ろで肩紐クロス、イモッぽさが美緒にびったしの、いつもの普段着。改めて見ると一番美緒らしい似合いの服装だが、見慣れすぎててなんの驚きもない。

「……みーちゃん、それは」

「まあまあまああ」

ナナの言葉制すると、

ふわり。

手にした薄いパープルとスカイブルーの中間色のエプロンを身にまとう。

「「あっ!!」」

魂胆、わかった。

シチュエーションだ。服だけではなく、ジャストそしてナイス・シチュエーシ

ヨンで己の魅力をブーストするつもりだ。

すす、と、キッチン、流し台の前に立つ。

駒川が飛んでいく。もう、始まつてる。

だだだ、と駆け寄って野次馬すると、美緒はいつものスタイルで、鍋の残りのネギなぞに包丁を当てる。構え振り角度速度、手慣れているが故に、とても美しい。

「♪とんとんとんとんとん~~~~ん」

たのしそくに白菜も切る。

「♪たんたんたんたんたん~~~~ん」

一枚、端っこくわえて、しゃくつ。

にこつ。

パシャーンッ！

匠のシャッターが落ちる。

いや、生の白菜はそんなに美味くはなからう。

鍋を開ける動作、食器棚に「うんしょ」と手を伸ばす動作、流水で手を洗い「きれいになった」と手を見て微笑む動作……

確かに、確かに魅力的ではある。そして美緒が一番輝く瞬間とも言えよう。美緒ファンならこれで充分悶絶だ。しかし、しかしこれで愛や蘭に勝ったとは……と、冷蔵庫から、なにやら大きなお皿を取り出した。そのラップを剥がすと、新しいお箸を手に、キッチンを出す。向かう先はテーブルに座る……

「大ちゃん！ 逃げて!!」

「えっ？」

もう遅い。

美緒、大地の隣吐息が掛かるほど近くにすばーんと座り、大皿を置く。そこには、美麗な細工がふんだんに施された和風洋風中華風、世界の前菜勢揃い。もちろん、全自家製である。お箸をぱん、と割ると、淡く滋味ありそうな色合いの、

鳥ハムをひとつつまむ。その中でも、得意料理だ。

「「やば——いい!!」」

「はい、大地君、あ~~~~ん」

にこおおおっ……

これはもう、掛け値なし。

愛である。

本生の愛情剥き出しである。

地球ごと救いかねないような凄まじい笑顔が炸裂する。

パシャンパシャンパシャンパシャンパシャン——

ついでにカメラも炸裂する。

「えっ、ええっ、ちょっ、あの」

「撮影だから」

「あ、そか」

「反則だ——!!」

「につ、人間を小道具に使う……鬼だ。あんたやっぱり鬼だよ!」

見事丸め込まれて小さく口を開けてしまう我らが大ちゃん。美緒、実の母親でもこんな顔はするまい、というほどの満・笑顔、これぞ愛の証、同じように少し、口を開けて……放り込む。

もぐもぐもぐ……

「おいしい?」

「……うん」

「よかつた〜! おいしくできてるかどうか、不安だったの!

じゃあ、もひとつどうぞ☆」

カシャンカシャンカシャンカシャン。

「うええええええええええええええ」

嘘だ。

いや嘘じゃないけど、あまりにも嘘だ。

「あ、そうだ！」

なにが『あそうだ』ですか。どうせまた昨日から仕込んだネタでしょ。

「♪お飲み物〜」

言うと素早くまた冷蔵庫を開け、見慣れぬデザインの缶と冷えたグラス（！）を取り出した。瞬時に曇る細身のグラスが、実に冷涼感。それを大地に持たせると、ぷしゅつ、両手で優雅に捧げ持ち、

トクトクトク……

金色の液体が、白い泡と炭酸の微かな音とともに、注がれる。

匠のシャッターも、鳴る。

「みーちゃん、さ、さすがにビールはマズイやろ！」

「えへへへへー」

「ナナ、あれは……ビールじゃない！ ビールテイスト飲料だ！」

「なんとッ！」

「しかも本場ドイツの輸入物！」

「そんな小物までッ！」

「どうぞ。大地君飲んでみて？」

「うん、じゃあ……」

こくこくと喉を鳴らす大地、それを優しい笑顔で見つめる美緒。

「……あ、結構美味しい。苦みがサッパリしてて、料理に合いそうだね」

「でしょ？　じゃ、もすこしいかが」

トクトクトク……

「うん、ありがと」

「ふふふ」

お酌。

それはまさに新婚家庭、優しく可愛く家庭的な新妻若妻が仕事に疲れた身を

癒してくれる、至福の瞬間。美緒ファンならずとも男にはたまらん憧れのシチュエーション。

今、世界は二人のためにある。

匠もちろん、大地のすぐ後ろから、大地の視点に似せて撮る。そう、ちょうどそこに、目の前に、美緒すなわちマイ・スイートハニーがいるように。

「……あ、ふふ。大地君、泡、ついてるよ」

「え？ほんとに」

「動かないで」

つ、と指を伸ばすと、上唇のすぐ上に触れた。その指もちろん、ぱく。

にこ。

「「かつ、勘弁してよ~~~~~!!!」」

ミオ・オン・ステージ、ザ・独壇場。

フィルムは、瞬く間に切れた。

「……終わっちゃいました。ありがとうございました！　なんか、ものすごい写真が撮れてるような気がします！」

「このキクラゲも、すごく美味しいよ？　はい、あゝ……」

「あゝ」

「「終わり終わり、もう終わりゝゝゝ!!」」

「お前もいつまでもノるな！」

三十六が頭をはたくと、ようやく放蕩息子が桃源郷から帰還した。

「……あ、いや、だって美緒の手料理はいつも美味くて」

「そんな事実みんな知つとる」

「このビールみたいなのがまたよく合つてて」

「はあ。あのな大地……いやま、お前はいいんだ。しかしなんだな、なんと表現していいか……」

「カラ、こういう時あたしとナナがいつも使ってる便利な言葉があるの。教えた
げよつか？」

「おう」

「「さすがキャプテン」」

「おほほほほほ」

「……さすが、キャプテン」

それ以上、なんの言葉も無かった。

「……ほんと、さすがキャプテン。強烈」

いつもよりさらに複雑な苦笑いを浮かべる、最後に残ったはなこ。ため息混じり
りで、肩を落とした。

「こんな強烈なのあとだと、何もできないなー」

持ってきた服は、ごく普通の街行きだ。こんな大ネタも仕込んでないし……て

いうかみんな、張り切りすぎ。

「いーじゃないはな、よく考えりやみんなバカ写真ばかりだよ？ 一人ぐらい、普通の写真がいいって」

「そうだよ、おはなちゃんは普通の服がいいと思うよー」

珍しく落ち込むはなを、流乃と蘭が慰める。

「こそ。普段キリッパリッとしてる美原委員長のリラックス姿、それで充分インパクトあるぜ」

「そうだね。コスプレ写真ばかりだと見てる人も疲れるもの。私と一緒に、普通担当で」

「「あんたのが一番疲れる」」

「そお？」

「うーん……」

ちら、と駒川君を見てみる。目が合うと、慌てて逸らせて、カメラを弄ってる。

まかせる、つてことかな。

まかせられても、な。

そんな様子を見て三十六、一思案。

「……美原女史」

「うん？」

「どーしてもというのなら、作戦が、一つだけある」

「ん？　どんな？　私、他の服とか小道具とか、なにも持つてきてないよ？」

「あ、外で撮るん？　せやけどもう夜やからなあ。おはなは昼の人やし……」

「違うな。」

「……どんな淑女にも、夜の顔がある」

「わかった！」

「ほい、和泉遊撃手」

「パジャマ！」

「ご名答さすが流乃ネエツ!!

そう、寝る直前のグッ・ナイトを演出するんやツ!

「「おおお〜〜!」」

「ええ〜〜!?」

「なるほどそれはありや! さっきのみーちゃんの状況の数時間後や! いよいよ恋人同士はおねむねむや! 二人で! そう、二人で一つの、ベッドで〜〜〜!!!」

「必要以上に興奮しなくてよろしい。

しかしそういうことだ! どうだ、可愛気ありお色気ありそしてアルバムの締めにも相応しい! かつ普段の美原はなこと一八〇度度違う意外性もあり! これしか、ないッ!」

「「それでいこう!!」」

「う、う〜ん……!」

「それが嫌なら露出で勝負してもらってもかまわんど。パンツ一丁とか。いやむしろすぽぽ——ん！」

「それもええな！」

「よかないわよッ！」

わ、わかった、わかりました。その提案乗ります。でも」

「パジャマなら、私持ってます」

「なんで持つてきてんねん」

「いつ・必要になつても・いいように」

「しばらくは・ならんから・余計な心配すな」

「チツチツチツ。キャプテン、お心遣い感謝なんですけど、ここはそれじゃあ、ないんですよ」

「ぬっ」

にたあ。形勢逆転、三十六、美緒を押し込む。珍しい図だ。いや誰が相手でも

美緒が押し込まれる図が。

「あんたこういうことになるホンマイキイキしてんなあ」

「たぶん生まれついでての演出家なんや。前世はたぶん平賀源内」

「うなぎの人やな」

「そう趣味はエレキング製造」

「じゃ今から買いに行くとか？」

「いやいや。はなこさんのような知的な美形に似合うパジャマは……イエア、男物！」

「「それだ！」」

「ええつ？ あつ！ だ、ダメだよ、それはダメ！ 私だつて着たことないのに！」

「撮影ですから」

「うっ」

勝った。

わはは、ちよつと気持ちいい。

「てことで大地、一セット供出。リリース！」

「あ、うん。いいよ」

「にしし。はななら、できればパリツと、アイロン効いてるようなのがいいよね。
色もブルー、白、無地かストライプ、さわやかそーなヤツ」

「うーんと……」

大地、少し考えて、

「……どれがいいだろ、美緒」

「探してきます」

「「なんでやねん!!」」

まだだ。

まだ、勝てない。

——ほどなく美緒、『あつた、ありました、新品が、新品がありましたこれにしましう清潔ですしパリツとしてますし』と嬉しそうに駆け込んできた。まあ確かに、新品がベストだ。

はなこ、更衣部屋で着替えて、リビングへ戻ってくる。

「おおっ!!」

一八〇近い大地用の空色のパジャマは、小柄なはなこが着ると当然、だぼだぼでも、その崩れ加減ヨレ加減余り加減が、可愛い。

「おはな、エエ感じエエ感じ!」 「だぶだぶがいいね」 「ズボンの裾がぐにゃぐにゃなのがかわいいねー! 手、そのままで端っこキュツと中から握って……あそーそーそーそー」 「可愛いよ、おはなちゃん!」 こくこく。

「そ、そうかな……私には、わかんないけど」

どう反応していいかわからないので、いつもの癖、手の甲でちよつと眼鏡をズ

り上げる。手に余った裾が、くにやつと折れた。

パシヤッ！

「おお。今のええ仕草やで！ 案外わかつてるやんおはなちや〜ん！」

「は、はあ……」

「よし、こうなったら本気で行こう！ 美原先生！ レッツ・シャワー！」

「は、はあ!？」

「なるほど、風呂上がり！ カラ、ナイスアイデア！」

「単なる願望や！ 風呂上がりでプラス二五点！ 二、三分ぎ〜つと熱いの浴びてくるだけでいいんだ、ほら、パパッと！」

「へ、えと、あの」

「エエからエエから、ウチが背中流したるさかいに」

「そ、そんなのいいけど〜」

ナナに引つ張り込まれるようにしてバスルーム。生真面目にも指示通り、湯気

と一緒にすぐに出てくる。

「ほら撮れ——!!」

パシヤッパシヤッパシヤッパシヤッ!

後ろから背を押すナナに言われるまでもない。黒いカメラが唸りをあげる。
上気したピンクの頬、艶やかに湿った髪、をタオルで巻いて上げて、額や首筋にじとり、にじむ汗。眼鏡もなし、先ほどより格段に色っぽい。

カメラマン、訊く。

「美原さんは、お風呂上がりに何されてます?」

「え? えーつと……新聞読んだり、雑誌読んだり、かな?」

「新聞やー!」

「ほいきたー!」

フロアリングに新聞が拡げられ、そこにぺたり、座らされる。状況が整えられ、と、なんとなく、読んでしまう。しなつと横座り、ぺらり、ぺらり。

パシャン、パシャン、パシャン。

「ここに先ほどのビールテイスト！」

「ほいさ！ ほいおはなちゃん！ ぐいつと！」

「え……あ、うん」

おそろおそろ、

こくつ……

といつてみると、喉カラツカラの風呂上がり。

こくつ、こくつ、こくつ……

喉が勝手に運んでいく。

うん、悪くない。苦いけど、渴いた喉にはそのシャープな刺激が、いい。

……ぶあ。

カシャ——ンッ！

「うひよひよ、今の『ぶあ』てのいい感じ」

「そ、そお？」

いい感じと言われりや悪い気はしない。濡れた毛先を乾かそうと無意識にタオルほどいて、小首を傾げて毛先をドライ。その仕草もちろん、絵になる、絵にする、パシヤン、パシヤン、パシヤン。

「でや、先生！」

「最高です」

「『最高です』出ましたー！ ヨッシャ盛り上げていくぞー！」

「『おおー』」

「汗も引いた水分も取った今日のニュースもチェックした、いよいよ就寝準備！
キャプテン！ 歯ブラシだ！」

「私のと大地君のと、どっちにしますか！」

「来客用をお願いします」

「ちえ」

まあよその家の来客用歯ブラシの収納場所を知っているというのもアレがアレなのだが、今はよい。ブラシは使い捨てのトランスルーセントカラー、ポップなデザイン。うがい用マグカップにはセリエAのサッカー・チームのエンブレム。ぱくり、歯ブラシくわえてマグを持つ。

「いや、おはなちゃん、そのペンシル持ちはしなくていいから。磨くわけじゃないから。手放して」

「ほお？」

「せやけど今のも、はなつぽくってよかったで？」

「いや、ここはディフェンシブ一辺倒で行こう。ネタなし笑いなし」

「な、なるほど」

「よし、歯も磨けた、寝よか、寝る前にストレッチ！

腕を大きく斜め上に伸ばして背伸びの運動~~~~~!!

延びる演出家の声にはなこ思わず、

うゝゝゝん

とばかりに思い切り腕を伸ばし背を反らす。

と、胸元のボタン二つほどしか止めてないパジャマ、

ぽか、と開いて、おなか、見えて、

ちら、とおへそ。

「「うわお!!」」

パシユイ——ンッ!!

その健康なチラリズムに目を丸めるギャラリ―、もちろんカメラも匠も見逃さない。

「カラちゃん策士」

「いやこれは下準備のおかげや! グッジョブ・ナナ!」

「まかせんかい! 男心の弄り方やったら、ウチに訊けー!」

「弄らないでくれこれ以上……」

「な、なに？　どしたの？」

「別になんでも」

当人これ後で見たらひっくり返るだろうな、でも既成事実やったもん勝ち。

「変なの」

「さあおはなちゃん！　ラストは……甘い二人の恋のサンクチュアリ……ベッ

ド・ルームや!!」

「「おお」」

「え、えーっと」

「いきまっしょい!!」

「「よっしょ」」

わっしょいわっしょいとはなこを担ぐようにして寝室へ雪崩れ込む。豪邸ゆえお客様寝室などという贅沢なものがあり、泊まり込む時には使わせて貰っている。セミダブルのプレーンなベッドを取るかソファを取るか床で寝るかで、いつも炎

のあっち向いてホイ大会。

「……ラストショット、シチュエーションとしては！」

演出家、一席ぶつ。

「おはなちゃんは準備万端でダーリンを待ってます」

「「おおっ」」

「準備つて……なんの？」

「んー……気持ちとか」

「よ、よくわからない。あと、ダーリンって？」

「誰でもいいから好きに想像しなさい」

「誰でも、って言われても」

よく知ってる男の子と言えば……目の前でギャイギャイ言ってるコレか、後ろでずつとニコニコ笑ってるアレか、黒い物体が顔になってるソレか。

一番マシなのは……ソレ、かな。

だってここはアレのお家だし、恋人とか想像すると生々しすぎる。

「……想像しました」

「でも、ダーリンは今日はお疲れ！ だけどおはなちゃんはハツとしてグツときてパツと盛り上がってます!!」

「「おおお〜〜!」」

「い、意味がわかんない」

「いーんです！ とにかく要するに一番の笑顔と一番の……そう、我らがキャプテンが先ほど教えてくれました、

『愛』

をもつてユア・ダーリンをお迎えください！

そのとびきりの笑顔こそが、本日の打ち止め、ラスト・ショットでございます

ッ!!」

「「おおおおお!」」

「う、うーん……」

わかつたような、わからんような。

とにかく、旦那さんだかなんだかが部屋に入ってくるのを、笑って迎えりやいわけね。

……できるかな、んなことやったことないし。

「アングスタン？」

「……まあ」

「ではスタンバイお願いします。最後は緊張しないように、モデルさんカメラマン、マンツー・マンツーで。我々は出ましよう出ましよう」

「はーい」

「あ……」

取り残されたはなこ、しようちょうことなしにベッドの上に座る。ぺちゃん。脚を左右に開いたおばあさん座り。

……変なことになっちゃったな。

笑顔……笑顔。

笑顔ねえ。

だから、苦手なんだってば。

でもま、やってみよう。

へへ。

……ダメだ。どうせ不自然な固まったヤツに決まってる。

でもダメだとも言ってられないし。カラ言うには……疲れて帰ってきた旦那さんを。

……私そんな家庭的じゃないし……

でもまあ、旦那さん自体はありえる話だろう。いや、ありえないと寂しすぎる。そしてその旦那さんが疲れて帰ってくることもあるだろう、そんな時には私なら、『一緒にクロスワード解こ?』
そうじゃないな……

——旦那さんが入ってきた。

ちよつと照れ笑いを浮かべて、大きなカメラを手にして。

想像の翼なんて、ひ弱な物である。実物を前にすると、ごく自然に、ねぎらいの言葉が出た。

「……駒川君、疲れた?」

「えっ!? えーつと、ううん! 大丈夫、全然」

「ごめんね、うるさくて。ウチのチーム。いつもあんななの」

「あ、ううん、全然平気だよ。僕、カメラ構えると、なにも聞こえなくなるか

ら」

「言ってたね。でもホントに平気？ カラとか、あれこれって指図うるさくない？ アーティスト相手にしてるのに」

「アーティストなんてとんでもない！ 三十六の出してくれる指示、凄く勉強になるよ。僕の考えつかないようなことばかりだから」

「そりゃあ……そうでしょうね」

空堀君、熱血漢は魅力的なんだけど、テンションが上がるとノリが良すぎる。時に、アクセルペダルを床ごと踏み抜く。

くすつ。

パシヤツ。

もうその音にも慣れた。

どころか、今、いい表情をしてたんだ、って知らせてくれてるみたいで、なんだか、聞くと嬉しい。

「……いい表情？」

「うん！　すごく！」

「えへへ」

はなこ、らしくもなく肩をすくめて、ちろつ、と舌を出した。

シャッターがまた一度、鳴った。

思い出した。

「……あ、そうだ、とびきりの笑顔しなきゃいけないだね。

……こほん」

咳払いの真似して、正座に座り直した。

可愛くはないかも知れないけど、この場面なら、たぶん、私はこうだ。

そして、こう言うだろう。

「……いい？」

「はい、どうぞ！」

覗くファインダーの中で、上目遣いで訊かれる。

頭にものすごく血が昇っている。ズキズキと、どこか切れてるんじゃないかと思うぐらい、血流が響く。

なんて綺麗な人だろう。

信じられないぐらい、綺麗だ。

もしこんな人が奥さんで、僕を待っていてくれたりするのなら、こうしてベッドにちよこんと座って待っていてくれたら、それは、どんなに幸せだろう。

撮る。

絶対にこの瞬間を切り残して、みせる。

逃さない。

「たくみくん……

おつかれさま」

その言葉と共に、三つ指をつくように深々と頭を下げた。それを上げて、微笑む。

その瞬間。

パシヤンツ！

ウイ——ン……

「あああつ!!!」

「？」

「あああああああああああ」

手の物体を睨みつけ握り潰さんが勢いで、唸り声を上げる匠。今まで見せたこともない、凄い形相。

「ど、どうしたの匠君」

「あああああ……あ、あ、あの、巻き戻し、最後一枚、連写で、僕、あああああ、三枚の一枚目、三六十二で数えてる、あの、あ、ああくそおおっ!! どうしてなんだよおこんな時に限ってえ!!」

内向きに爆発するかのような迫力に気圧されるが、言ってることはわかった。つまりシャッターチャンスを逃した、らしい。

「よりにもよっ……ああ、もう、僕、バカだ!!」

でも、そんなことなら、そんなに怒らなくても、自分を責めなくても、簡単じゃない。

「匠君匠君落ち着いて」

「うう、美原さん……」

もう、ホントに泣きそうな顔。

ちよつぱり不謹慎だけど、

くすつ。

まるで子供みたい。

男の子つてさ、いくつになっても幼稚なんだから。

笑顔は必死でガマンして、できるだけ優しく、言ってみる。

「……そんなことなら大丈夫」

「え？」

「みんなに黙って、もう一枚撮っちゃお」

「え……え、あ、えつと」

「誰も見てないよ」

逡巡する。不公平はやりたくない。だけど、撮りたい。

もし私が同じ立場だったなら。

撮影は切り上げて、終わりにしてる。

でもそれは、間違っている。

今、大切なのは、そこじゃない。

人は、ひとのことなら、よくよく見える。

まだ迷う匠に、優しく一喝。

「撮りたいもの撮らずに、なにがカメラマンですか」

「……」

顔を上げた。少し、驚いたようなその瞳が、時を置かずに、厳しく険しく、しかし澄み切った瞳に変わる。

あ……

ファインダーを覗いてる眼は、この眼なんだ。

私達被写体は、外した時の微笑みかしらない。

その目は、すべての真実を見逃すまいとするような、大空を舞う鷹のような眼。

ぞくぞく。

背中がなんか、ぞくぞくする。

そうまで言われて引き下がっては、カメラマンでは、いや、男では、ない。

「撮ります」

「うん！」

その言葉をハッキリ言い切ると、匠、ポケットから替えのフィルムを取り出す。しかし、慌てていた。あるいは感情の大きな揺れがそうさせたのか、普段ありえない、ケアレスミス。片手で開けたケースから、フィルムのパトローネが、滑り落ちた。

ポロツ。

「あ」

はなこ、思わず腰を浮かせ立ち上がって床に転がるそれを拾おうとする。

が、彼女も着慣れぬグブグブのパジャマ、余った裾を自分で踏むようにして、バランスを崩す。

「あっ！」

「美原さんっ!!」

ベッドの上から、落ちる。

全てを振り捨てて、それを支えに手を伸ばす匠。
胸にダイブ、全身で受け止める。

細さ、軽さ、小ささ、やわらかさ、パジャマ、髪、そしてつるつるの、肌。
いろんな情報が一気に入って、匠、なにがなんだか処理しきれない。まるで…

…

ゆめ、みたいだ。

しかし、そんな夢はコンマ何秒も続かない。
神様は暇だ。だから、悪戯ばかりしている。

——ガンッ！

そのまま、頭、二人分の加速度と重さをつけて壁にぶち当たった。
フーッ……

急速に薄れゆく意識の中、それでもまだ、匠は幸せだった。

“ああ、美原さんに抱かれて死ねるなんて……

それも撮影中……

なんて、なんて僕は幸せ者だろう……”

はなこはそれどころではない。

「……た、匠君!? たつ、匠君っ!! 匠君しつかり!

ちよつと! 誰か! 誰か来てー!! 早く!!! 誰かああ!!

たつ、匠君が、匠君が、

笑ってる~~~~~!!!」

視界が白くなる。真つ白の後に、見慣れぬ景色。

ここは？

「……よかった気づいたー！」

「ふう……」 「ほおー……」 「よかったよー」

聞き覚えのある声に、見慣れぬ天井。その視界に、とても美しい顔が覗き込む。
えーつと……堺さん、だ。手を伸ばすと、僕の額から何かを取り除いた。頭が
軽くなつて、じんじんしてくる。

あれ？ 僕、いったい、どこで何を……ああ！
がば。

「ああん、匠ちゃん、もうちよつと寝とき寝とき！」

「あ、僕、あの」

「すまん、匠。俺が悪かった」

ナナの手に構わず半身を起こすと、三十六が深々と頭を下げた。
見回せば、みんないる。ここはさっきの、寝室のベッド。

「……悪ノリしすぎた。テンション上げすぎると事故起きるな。悪かった」

「えっ？ い、いや」

「カヲは悪くないわよ。私。私がドジで、匠君助けてくれたの。だから、謝るのは私。」

「……ごめん」

「あ……」

ようやく記憶が明瞭になる。転けそうな美原さんを助けに行って、後ろにひっくり返って、壁で頭を……

「……いたたたた」

思い出すと、痛みが襲う。

「だ、大丈夫!？」

手をやってそつときすすてみると、変な風に頭の形が変わっていた。すごいたんこぶ。史上最大かも。

「……あはは」

「た、匠君？」

「ど、どないしたんや!? やっぱり頭やから……」

「アホ、ナナ、縁起でもないこと言うな!」

「あはは、違う違う。大丈夫だよ、こんなの。よいしょ」

「あ……」

言うが早いのか、ベッドを降りて、立った。小さく万歳なんか、してみる。

「撮影に生傷はつき物だよ。打ったり切ったり擦ったり、慣れてるよ。全然平

「気」

さすがに気を失った経験は、初めてだけど。

「せやけどおはながミサイルみたいに飛んできたんやろ!? はなミサイル。ほんまにだいじょぶ?」

「ワ、ワザとじゃないわよ! あの……ごめん」

「はなちゃんに詳しい状況聞いたよ。まるでナイトだね。お姫様を助ける」

「えっ? いや……あの」

美原さんを見ると、なんとも言えない表情で、ちよつと頬を染めて唇を尖らせている。

「というか、美原さんが転けそうになったのは、僕の責任」

「い、いいのよ、もう、わた、私が悪いんだから」

「「?」」

慌てて大げさに腕を振り回して、匠の言葉を止めるはなこ。

「でも、悪いことをしようとしたのは僕で」

「私が悪いんだって言ってるでしょ!？」

「お、おはなちゃんそんな怒らなくても」

「悪いことって何だよ、匠、お前なに、頭に血が昇って、襲いかかろうとでもした？」

「「えっ!?　ちがうちがう!!」」

匠とはなこ、二人でぶんぶんかぶりを振った。

真相は言いにくいが、そーゆー誤解も非常に困る。

二人して、見つめてあつてしまう。

「……なーんか変なの」

「なにい、なんか秘め事があるみたいやで、ぶぶぶ」

「え、えっと」

「もーいーじゃないそんなの!　匠君あたま大丈夫なんだよね!」

「うん。たんこぶできてるみたいだけど、平気」

「大丈夫じゃないじゃない！ 愛、それ貸して！」

愛から氷枕代わりの食品保冷剤を奪い取ると、匠の後頭部に無理矢理当てた。

ゴン。直撃。

「い、てて」

「あつ！ ごめん！」

「あ、だいじょうぶ」

「でも」

コネコネコネコネ。

はなこの手と匠の手が、まるで喫茶店の支払いを譲り合うおばちゃん達のように、匠の後頭部のあたりで保冷剤を巡ってゴチャゴチャする。

「いいから」

「持てるよ、冷たいでしょ？」

「いいから貸しなさい」

「大丈夫、大丈夫」

「匠君、頑固」

「美原さんも」

コネコネコネコネ。

なんだありや。

なにをじゃれ合っておるのだ。人が心配しておるのに。

……ま、ともあれ、身体は平気そうだ。それはなにより。

「ま、まあとにかく、そろそろ遅いし、今日のところは帰るとしますか」

「せやな。みんな、撤収準備くくく！」

「はくく」

匠とはなこは、まだコネコネしながら階下へ向かう。そんな背中を見て、流乃や三十六が微笑んだ。むろん二人は、気づかない。

——玄関先振り返って、主人に礼を述べる。

「大地、悪いいな、部屋ゴチャゴチャ弄って」

「いいよ、いい。楽しかったし」

「はは、そうだな」

「駒川先生、現像楽しみにしてます」

「まかせてください。頑張ります」

「じゃ大ちゃん、また明日午後」

「うん。今日はしっかり休んで」

「bye」 「おやすみなさいーい！」 「……さようなら」 「今日はありがとう、さよな

ら」 「また来るわ」 「おやすみ」

「バイバイ、またね」

「あんたも帰るんだ」

「バレタカ」

いつの間にか大地の横で手を振っていた美緒つぺの腕を引っ張って、駅への道を歩く。

閑静な住宅街、通い慣れた道。明るい街灯が照らす、静かな色ブロック舗装を踏んで歩くと、さつきまでの大興奮も静まっていく。

『……カラちゃんカラちゃん』

『ん？ なんや？』

くいくいつ、と袖を引いて、ナナ、前の二人——匠とはなこを指す。

静かに、でも楽しそうに、話をしている。もうさすがに二人の間に保冷剤はない。

『……おかしいやんな、あれ』

『ん？ なにか？』

三十六、とぼけてみた。

というよりももう、あれが当たり前になってる。

『おはな、バリア張ってない』

『……ふむ』

バリア、か。いい表現だ。普段の美原女史は、『かくあるべし』バリアみたいなのを、自分の周りに張っている。それが個性で、頼りにされ、尊敬されるところなのだが、触れるとすこしピリピリ来る。チームの面々は慣れてるし、そのバリアの内側を知ってるからなんともないけど、あまり親しくない人は。

匠は、こうして話すようになってまだ日が浅いのに、もうそのバリアを解いている。

それは匠の技か。

それとも。

『……匠ももう、チームの一員ってこった。従軍カメラマン、参謀閣下に認められたんだよ』

『ふうむ。それだけかな』

『おはなちゃんも、撮影が楽しかったのさ。お前だつてそうだろう？』

『ん。久しぶりやったけど楽しかった』

『モデル・難波鳴海としては、匠の腕はどうよ？』

『写真見てからやな』

『手厳しいな』

『現場で泣かされそうに厳しい先生でも、仕上がり見せられたらなにも言えん、そんなこともある。逆もしかり。仕事樂やったなあ、思うても、仕上がり何コレ』

『なるほど。じゃ仕事のしやすさ的には？』

『最高。過去最高』

『お友達割引抜きで？』

『当たり前やん、そんなん』

にやつ、と笑うナナに、プロの凄み。

『自分でもそやけど特にお蘭のノセ方とか、せや、あのおはなが人前でパジャマになつてんねんで？ つるつるつる、つてまるで撮影とかカメラとかを意識させずに『その気』にさせられてまう。……本物やね』

『やっぱ才能、あるんだよなあ……羨ましい』

小さくため息。

昔から写真見えて思ってたことだけど、改めて経験者がそういうと、ずっしり重い。

『……なに、あんたかてあるやん』

『アホか、俺のはただエンタメ書き散らしてるだけや。アートじゃねえよ』

『そんな才能、欲しいん？』

『……羨ましい、言うただけやろ』

ふふつ。

この人、憧れと向きの違いが、ちよつぱり可哀想。誰がどう見ても仕掛け人、企画脚本演出ディレクタープロデューサーの類だ。前線で身体張る芸術家、作家や俳優じゃない。なのに、本人は、それをやりたい。

だけど、それこそがこの人のいいところ。これが『プロデューサーでござい』みたいな顔でふんぞり返られたら、誰も何一つ話を聞かないだろう。一番身体を張って駆け回っているのを知ってるから、言葉に力がある。

『せやけどお前、今までの写真で匠の実力は』

『イヤやゝん、あんな舌出して脚こゝんな上げてる写真』

『FKの瞬間なんやからしゃーないやろ、実際あれ売れてるらしいし』

『制服の口がばー開けてゲラゲラ笑ってる写真ばかりやし！ 本当の難波鳴海をみんなに見てもらわな！』

『今日のが一番嘘……』

『なにい』

そうして二人、ひそひそ話す前に、静かに話す、また二人。

「……ごめんね、匠君」

「あ、もう大丈夫だよ。というより、あれは僕が、ドジで。ごめん」

「だから……」

「……ごめん」

「はは」

気が済まないのだろう。真面目すぎるのも、大変だな。

過ぎたるは及ばざるがごとし。

美原さんは、「過ぎてゐる」んだ。真面目すぎ、美しすぎ。

……なに言ってるんだ、僕。

「……悪いこと考えたから、罰が当たったんだ。はは」

「ふふ。そう、かもね。」

……提案したのは、私だけど」

「あ。……はは」

「ふふふ」

こうして話してみれば、撮影の時と同じ、まるで空気のように、気取らず気が置けない、とても人当たりの優しい人。

人物写真が得意、わかる。

老若男女誰も、彼の前では変な気の張りを持たないだろう。

それこそ、イヌやネコでも。

「でも、最後の写真、残念だったね」

「あ、うん……ごめん。美原さんのだけ、締まらなくて」

「私はいいけど……撮りたかった、でしょ？」

「……うん」

寂しげに微笑むその横顔に、本当に残念と悔しさがにじんでいる。おとうふの

ように柔らかい人かと思えば、セメントのように固くなる。

芸術家だからかな。それとも、こんな人なのかな。

不思議なひと。

「……じゃ、撮ろうか」

「え？ ……今？」

「じゃなくて、あ、もし匠君がよければだけど、明日練習が午後からだから、昼まで空いてるよ。街でも」

「それは……すごくありがたいけど、いいの？ 練習前」

「ぜんぜん。今日持ってきた服でいい？」

「うん、それはもう、おまかせします。美原さん、センスいいから」

「なによ、そんなのどこでわかるの？」

「あ、僕だつて多少は被写体見てるよ、その辺はなんとなく、わかる」

「へへ。そういうもの？」

「そういうもの。センスいい人の服は、板に付いてる」

「着こなしてる、つてわけね」

「あ、そうそう、それ」

「制服でも？ ユニフォームでも？」

「なんでも。美原さんの制服姿は……すごく、綺麗だよ」

「へえ。……ありがとう」

と、札を言ってみて、ちよつと考えると、少し、恥ずかしいセリフ。

いや、変な意味じゃない、変な意味じゃない。

「ま、まあとにかくそれじゃあ、ステーションに九時？ もっと早い方がいい？」

い？

「ううん、それで充分だよ。そんなに早くていいの？」

「私、朝は早いから。匠君も早そう」

「撮影は早朝も真夜中もあるから、目覚ましで起きるのは慣れてるよ」

「へえ、そなんだ。ふふ。四六時中、カメラと一緒になんだね」

「手放すのは、お風呂ぐらいかなあ」

「食卓でも？」

「うん。横に置いたり、膝に乗せたり」

「へええええ……偉いね」

「そんなこと、全然ないよ。美原さんも、参考書とかずつと持つてそう」

「んなことないわよ。どんなイメージなの」

「はは」

「ふふふ」

「だからだ。」

いつもいつも一緒にいるから、あの黒い大きな物体が、もう匠君の手の一部、身体の一部になつてゐる。だから、圧迫感がない。すぐ意識させなくなる。

なるほど、そこまで惚れ込む使いこむには、メーカーがその力と情熱と意地を

全て注ぎ込んだフラッグシップ・モデルでなければ役不足。だから彼は、そのために頑張っている。

「……匠君、私も写真、撮ってみたくなつた」

「うん！ いいね。写真、楽しいよ」

「今度教えてよ」

「教えることなんて何もないよー。なんでも、撮りたい物を撮ればいいよ」

「そんなわけないじゃない、ほら、シャッター・スピードとか、絞りがどうのとか」

「そんなの全部とおでもいいことだよ。撮りたいものを、撮る。写真つて、それだけだよ」

「そんなもののなの？」

「そんなものだよ！ 今はカメラも凄くいいし、シャッター押せばいい写真撮れるよ」

「そおかなあ。それもちよつかつこ良すぎるセリフだね」

「そおかなあ……」

——楽しい時間ほど、あつという間に過ぎる。いつのまにか、駅に着いていた。

「……匠君、どっちだつけ。あつち？」

「うん。美原さんは、逆？」

「うん。……じゃ、また、明日」

「うん。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

微笑み一つ、美原さんが頭を下げる。

下げてくれない方が、その笑みを見ていられるのに。

さっぱり踵を返して、スッスツと背筋を伸ばして歩いていく後ろ姿を見ながら、匠は胸のあたりまで挙げた手を、下ろし損ねていた。

『『……というか二人の世界過ぎない!?』』

その後ろ姿二つ見つめる、もう居ないもの扱いの、六人。

∞

耳が痛いほどの喧噪が去ると、耳が痛いほどの静寂が残る。

九人には狭すぎるリビングダイニングも、独りには広すぎる。

煌々と照る灯りがなんとなくもったいなくて、消した。

窓からは蒼い月明かり、星明かり。

「…………ふう」

息をつくと、肩が落ちた。ため息ではなくて、ひと息。

テーブルには、ラップをかけ直してくれた前菜盛りがたつぷり残っている。

『お夜食に。早めに食べた方が美味しいものが多いから』

それにしても量が多いし、押し込むように食べるにはあまりにもつたいない。おなかも減つてない。いつもそうだけど、みんなと一緒にの夕食は、食べ過ぎる。

「……朝食、かな」

思いつつラップを端だけ開けて、鳥ハムを一枚、つまむ。

行儀悪く立ったまま口に放り込むと。

「……美味しいなあ、やつぱり」

染み出すような味わいが、手間暇と、その——愛情とやらを、誇示している。でも。

“……さつきほどじゃ、ない”

メシは、みんなで喰うに、限る。

美緒のハムを持っても、薄暗い空のリビングでは、こんなものだ。

“……そうだ”

大地、そのオードブル盛りを持って、リビングのローチェストの上にある、小さな箱の前に膝立つ。箱の観音開きの前扉を開けると、中には。

“……かあさん”

の、写真。

あたりまえのスナップが、どこにでもある木のフレームに入っている。

辛気くさいことなんかできねえ。

アイツも線香とか別に好きじゃなかったし。

父さんの言葉。マンション用の小さなお仏壇を買ってきて、その日に中の仏様と、キラキラした紙とを捨てた。

いいの？ 罰が怖いよ。

笑って言うのと、

バカ野郎、坊主はこれに魂入れるのに金取るんだぞ。てことはこれはまだ、ただの人形だ。

半分怒って、半分笑っていた。

今の世には珍しいほどにぎっかけない父さん。そして、あの頃にも珍しいぐらい、おしとやかな母さん。だけど、だからか、息子が見ても羨ましいぐらい、仲のいい夫婦だった。

“……父さんは、母さんだけを拝みたかったんだな”

スナップで笑う、白い上着白いスカートの母。

想い出も身内鼯鼠もみんな込みで、世界一綺麗な、ひと。

『あんな美少女に囲まれて、いいよなあ』

そんなことをよく、言われる。

いや、母さんに比べれば、みんな、まだまだ。

“なんて言うかと怒られそうだなー……”

苦笑いして、独り、頭を掻いた。照れても、いる。

マザコンだな、僕。

アホか、男の子はみんなマザコンや、つちゅーねん。

そうかなあ？

ここだけの話やけどな。……俺のおかん、ナナにそっくりやねん。

わははははははは……

もちろん、鈴もない。大皿を横に置くと、しっかりと手だけを合わせた。
でも。

今は静かでも寂しくても、ああやって騒いでくれる友人が、僕にはたくさん居る。これ以上ありがたいことが、ありえるだろうか。

眼を開けると、かあさんは、いつものように、微笑んでいた。

ふと、まだ子供子供していた中学初めの美緒が、台所にかあさんと並んで立っていた絵を、思い出した。エプロンもブカブカで、背も低くて。

娘のようだと、いつにもまして、笑っていた。

“……もちろん美緒もです。忘れてませんよ。言わなくても”

もう一度眼を閉じ手を合わせて、心の動くままにする。

すこし。

「……さて。下げます。冷蔵庫に入れておかないと、美緒にまた怒られます」

『いちそうさま』

声が、聞こえた。

ママの店

「……あつ、お待たせ！ ごめんごめん」

声が掛かる、振り向く、そこに笑う、匠君。ステーションの時計は、二分钟前。
「待ってないよ、今来たところ」

一三分前を「今」というのならね。

「……匠君」

「はい？」

「時間前なんだから、別に謝らなくても」

「待たせていたら、悪いかな、と思って」

「もしそうだとしたら、それは私が勝手に待ってるんだから」

「もしそうだとしたら、待ってもらってるんだから」

「頑固ねー」

「美原さんこそ」

二人で、笑った。

別に責めてるわけじゃなくて、なんだか匠君の「ごめん」には、本当に申し訳ないという味がついてて、聞きたびに自分の行動を一々チェックしてしまう。気になる。

「……こんな感じの服で、よかったかな？」

「え？ あ、もう、全然、ばっちり。完璧」

「完璧……って言われても」

お気に入りだけど、ただの普段着。ピンクのTシャツに、白のシャツとベージュのパンツ。

「スニーカーがかわいいね」

「お」

普段ならたぶんぺたんこの革靴あたりだけど、今日はちよつと可愛い方面に振って、定番バツシユのローカット、色はオレンジ、素足で履く。わざとハズしたところをわかつてもらえると、嬉しい。

「匠くん、見る目あるね！」

「お洒落は足元に出るよね。着る物はお金掛ければごまかせるけど、履く物はその人にフィットしてないと絶対にズレるから」

「ううん、お金さえ掛ければ、そこもごり押しできるよ。もちろん私にはできないけどね。あと、小物もね」

抱え直すキャンバスのトートバック、白とベージュに生成り地がよく合う。

「そうなんだー、もう、有名ブランドのは力強すぎて、持つてて人撮るとそこだけ浮いちゃうんだよー」

「へえ」

「見えない角度から狙ったりね」

「大変だねー」

「うん。写真はやっぱり、見たことのないものを見るものだから、そこに見たことあるものがあると、目線がまずそこへ行くんだ。これが曲者で」

「なるほど」

「まさか街歩いてる人撮る時に『それ持たないでください』なんて言えないし……と言つても、たいていそういう人で撮りたい人はいないけれど」

「今日の私は？ 撮りたい？」

匠の写真論に乗せられて、流乃みたいなことを言ってみる。

「うん」

素直にうなづく彼。

そうシンブルに言われると、嬉しくなるしかない。素直が素直を呼んで、素直に礼を言う。

「ありがと。……では、どこへ行きましょう」

「えと、考えてきました。美原さん、普段このあたりぶらつく時には、どういふお店に行きますか？」

「え？ んー……やつぱり、まず服のお店かな」

「じゃ、そこへ行くのはどうかな。楽しそうにいつものとおりに、つていうのがいいかな、と思つて」

「なるほど、ね。わかつた。じゃ行こう」

「あの、超高級店じゃないよね？」

「うん、もちろん。超お手頃店……あ、そだ！」

はなこ、あらためて匠を、頭のとっぺんから足のつま先まで、ジロジロ数往復。

「……な、なに？」

「匠君も、そこで服買っちゃおう！」

「ええっ!？」

だつてご覧なさいよ。

あんなに絵づくりにうるさい当の本人が。

匠の格好は、「カメラマン」イメージそのもの。スタジオから駆けつけましたと言わんばかりに、手にはいつもの黒いプロ一眼レフ、肩から下げる大きなアルミのカメラバッグ。そしてベージュ色の、なんだかポケットのいっぱい付いてるベスト。それもポケットに物詰め込んで、ぷくぷくになっている。

まあ、それは職業柄しやうがないでしょう。プロ・グッズなだけに、渋さや力強さがあると言えなくもない。

しかし問題はその下で、まず擦り切れ倒しのボロボロの、体型にも何にもあつてない図太いジーンズ。白のTシャツは当たり前のように首のところがヨレてて、その上になんだか変な格子柄の妙にゴツイ生地 of シャツ。まして話題の足元たるや、「今から山ですか」と問いたくなるハイカットのトレッキング・シューズ。革ならまだ洒落つ気もあるが、新素材系で、色は濃紺。

絶対的に、ダメだ。

ゆるせない。

なんだか見てるだけで腹が立ってきた。

なによもう、結構顔立ちとか優しそうでいいんだから、ちゃんとした服着ればもつとイイに決まってるのに。

「でも、僕、お金は貯めておかないと」

「奢る」

「え、ええっ!? ま、まさかそんなことさせるわけには、第二」

「いいから来なさい!」

「えっ、ちょっつ、あの」

わしっ、と手首を掴まれて、引きずられていく。

「……あの、撮影」

「それどころじゃないわ」

手首を引く強い力に、「美原さんだなあ」と変に感心した。

普通に手を持ってくれてもいいのに……

いやいや。

——駅前商店街アーケードの中に、間口の狭いお店がある。道にはみ出すように、そして見えているその狭い店内にも、服、服、服。それも小綺麗なディスプレイなどこれっぽっちも考えられていない。とりあえず、ありとあらゆるジャンルの洋服……いや、浴衣なんかも。とにかく服飾品が、ぐじゃぐじゃと詰め込まれていた。靴もある。バッグもある。わけも、わからない。二四時間営業の安売りなんでも店、あれの服版、みたいな感じ。

しかし店頭に立つと、匠は声をあげた。

「……あつ、ここなんだ」

「あれ、匠君知ってるの？」

「ううん。でもいいお店だな、つて撮ったことがあるよ」

「へえ。お店も撮るの？」

「いいものなら、なんでも。このステーションの周りは、相当歩いたよ」

「さすが匠君。このお店ね、いいお店なの。」

……ママさーん！」

また手首を引つ張られて、二人で雪崩れ込む。

低いんだか高いんだかわからない、地の底から聞こえるような大声が、出迎えた。

「はーい、いらつしゃ……あああはなこちゃーん!!」

「こんにちわー！」

カシャン！

今の笑顔いただき。好きなことになるとやはり、人の瞳は輝く。

いい笑顔の美原さんと、彼女を抱きしめるように出迎える女主人とのツーショ

ッ……女？

「マッ！ はなこちゃんなにこのステキな男の子！ 彼氏!?」

その皺と化粧で元のパーツの位置がわからない初老のママさんは、でっぷりとした身体を揺すり顔面中の皺を移動させて、ねつとりと笑う。体重はまず三桁を下らない。B―W―Hで真ん中の数字が一番大きな樽型体型、それを包むは漆黒の地に巨大で真っ赤な薔薇が乱舞する、ものすごいドレス。

匠、その余りの迫力に目を奪われる。

しかしよく見れば……服と体型が見事に拮抗している。ために嫌味エグ味ゼロ。まるで童話のキャラクターのように、見事に成り立っている。

「なに言ってるんですか、同級生。今度からね、うちのチームを撮りまくってくれる、写真家の大先生。匠君、つていいいます」

「あ、はい、あの、駒川匠と申します」

「オオオウ！ キャメラマン？ ミラクルにはいろんな男の子がよりどりみどりでねえ」

「ミラクル『ズ』よ、ママさん。今日は匠君の服、選んでもらおうと思って！」

「オオオオオ」

両手を広げて天を仰ぐ。それが自然に出てる。まるでイタリアの映画に出てくる、パスタ死ぬほど茹でてくれるマンマそのものだ。こんな人が日本にいるなんて。

「あの、えと、それもなんですけど、今日はちよつと美原さんの写真も撮ってるんです。店内、ちよつと写してしまってもよろしいでしょうか」

「ン、モウオウ！」

バシーンッ！

ママさんの大きな分厚い、赤ちゃんの手をそのまま巨大化したような手が、匠の肘を殴りつけた。本気で痛い。

「そんなのどんどんやっちゃって！撮っちゃって！」

「はは、マ、ママさんもよろしいですか？」

「もちろんよッ！」

言うや、オペラ歌手の絶唱がごとく胸の前で手を組んで顔面崩壊、いや笑顔。なんて絵になる人だ。

パシヤリ。早速。

「あは、私よりママさん撮る方がいい写真撮れるかも」

「美原さんには悪いけど、写真としてはそうかも」

「あはは」

「うゝん……」

ママさん、その太い人差し指と中指で交互に顎をトントン叩いて、自らの城を見回す。その様子も面白くて、パシヤッ。

「ハンサムさんは、難しいのよねえ……」

「あの、僕、あんまりお金ありませんので、安いので……」

「ムフフ、それは大丈夫よ。ママ、タクミ君気に入っちゃった。」

お近づきのしるしに、今日は大サーヴィスしちゃう」

ばちーん。

ものすごいウインクが飛んできた。

なんだあのつけまつげは。マツチ棒が箱ごと乗りそうだ。『サーヴィス』の発音もまた、なまなましい。

「大丈夫匠君、このお店、値札あつてなきがごとしだから。ママさんの気分でいくら決まるの」

「そうなんだ」

「ウッフッフッフッフ」

実に蠱惑的……虫が惑うような笑みを浮かべてウンウンとうなずく。なるほど、気に入られているらしい。はなこ、まるで従業員のように狭い店内を探し回って、「これとか!」と声を上げた。こちら向き、拡げてみせる、ピンクのシャツ。

「いいわねえ! その線で行きましょう!」

ママさんにもピンと来たらしい。はなこの手からふんだくるようにそれを奪うと、匠に当ててみてまたウンウン。

「下はこの、空色のシャツを合わせましょうか。パンツはダークグリーン……いえ」

「思い切って白とか！」

「オウ！ 素晴らしいけれど派手に過ぎないかしら……」

叫ぶように叫びながら、匠の身体を空港のボディチェックのようにパタパタと触りちらす。いや、顔はそんなペシペシやつてもらっても、変えようもない。

こういう様子こそがシャッター・チャンスなのだが、匠さすがに黙ってされるがままになっていた。

なんというか、熱意、いや情熱がそのまま伝わってくる、いい人だ。美原さんが気に入ってるのも、よくわかる。

「タクミ君ごめんなさい、カメラマンのハートだっていうのはよくわかるん

だけど、そのカメラすこうしこちらへ置いていただけないかしら。目を、邪魔して」

「あ、はい！ すいません」

「ノウ！ 謝るのはわたし、ママの眼力の無さよ、タクミ」

アルミのバッグを肩からおろし、そこに置いた。ママさんの手のパタパタが、二倍速になる。

「いけるわッ!!」

そして叫ぶ。

なんて楽しい人だろう。

タクミも、笑えてきた。

「おはなちゃん！ 白いきましょう！ 見れば見るほど美少年じゃない！」

照れて笑うしかない匠にピンクを当てながら。はなこも腕組みでうなづく他なし。

「カメラ、やつぱり黒くて大きいですからね……そうだ！ ママさん、ちよつとやつててください、すぐ戻ります！」

言うが早いのか、店を飛び出すはなこ。

猛獣の檻に一人残される匠。

猛獣、擦り寄る。待つてましたといわんばかりに。

「ウッフ……タクミ君」

「あ、は、はい」

「おはなちゃんと、どういう関係なの！」

「あ、いや、ですから同級生で」

「ウソ！」

いや、それは本当で。

「いつもクールなおはなちゃんがあんなにはしゃいでいるんですもの。隠さなくつたっていいのよッ！」

「いやあ……そうだったらいいんですけど、ほんとに、ただの同級生です」

「そうだったらいいのね、フフフ」

「えっ!? いや、えーと」

誘導尋問かな。

海千山千、皺の深みに人生の深みを感じる。タダモノではない。

いろんなものをその巨体で転がるように乗り越えてこられたのだろう。

掛ける言葉はただひとつ、そして、それで充分重い。

「……がんばんなさい」

付属してくるウイंकがまた、とてつもなく重い。

まったくかなわない。

そう悟った匠は、素直に負けを認めた。

「……はい。頑張ります」

そしてママさんは、素直な若者が、大好き。

また大きな両の手で匠をバシバシ叩いた。

「ムッフッフッフッフ……着替えましょう！ ママが着替えさせてあげる」

「えっ!? いや、で、できます自分で！」

「遠慮しないで！」

「いや遠慮じゃなくて」

「うーん、早くしないとおはなちゃんが帰ってきちゃう」

理由になつてない。

「えっ、いや、あの……これですね、着てきます!!」

ふんだくるように一式掴んで、カーテンルームに駆け込む匠。 ママさん、

「オホホホホホホホホ……」

と高らかに笑う。

結局、遊ばれてるんだけど、こっちも、楽しい。

いきなりカーテンを開けられる恐怖にまだ幾分ビビりながら、匠、そんな感想

を持った。

撮り甲斐。それは、そこらに転がってるものではない。

——間もなく、はなこが帰ってきた。ちょうど、着替え終えた匠が出てくる。

「ワオ!」

この店には、ママさんのフォースが充満している。はなこも、そうなる。

「……似合って、ます?」

「もちろんよー!」「いい、いい」

ママさん優しく、母親のように前髪など直してくれる。

ピンクのシャツなんて、着たことなかった。自分じゃ鏡を見てもピンと来ない。ま、ママさんがいいと言うんだから、間違いないんだろう。

「……あらためて見ると美少年ねえ、おはなちゃん、ミラクルには美少年ばかりね」

「ミラクル『ズ』です。ええ、まあ、面構えで言うならそこそこのが揃ってますね」

「ママね、大地君が大好きなの」

「あれは人気がととても高いので、無理です」

「ううん、そんなこと言わずに。でもタクミ君みたいな優しそうなタイプもとてもいい感じ」

なにがそんなこと言わずに、なのかよくわからないが、とりあえず誉めてもらってるらしい。

「大地君もここへ？」

「みんな引つ張ってきたの。カラとかも」

「カラちゃん！　そうあの子もステキ！　知的で生意気で！　あの生意気なところを踏みにじりたいわ！」

「あれは売約済みで」

「そんなものいかようにでもなるわ。恋に国境は無いのよ」

今問題は国境だったつけ。

というより、なんでもいいのだろうか、ママさんは。

見渡せば、本当に様々な種類と、色と、形の服がある。実にシックな高そうな黒のスーツから、サイケな色破れかぶれの、これ、売り物ですか、って物まで。

本人の見た目どおり、幅が広い。

こんな派手な色、もし母親が買ってきたら気恥ずかしくて着もしなかったかもしれないけど、この空間で着れば、まるで違和感がない。それどころか、もつと派手でも、いやもつと変わったものでも、とさえ思う。

ひとしきりミラクル談義が盛り上がる中、つぶやいた。

「……いい、お店ですね」

「そお？ ウフフ、ありがと」

「そうだ、忘れるところでした。記念撮影しましょう」

「ん？」

言うと、はなこは手にしたコンビニの袋から、小さなビニールパックを取り出した。

「あ、レンズ付きフィルム」

正式名称で言ってしまうところが、本職らしい。使い捨てカメラ、『写りマズ』。

「へへへ、買ってきました。はい、ママさん匠君、ならんでならんで」

「え、僕と？」

「ウフフ」

疑問を呈する間もなく、ママさんにギュッと引き寄せられ、くつつかれる。腰に回した手。

「たくみくーん、肩に手を回してみようー」

言われるまでもなく、ママさんの逆の手がぎゅいーんと匠の右腕を拉致すると

ころだった。

「ああ、ステキな親子」

「おはなちゃん失礼ね。恋・人・同・士！」

「あはは」

「失礼しました！ 撮りまうす！ はい、チーズ！」

ぱち。ピカッ。

小さな安っぽい音と共に、フラッシュが光った。

「替わるよ、おはなちゃんも」

「ん」

並んで立つと、今度は……

「……親子というより、師匠と弟子、かな」

「「あははは……」」

パチ。ピカッ！

ママさん、丸い目をさらに丸くする。

「……上手いわねえ！」

「言つたでしょ、匠君は写真家だつて」

うんうん。深くうなづくママさん。

「……ねね、匠君、今日はそれで撮つてみたら」

「えっ？ これで？」

手には、紙の外装も頼りない、小さな箱がある。普段使つてるプロ・システム一式に比べれば、カメラとも言えないようなカメラだ。だけど。

「そうよう！ んもう、せっかくステキに仕上がったのに、あんな黒いの持ったりあんな銀色の大きな箱持ったりしちゃ、全部台無し！ あのカメラ服も！」

「う、うーん……」

「どうせお昼までだし、ちよつと預かつてもらおうよ。服ごと」

「だけ……」

ど、と言いかけて、止めた。

写真は、いつでも撮れる。いや、この手元のコイツで、撮れる。

今日は、美原さんとママさんを選んでもらったこの服を着て、街を歩こう。
そういう、日かもしれない。

「……そんなお願いをしちゃってもいいんですか」

「もちろんよ!! だってママさん、タクミ君が大好きなもの」

「あはは」

「そうよ、こんなのなんでもないよね。ナナなんかね、『売れ残りありませんか』って服のリサイクルに来るもんね」

「もう、ナナちゃんも失礼なのよ、ママの選んだお洋服に売れ残りなんてありませんわ」

「さすがですねー」

「だから、仕入れて三年ぐらい経ってるのをあげるの」

「あははははははは」

匠、腹を押さえて笑った。野暮なツツコミは、無しだ。

「おつかしいでしょう、ナナもそれ、喜んで持って帰って着るのよね」

はなこも笑いながら、そう言う。確かに、難波さんの私服って、試合前後に着てるのを見ると、微妙にちよいズレなことが多いけど……こういう裏があつたとは。

「じゃ、ママさん、お昼過ぎに取りに来るから、それまでお願いします」

「はいはい」

また身体中で笑うママさんに、おずおずと尋ねた。

気に入っている。少々なら、しょうがない。

「……それで、えーと、この服」

「大サーヴィス、って言ったじゃない」

バチーン。

また両目を瞑るようにして大ウインクが炸裂する。商売人、呼吸を読む。

「着て行きなさい」

「まさか、そういうわけには」

「いいのいいの。その代わり……また来て」

「ですけど」

「その時には、今日の写真の一枚も持つてきてね」

おほほほほほ……

オペラの一場のように、高らかに笑った。それで、幕である。

「……はい。きつと。できるだけ引き伸ばしてきます」

「そんなのいいわよ。実物が居るんですもの」

言つて、ママさん、はた、と気づいて、無い小首を傾げる。

「……でも、タクミ君なら、本物より美しく撮れちゃうのかしら」

そこに思いが至る。やはり、ただものではない。

「ありえないです。ママさんの美しさは、僕ごときの手に負えません」

「オッホッホッホッホッホ……ミラクルの男の子はみんな口が巧いわね。おはなちゃん、素敵な彼氏、羨ましいわ」

「ミラクル『ズ』です」

——並んで、店を出た。

肩も右手も軽くて、なんだか変な感じだった。

振り返ると、店と服とに埋もれた、ママさんが笑って手を振った。

二人で同じように、手を振った。

∞

「……匠君、凄いね」

「ん？ なにが？」

「なかなか、ママさんのお眼鏡にはかなわないわよ」

「そうなんだ」

好き嫌いは激しそう、かな。

—— 駅前の公園。商店街。

話ながら、撮りながら、回る。

「……素晴らしいママさんだね」

「昔は」

この人も見る目あるな。

「パリ・コレに出るデザイナーだね」

「やっぱり！」

「お仕事で成功して、アトリエ持って、ガンガンやって、騙されて、乗っ取られて」

「わ……」

「全部失って放り出されて、初めて気がついたんだって。

『私は、服が好きだ』。

それで、現在に至る」

「そこまで行つて、それができるのも、すごいよ」

「凄いわよ、名前売れてるデザイナーさんとバッタリ会うことあるもの。あのお店で」

「……まさにママさん、だね」

「そう。師匠」

「お気に入り弟子だね」

「あんまりセンスが無いから、きつと見てもらえないのね」

「またまた」

一回りして、一休み。時間は、もう一一時を回っている。

「……早めにお昼にしましょうか」

「美原さんがよければ、僕はなんでも」

「うん……撮影、大丈夫？ 私は適当になんか詰め込んでいくから、時間が欲しければ」

「ううん、大丈夫。美原さんしっかり食べなきゃ、練習で倒れるよ」

「そ、ね。ふふふ」

なんとなく、今日はもう、このままプラプラしたい気分。

……っていうのは、ダメかな、やっぱり。

「どこへ行きましょう」

「ん」

ごく真つ当に行くならイタリアンの『タベルナ』。洋菓子の『エスポ』もランチパスタがあつて、結構いける。少し歩いて、『山嵐』……ダメだ、どうして定宿ばかり出てくるんだろう。せつかく……せつかく？

「……普段行かないようなところ行ってみようかな」

「うん、賛成」

「ハズレたらごめんね」

「経験値稼ぎになるから、いいよ」

「ふふふ……美緒みたいなこと言ってる」

「長居さん？」

「あの人も、凄いよ。……こつち」

駅前ショッピングモールの一階に、オープンカフェがあつた。割と本格派で、白黒の制服と伸びた背筋も晴れやかなギャルソンが居る。一目、店内ディスプレイやメニューにも「それっぽい」ものが並んでいる。一度挑戦してみたかったのだが、あの連中でドヤドヤ押しかける雰囲気でもなし、でも独りで入るには、敷居が高く。

「食べ物屋さんは、店構え見ただけでゴー、アウト、アタックの三種類に分ける

の

「へえ」

「美緒がゴー出した店は一〇〇%当たりね。アウトの店も一〇〇%ダメ」

「問題はアタック、なんだ。行くお店は、そういう？」

「ん。美緒曰く」

『殻は頑張ってるが、そこでエネルギーを使い果たしている可能性がある』

「わは、すごいな」

家庭的な長居さんと、そのやたら分析的なセリフとが、ミスマッチ。

「美原さんが代わりにアタック？」

「というより、美緒と私だとウェイトが違うから。美緒はもう、マズイと口もきかなくなるけど、私は雰囲気とかで得点あげちゃうから……ここ」

「お。……ん。いい雰囲気だね。頑張ってる」

「やっぱり、匠君が見ても『頑張ってる』になるかなー」

「難しいよ。本物ではありえないわけだから。日本語だし、日本人だし。でもよく、雰囲気残してると思う」

「海外のご経験が」

「ヨーロッパなら、何度か」

「匠君ち、お金持ち!？」

「全然。父が仕事の関係でしょっちゅう向こう行くのでくつついて……いつも安売り航空券探すのは僕の役目。メソポタミア航空とか」

「へえええ」

意外な一面を見た。でも、航空券片手に空港で並ぶ姿も、様になりそう。

「……突つ立ってないで、いきましようか」

「アタックですね」

「ん。……やっぱり、外だよ。いい？」

「もちろん」

普段なら店内だろうけど、今日はなんだか、いけてしまう。服のせいかな。それとも、美原さんに引つ張られてるのか。

並んで掛けると、ギャルソンが来た。歓迎は一言だけ、可愛いグラスに氷水、おしぼりは無し。革装のメニューを開くと、一品ずつが写真で入っている。

「……なにしょ」

と言つても、存外選択範囲は狭い。もう少しレストランっ気があるかと思つたけど、あくまでカフェ。サンドイッチ系とパスタ系が数種類ずつで尽きる。それに、やつぱり高い。

「……私はバゲットのサンド、生ハムとチーズ。それにアールグレイ」

「……」

パタパタとページを繰つて、匠は顔をしかめている。

失敗、したかな。

「……お気に召さない？」

「ん？ あ、いや。……写真、ちょっと、と思つて」

「写真？」

メニューに入つてゐる写真のことか。確かに、ちょっとくすんでいて、あまり美味しそうには見えない。

「食べ物の写真、つて難しいんだよ。それ専門の人もたくさんいて」

「へえ」

「仕出し屋さんとかお弁当屋さんとか、売り上げに直結するしね」

「なるほど、ね。なに、写真を舐めるな、つて？」

「ご飯の時ぐらい、写真のこと忘れればいいのに。軽くそう思つてつついてみると、慌てて、笑つて首を振つた。」

「違う違う、もつたいないな、いい雰囲気のお店なのに、つて思つただけ」

「メニューも特別な感じ、出したかつたんでしょうね」

「惜しいなあ……僕は、ハーブチキンとバジルのパニーニと、キャフェ・クレー

ム。呼びます」

言うと先ほどのギャルソンを捜して、ほんの少し、指をあげた。飛んでくる。丁寧におーダーを通す。その様子も、かなり様になってる。

また意外な一面……というか、そうなるか。

「……さて、吉と出ますか凶と出ますか」

「お父さんのお仕事は？ 訊いていい？」

「うん。えーと……画商、みたいなもの」

「へえ、すごいじゃない！」

「すつごく小さいところだけど」

そういう流れか。DNAっていうのは、強い。思えば、名前も。

クスクス笑って、言った。

「息子さんに『匠』ってつけるぐらいだから、大工さんかな、って」

「いやあ、そういう仕事してるくせに、実作能力ゼロなんだ。凄いよ、ネコ描く

と脚が五本ある。指摘すると、シッポだって言うんだ。もちろん、シッポも別にあるんだけど」

「あはははっ……それで子供には、かなー。情念たつぷりのお父さんだね。やっぱり、芸術関係の方」

「好き嫌い激しくてさ、商売人じゃなくてさ」

なんだか照れくさそうに、目元を細めて言う。

「カメラは父さんがずっと持っていて、趣味で、で、僕が触りでしたら……当人喜んじゃってさ、今もお店の経費でいろいろ落としてくれて、これも」

と言つて右手の『写りマス』を上げた。笑う。

「……違った。いつものアレも、高校入学祝いにかこつけて、押しつけるように買ってくれた」

「期待してるんだ」

「うーん……みたいだね」

「いいね、そういうお父さん」

「いやあ、うるさくて、これが」

今度は本気で、眉をひそめた。

「あ、そっか。画商さんだもんね」

「厳しいよ、ホントに。『こんなもんじゃ売り物にならない』って。自分、売り物にならないような絵ばっかり仕入れてくるのに」

「あははは」

「他人のことだとよく見えるんだよねえ」

「そうね。でも。」

語るに足るから厳しく言うのよ。言うレベルに達していなければ、見もしない」

「……そう、かなあ」

「そう。ウチのチームもそうだもの。コーチがうるさく指示を出すのは、キャプ

テン、エース、ナナ。エレーナなんか、『最近、修正入るようになりマシた!』
つてニコニコ笑ってるもの。あの笑顔で」

「へえ」

たまには、愚痴も漏らしたい。聞いてくれそうな時には。

「……私なんか、たいてい一言も無し」

「それは、美原さんが完璧にこなしてるからじゃないの?」

「まさか」

ぶんぶん、今度ははなこが両手を振った。

「DFとしては、流乃まで入れると六番手。することないから、作戦練ったりの
手伝いするんだけど、それもまあ、気休めで」

知らず、ため息も出た。

言つて嫌になつてきたが、勢いで吐き出した。

「言つたことなんか、聞いてくれたことないし」

「でも、それが」

間髪を入れずに、言葉を繋かれる。思わず、目を向ける。

「大地君にとつては、ありがたいんじゃないかな」

笑って言った。三十六もそう言つてたし、見てもそう思う。

「……理屈では、そうかもしれないけど」

「いろんな役割の人が居るよ。チームには」

「……そうかも、しれないけど」

一二時が近づくにつれ、目の前をゆく人の流れは増え、数あるテーブルも、賑わいだす。

「——実は目立ちたかったりして」

「まさか」

言下に否定したが、「役立ちたい」という気持ちを言い換えれば、そうなるかもしれない。

「愚痴っぽくなっちゃったね。ごめんなさい。特に不満があるわけじゃなくて」

「美原さんは」

言い訳するはなこを制するように、匠が静かに言った。

この人の一言には、なにか重みがある。

普段優しく圧迫感がないだけに、前に出てくると、際だつ。

こういう出入りの仕方も、あるものなんだ。

「いい選手だと思う。僕はサッカーは素人だけど、速いし、動きにキレがあるし、声を出すし、うん、迫力があるよ」

「迫力、ね」

ま、それを無くしたら終わりだ。それしか売り物がない。

「……二つ前だつて。此花さんの凄いシュートの試合で、一番後ろの真ん中に途中から入ったでしょ」

「……ええ」

いきなり詳細に入ったので、少し驚く。

そうか、この人は、ずっと見ているんだ。

「あの時とか凄かったよ。ガンガン前へ行って、相手の選手潰して。そう、1点目。美原さんのアシストだったじゃない」

「あれは可憐のシュートよ。アシストなんて立派なものじゃないわ」

どがんと蹴り出したロング・フィードを、勝手にダイレクトでシュートしてくれて、点になっただけだ。パスとか、そういう次元のボールではない。

「でもなんか、ああいうボールを、よく見るような気がするな。美原さんのロングパスは、すぐ結果につながってるよ」

「まあ、高めのラインが好きだから、私が蹴れば前線との距離は、もも先輩よりは近いかも、ね」

そう言われれば、確かにそうだ。物理的に、確率が高くなるかもしれない。最終ラインから正確な長いパス。それだけなら、梅田先輩にも負ける気はしない。

「でも、よく見てるねー」

「スポーツ写真は、先読みが肝心だから」

と、おどけて、手元の『写りマス』を構えた。左手で、空中のズームリングを回している。

「ふふふ」

——お料理が来た。

お。見た目は、なかなか。

「「いただきます」」

結構なボリュームのそれにかぶりついてみると、もっちりしたバゲットと、歯ごたえある生ハムとが……とが……とが……とが……

「……あはは、苦勞してるね」

「……はへひふい」

ハムスターみたいに顎を動かして、ようやく噛み切った。

味は……まあ、まあ、まあ。ペッパーきつい。ハム生っぽい。チーズくどい。バゲット固い。でも、全部本物ではある。

「お味は？」

「……食べにくい」

「まずかないってとこだね」

「そっちは？」

すつ、と持つてきてくれる。なら、遠慮なく。

「こっちでいい？ 回すと落ちそう」

「美原さんがいいなら」

かぶりついてみた。

うーん、これも、生地は売り物かな。中のハーブチキンもそれっぽい。

つまりはバラバラだが、またどれも、本物。

「傾向が読めた」

言つてバゲットを差し出すと、

「こつちでいい？」

「匠君がいいなら」

食ベにくそうに、顔をしかめてもくもくやつてる。ようやく噛み切ると、

「……パーツ単位なら、つて感じだね」

「これつてなんて言うの？ 可もなく不可もなく？ じゃないよね」

「そういうのは三十六にでも訊いて……」

『もうすこしがんばりましょう』、とか」

「「惜しいなあ」」

「……」

「……」

「あはは」

「ふふ」

「……そっち、食べやすいんだったらどうぞ」

「味はそっちのバゲットの方がパンチが効いてるかな」

「はは、両方でもいいよ」

「そんな食いしん坊じゃありませんー」

「あ。『お目が高い』って言えばよかったのかな。うん、こっちの方がハッキリした味だよね」

「そう言われるとそっちが惜しくなるな」

「じゃまた交換しよう。最後一口分」

「そっちの最後はパンばかりになっちゃうじゃない」

「そう言われても構造上。あ、じゃこっちから齧ろうか」

「それもなんか小汚いなー」

「そう言われてもー」

匠がくるくるとバゲットを回しているうちに、はなこはもしやとパニー

ニを食べ進む。匠、急ぐものでもなし、とそれを置いて、キャフェ・クレーム。
はなこもティーカップを手にする。

「これはまあまあ」

「こつちも」

その白く大きなボウルに注がれるはなこの視線に気づいて、差し出す。

「ううん、おっきなカップだな、つて」

と言いつつ受け取って、一口。

まあまあ、いける。

ふんふんふん、と小さくうなずいた。

「それもまあまあ？」

「どしてわかるの？」

「顔に書いてあるよ」

「んふふ。……匠君、アールグレイはあんまり？」

「む。どうしてわかるの？」

「眉間に書いてある」

「あはは」

はなこが、自分の眉間に人差し指で三本縦線を引いた。

「本格的なのほど、キツイなあ」

「そんなことないよ、ホントに美味しいのはホントに美味しいよ？
でもらってごらんさい、一発でファンになるから」
美緒に淹れ

「そおなんだ。……でも、美原さんらしいかも」

「キツイって？」

「いやいや、ホントに美味しいってところ」

「なに言ってるんですか。ふふ」

口の上手さは天然か、それともカメラ・ワークで鍛えたものか。
どちらにしても心地良い。

だから、感想もつい口をつく。無いことに。

「……楽しいね」

「そうだね。まるで……デートみたいだね」

「んふふ。だつたらいいね」

かわすでもなく誘うでもなく、自然とそう応えた。

言ってから、言いすぎかなと思ったり、でもそう思ったしと思ったり。

いくらか、時が流れる。

匠が同じ調子で、話を続けた。

「——パリだとカフェ・オ・レはそんな感じだよ。おっきいのに、たつぷりたつぷりで。サイズが三段階ぐらいあって」

「そうなんだ、こういうカフェでも？」

「うん。向こうの人、それとクロワッサンかバゲットだけで朝ご飯、って人が多
いから、たつぷり飲むのかもしれないね。冬、寒いしね」

「寒くても、外なんだ」

「景色がいいもの」

「いいなー、パリいきたーい」

「パリは、いい街だよ、ほんとに。いや、ヨーロッパはどこもそうかな。ロンドンも、ローマも、ベルリンも、アムスも、マドリッドも」

「いきたいよー」

投げ出した足をバタバタさせるはなこ。

二人で通りを眺める。まあ、この界限ではマシな風景だとは思うけど、でもやっぱり、どぎつい看板も電柱もポスターも目に入る。向こうに、雑多なビル群と。

「……『もうすこしががんばりましょう』」

「こればかりは、お店の責任じゃないしね」

「あはは……向こうでも、写真？」

「うん」

「いい写真撮れるでしょ」

「んー……それがね。なかなかしつくりこない、かな」

「ん？ どうして？」

「自分との距離が遠すぎるんじゃないかな。綺麗だと思っても、お客さんになっちゃってるから、ぜんぜん、それを切り取れない」

優しい目にスッ、と一条、光が射す。

「そういう写真もありなんじゃないの？ エトランゼの目」

「あるよ、ある。だけど、僕はそうじゃない、っただけ」

「自分で可能性狭めちゃダメじゃない。まだ若いのに」

「……」

こちらも向かず、応えず。

余計なこと言っちゃったかな。

つい、あんまり真面目に見えるから、茶々を入れたくなる。

「……ごめん」

「あ、いやっ」

また慌てて、手を振った。あれも癖らしい。そしてばりばりと、髪を掻く癖も。
「……美原さんと居ると、なんか、いろいろこう、がっしやがっしやされちゃうな」

両手で頭を掻きむしる真似をした。

「わたし」

自分に癖があるとするなら、これだ。

悪いクセ。でも、治らない。

「思ったことすぐ言っちゃうから。あまり、気にしないで。深く考えてないし、そもそも匠君のことをちゃんと考えて言ってるわけじゃないから、気に、しないで」

「うん。でも……正しいと思う」

「……」

それは、私の知るところじゃない。

「がんばんなきゃね」

言うや、『写りマス』をサツと構えて、奇襲。
ぱちり。

パニーニを嚙っていたはなこ、隙を突かれる。

「……んふ。こんなところダメ」

「普通の表情がいいよ」

「じゃ、こんな感じで」

ティーカップを取って、にこつ。

「嘘だー。難波さんが伝染ってる」

「失礼な」

と言いつつ、シャッターは切る。

「匠君も撮ったげる。ほら、ポーズポーズ」

奪って、構える。匠しようがなく、ボウル・カップを。

「……ダメ。バゲット」

「言うと思った」

齧りついた。苦勞してると、ぱちり。小さな音。

「……二人で撮ろうか。せっかくだし」

「じゃあ、美原さんも、それくわえて」

「カップにしない？」

「ここはこれかな、と」

「はいはい」

二人、食べてるふりして、顔を寄せる。匠が斜め上にぐつと手を伸ばして、パチ。

「もう一枚、思いつき笑顔で、嘘写真いつてみますか」

「おけー」

「……いい？」

「いつでもー」

また二人で頬寄せて、にたつ。

パチ。

やっぱり、笑顔を固めるのは、とても難しい。ナナは偉い。

「……上手く撮れてるかなー？」

「わからないね。ちよつと焦点距離厳しいかも……こういう時デジカメだと便利なんだけど」

「ほら、小さいのも一つ持たなきゃ」

「ほんとだ。考えるよ」

「ふふつ……ごめん。また、余計なこと」

「はは。いいよ。また、正しい」

少し呆れて、また、余計なこと。

「匠君……たまには、怒った方がいいよ。でないと私、つけあがる」

「いいよ、別に。生の方が、いいよ」

「生、ね……」

確かに私は、怒ってばかりだ。

なにに？　いろいろに。

自分、相手、社会、行く末。

いちいち突つかかるのは……匠君が、羨ましいのだろう。

まっすぐ、道を見つめて、てくてく歩いてる匠君が。

「……匠君が、羨ましいのよ。きつと」

「ん？　僕が？」

「やりたいことあつて、まっすぐ、走ってる。」

……私は、そうじゃないから」

「そうかなあ。美原さんは、走ってるよ」

ふふ……思わず笑う。確かに、走っては、いる。

「目をつぶってね」

「目標があればあったで」

今度は匠が、街の方を向いて、漏らす。

「自分の足の遅さに、泣きそうになるよ」

それは、本当の心。

はなこやつぱり、『あなたほどの』と言いかけて、さすがに、耐える。

それは、その人が感じることだ。

「僕は」

声の方向が変わったので、振り向いた。

匠君が、すごく真面目な顔で、こつちを見ていた。カメラを置き、被写体をな

ごませる笑顔を置き、何気ない表情。でもそこには、素の、人柄そのままの優しさが、じんわりとにじみ出ている。ママさんならずとも、気に入る人は、多いと思う。

「美原さんが、羨ましいよ」

「私が？」

まさか。その言葉も我慢して、聞いた。

「勉強がものすごくできて、真面目で先生からも一目置かれて、サッカー選手としても一流で、めちゃくちゃにお洒落で、で、その……すごっき、綺麗だし」

「……」

くすぐったい。

だから、黙っていた。

そう言えばそうだ。そうなる。それは誰ですか、と問いたくなるような完璧な人だ。

だけど、ここにいる私は、完璧なんて言葉からはほど遠い。全てに中途半端で、全てに足りない、そういう、人。

「……きつと美原さんはね、自分の基準が高すぎるんだと思う。だから、もつと完璧に、つて思っちゃうんだと思うけど……」

美原さんは、今のままでも、充分……その、か、完璧だよ」

「……」

肯定は嘘、だけど否定も嘘くさく。

ただ、私の気持ちを和らげようとしてくれていることには、感謝の気持ちが、湧いた。

「……ありがとう」

言うと、顔が熱くなった。

頬が痛くて、どうしたんだろ。

お皿に敷かれた紙ナプキンを、弄る。

なんだろこれ。

照れてるのかな。

らしくないな。

痛い頬を、眼鏡触るようにして、こすった。

「……匠君も、いいカメラマンだと思うよ。今でも、充分、プロで通用する」

「そんなことないよ！ 僕は、まだまだ」

「そうかな。私は、匠君の写真、好きよ。その人のそのままだ出て、躍動感が

あつて、ドラマティックで」

「うん……だけど、技術的には」

「そんなことどうでもいいって言ってたのは、匠君じゃない」

「……また。」

「バカ、なに怒ってるの。」

「うん……」

「それともなに、私の眼じや信用できない？」

なに言ってるの、そんなこと言わなくていい。

「ううん、そんなことないよ。言ってもらってることは嬉しいんだけど、やつぱり、自分の満足も」

「極端に言えば写真って、匠君の満足なんてどうでもいいんじゃないの？ 見てる人が喜べば」

そんなキツイ言い方しなくてもいいのに……

「……ん」

心苦しそうに、うなずけない、否定できない。

またこの人は、真面目に考える。

こんな馬鹿な無責任な言葉、軽く流せばいいのに。

流してくれないと……

「……ごめんなさい。

また、やつちやつた」

「ううん！」

絞り出すようにそう言うと、やつぱり、案の定、手を振った。

それさえが、私には厳しい。

そう思わされることがまた、厳しい。

「二理あるよ。なんだか、卑下して、『下手だ』って言い訳して、甘えてるような気がする。ごめん。もう言わない」

「だから謝らなくたっていいんだって！」

これ以上は、駄目だ。

席を立った。

バッグを掻き回して、お財布を出して、お札を取り出して、テーブルに叩きつけるように、置く。

「……練習、行ってくる」

目も見なかった。

踵を返して歩き出そうとする。

「あ……美原さん」

「なに」

「あの……」

「ごめん」

「謝らなくていい！」

耐えきれなくなつたものが全部出る。

声とか、怒りとか、もうひとつ怒りとか、それから……涙とか。

駆け出した。

“バカだ。”

わたし、本当に、どうしようもない、バカだ”

視界がにじんで、慣れた街も姿を変えた。

そのままにした。拭うことすら、許されていないような気がした。

「……」

後ろ姿の残像だけ追って、耳に残る声を繰り返す。

“……バカだ。”

どうしようもない、バカだ”

置いていったお札。食べ残したパニーニ。飲み残した紅茶。

“僕は”

好きな女の子に、優雅な一時さえ、提供できない。

好きな、女の子に。

好きな。

「……美原さん」

届かない呼びかけ、でも口に出して言えば、美しい、あの人の名。

テーブルのカメラを取った。小さく軽く、頼りない。

だけどここには、二人が居る。

こんな物でも、写真機だった。

自分が何かを、思い出させてくれる。

「ごめん」

怒られてもいい。

謝った。

そして立ち上がる。

僕のやることは、ひとつ。

寂しいテーブルの上を、撮る。

悲しいテーブルが、フィルムに写る。

胸のあたりが、シクシクと痛む。

その痛みごと、写し撮る、真実を。

振り返って担当のギャルソンを見れば、見て見ぬ同じ笑顔で来てくれる。うやうやしく二枚のお札を受け取って、下がる。いつの間にか満員のカフェで、忙しく立ち働く彼を呼んだことを、少し後悔する。変わらぬ笑顔に、少し、感謝する。
“……もうすこしががんばりましょう”

人のことを言う前に、自分で。

言葉よりも

『るー、るー』

『なに？』

『気合い入ってますなあ。おはな坊』

『すっごいね。ちよつと怖い。いつもだけど』

『なんやろ。ラヴ・ラヴ・パウワ？』

『そーんな感じでもなさそうだけどね』

ひそめる声の先には、話題の主がタオルで額の汗を拭う。

登場からして変だった。ミルクフランス（柔らかく細長いパンに安っぽいミルククリームを挟んだもの。八八円）を嚙り五〇〇mlの紙パック・カフェ・オ・レをラッパ飲みして、歩いてきた。

普段のお行儀の良さからは、信じられない事態である。

練習中も、激しい闘志に満ちた表情、それがいつにもまして、ピリピリと伝わってきた。ありすとかエレナとか、もうあからさまにビビっていた。もちろん、当人はどう見られているかなど気にする気配なし。

終わると、全員で「ほっ」と息をついた。

一人ニコニコ、は、上町コーチ。ちようどいい。

「……はな。相談が」

「はい」

タオルの手を止めて、ペットボトルを締めて、向き直る。真面目もここまで来ると、こちらに気を遣わせる。大地笑って、

「飲みながらでいいよ」

「大丈夫。もう。なに？」

「明日の相手だけど……データは、聞いた？」

「ん。またウチの苦手な堅守のチームね。向こうの山でもダークホースらしいけど」

「超古典的なマンツーマン・ディフェンスらしい。引いて守って、事故を狙う」

「事故？ 速いカウンターじゃなく？」

「ボール奪つても、攻めるのは二人か三人」

「トップは？ 一人で決められる選手？」

「いや。特にそうでもなさそう」

「……逆にタチが悪いわね。『自分達は弱い』と思ってるほど、隙がない」

「結果出してノってるしね。どうやってこじ開ける？」

「コーチなら？」

「……ふむ。いつもなら、訊きもせぬうちから滔々と自論が展開されるところだが……」

「……2トップ、可憐にマキを組み合わせてもいいかな、と」

「裏？ スペース無いわ、たぶん」

「マキの個人技で」

「それで掻き回すのは可憐とありすで充分じゃないかな。クーが居てくれた方が、こつちも事故を狙える。セツトは、ウチの重要な得点源だし」

「じゃ、いつもどおりダブルダイヤモンド？」

「ええ。ウチのベストはあれなんだから、特殊な相手でも無い限り、頭はそれでいいんじゃないかな」

「では、状況に応じた腹案がある？」

「ん……考える。一分ちようだい」

「はは、そんなに急がなくてもいいよ」

「この目で見てないデータからじゃ、考える余地もないわ」

ニコリ、ともせずニペットボトルのフタを開け、あおる。大地の持つてたごく大雑把なスパイ・メモ——古都と三十六が、明日の相手に敗れたチームに聞き取

りをしたものを眺める。三〇秒も要らなかった。

「……オーソドックス3―5―2はどう？ 中盤制圧力上げて、とにかくシュートに持ち込む。1点取ればこつちのものだから」

「布陣は？」

「3バックの、できれば真ん中に私を入れてフラット。高いラインで押し込む。ありすは屈強なマンマーカーに弱いので、これを落として、トップ下はナナ」

「右のアウトサイドは？ マキ？ ユミ姉？」

「明日葉をそのまま。やりたいでしょ？」

「む」

聞き易い案だった。これなら、中盤の厚みが増し、本職を一枚加えることで守備力も整備される。厳しいマンマーキングには、フィットネスの弱いありすよりも、百戦錬磨のナナの方が良い。さらに右アウトサイドで明日葉を走らせたい、という最近の大地の「欲」も取り入れている。

「……いいと思う。膠着したら、それをオプシオンで考えておこう」

「リスクを負わないなら」

付け加えた。これも珍しい。はなは、自信のある案ならそれ一択を迫ることが多い。

「同じ3バックで、サイドDFどちらかに姉さん入れて、もーさんが真ん中でDF指揮を執るのもあり。もちろん、サイドDFは私でもいいんだけど、そういう守備陣形敷いてるチームなら、攻めも組織より人じゃないかと。なら、姉さんの方が」

「ん」

それも合理的だった。全く異論はない。

しかし……はなが、自分の出ないフォーメーションを、アナザーチョイスとして提出するなんて。

明日はなんだ、斧でも降るのか。

「……ありがとう。とても参考になった」

「お礼なんか要らないわよ。仕事だもの。OK？」

「うん」

くるり。背を向けて更衣室へと歩き出す。その足取りは、頭脳同様、とても落ち着いている。

「……大吉大吉」

「ん？」

ナナと流乃、それに美緒。

「どやった。またおはなにキンキンキャンキャン言われた？」

「いや。今日は非常に冷静にいい案を建設的に」

「へえ。やつぱ気合い入ってんのかなあ」

「……」

気合い、つて感じじゃなかったけどな。

いつもあれぐらい冷静なら頼もしいんだけど。

でもちよつと、寂しい気もする。今はともかく、戦闘中はテンションが上がってる。選手交代やフォーメーション変更は博打だ。博打には、気迫と気合いが不可欠である。

はなに怒鳴り散らされる、それでも僕はこれで行く。

そのぐらいの手でなければ、打つ価値はない。

「あれやで、やつぱりほら、明日は初めて公式に駒川大先生がお写真をお撮りになるから。ほんで気合い入ってんねんって」

「はは……そうかもね」

「みんなも結構意識してるよね」

あの後、匠の写真はチーム全員が見て、大騒ぎになった。自分の写真を見て素直に喜ぶものもあれば、もつといい写真をと欲張るものもいて、やつぱり売り上

げ枚数なんかも、気になってみたり。

「悪い方に向かんかなあ」

イタリアのプロには、若い時から写真写りを気にして、「寝起きの練習は撮るな」なんて選手もいると聞く。そういう、浮ついた気持ちでは……

しかし全国大会に出れば、取材もくれば観客も増える。匠のカメラひとつにオタついてる場合ではない。そういう意味では、これもいい経験。

「あれも試練これも試練、か……いろんな試練があるもんだ」

コーチの思案げな顔を見てか、キャプテンが。

「だけど。」

目の前にボールとゴールがあれば、そんなこと気にする選手は一人もいないよ、ミラクルズには」

「そそ。そーゆーところはしっかりしてるよね、ウチは。むしろナナが一番危ない」

「なにをゆうとんねん。ウチはそういう視線のレイザービームをエネルギーに換える方やっちゅーねん。おはなちゃんみたいに、な」

ふと見ると、その話題の主が、もう着替えて帰り道すたすた。いつもならみんなでだべりに行くのに……

やっぱり、なにかあるんだろうか。

しかしそれにしても、先ほどの戦術論は見事だった。

「信頼が置ける」といえば、この人以上に信じられる人もない。信じたくなくて、信じる以外の選択肢が、ない。

“……頼むぜ、美原参謀”

多様性、バラエティこそが力を生む。このチームは、誰一人欠けても、成り立たない。

夕陽が落ちる。明日は本番。

「……すいません！ すいません、ママさん、こんなに遅くまで」

半日、真剣に、小さなカメラを構えた。

倍率の小さなファインダー、パン・フォーカスの手応えの無さ、絞りも画角もシャッタースピードも選べない。

だけど、だからこそ、なにをどう撮るか、それだけを考え続けた。

久しぶりだった。

時を忘れた。街の色が変わりフラッシュの光量が足りない、と本能が囁いて、初めて、気がついた。

「まあタクミ、また来てくれたの！」

「あの、荷物」

「アッ！ オホホホホホ、そうだったわね」

匠は手早く、カウンターの下に置かれた荷物一式と、そして……いざ手にすれば半日の別離がいかに寂しいものだったかを思い知る、愛機を抱えた。

「デートはどうだったの？ どう、お茶でも飲まない？ ゆっくりしていきなさいな」

「あの、そうしたいのは山々なんですけど、あの、現像出したくて、これの。こっちは自分でできるんですけど、こっちはやったことなくて」

手元の『写りマス』を見せた。フィルムは、これ用にチューニングされていると聞いたことがある。自信がない。

それに、とても、大切な写真。

「……六時までに出不ないと、月曜に間に合わないの。すみません」

一日でもいいや一時間でも早く、見たかった。そして、見てもらいたかった。

「まあ、残念。でもそれならしょうがないわね……フフフフフ」

「すみません、本当に」

別に何も悪いことなどしてないのに謝りたおす匠を見て、ママさんは大きな口に手をあてて笑った。そんな初な彼が、可愛くてしょうがない。

だけではない。改めて見れば、カメラを手に、カメラバックを提げた、これこそが、「タクミ君」だった。

これでこそこの子は映える。これでこそこの子は、輝く。

私も歳を取ったものね。こんなことも、一目、見抜けないなんて。

……ううん。

若い頃の私なら、そんなことも考えなかった。そう、タクミ君のように、服のことしか頭になかった、若い私なら。

どちらも、尊い。

ただ、今の彼が眩しいのは、事実。

「……タクミ君、これを」

眩しい姿を見てみると、ぴん、ときた。今にも飛び出しそうな若者に、ひとつだけ。

「……これは？」

「バンダナというものよ」

「それは知ってます」

「むこうを向いて」

ショッキング・ピンクと表現していいような、きついピンクに、白のストライプが幾重にも走る、派手なバンダナ。それをママさんはぎっくり巻いて、匠の額に締めてあげる。

まるでねじりハチマキ。

これって……お洒落なんだろうか？ バンダナだったら、髪を覆うようにするとか、首に軽く巻くとか……

「……どうかしら」

しかし、並んで姿見を覗くと、声が出そうになった。

そう、カメラとカメラバッグ、これだ。仕事道具を抱え仕事に向かう職人には、捻り鉢巻きがよく似合う。そして、

「ミラクルは、ピンクのチームだと聞いたから」

「……はい」

笑った。

この子はいい写真を撮るだろう。

いい笑顔ができれば、つられて誰もが、笑うはず。

「いただいてもよろしいでしょうか！」

そしておとなしいようで、なかなか洒落っ気もある。

「タダとはいかないわね。」

「……写真を、もう一枚」

人の心を、軽やかにする。

「はい！　どんな写真がよろしいですか」

頬に手を当て、考える。

それは芝居で、決まってる。

「……おはなちゃんと、二人で笑っている写真ね」

「……はい！！」

身体を直角に曲げるようにして深々と礼をすると、風のように駆け出していった。

私にも、あんな頃があつた。

いや、今でも……あの子達と同じ街に、同じ時間に、生きている。

「……ミラクルズは、いいチームね」

花の色、果実の色、恋に染まる、頬の色。

今日の夕陽は、ピンクに見える。

ざ・ざ——っ……

溢れる熱い湯に唇まで浸かる。軋む身体が、徐々に徐々に、ほぐれていく。それと一緒に、鎧が、仮面が、違う自分が、剥がれ落ちていく。

何百回めかの同じ言葉が、出た。

“バカ……”

考えないようにした。

無駄だった。

身体を動かして、サッカーに集中した。

休むと何一つ、心の中は変わっていないかった。

心底、自分が、情けない。

匠君は何一つ悪くない。

それでも、私の気分を害したと思えば、謝ってくれる。

気弱と言えば言える。でも、悪いことじゃない。優しさって言ってもいい。

その優しさに私は……

“最低……”

牙で報いた。

わかつているのに止めようともせず、まるで自分の力を誇示するかのよう
に、まるでどこまで突き刺さるかを試すかのように、サディスティックに、爪を立て
牙を剥いた。

“……あーもーどーしてあんなことしたんだろおお……”

泣きたい。

それが許されるなら、声を上げて泣きたい。

途中まであんなに楽しかったのに。

ママさんもあんなに喜んで、話題も尽きなくて、もつと話すことはいっぱいあったのに、もつと……

“……駄目だ”

ぐちゃぐちゃ考えてても始まらない。

謝ろう。

そう思った。電話を何度も何度も、手に取った。でも。

間違いなく匠君は、開口一番、こう言う。

『ごめん』

その言葉を聞いて、昼間のように、心乱さない自信は、なかった。

謝られれば謝られるほど、自分の駄目さが浮き彫りになる。

バカで、キツくて、人の気持ちを考えずに、正しいことを押しつける。

昔から知ってる、嫌な自分が。

「……どうして謝るのよ……」

湯の中で泡を立てながら、なじつてみた。
悪いのは匠君、あなた。もう謝らないで。
謝らないでといったら、謝らないで。

「……つんてわがまま……」

わたし、やつぱり……」

『美原さんといると、がしやがしやされる』

匠君はそう言った。

とんでもない。

ガシャガシャにされているのは、私の方。

苦しいほど謝りたいのに、言葉が出ない。

飛んでいって謝りたいのに、こうしてただ、ジツとしている。

どうしてこんなに、辛いんだろう。

嫉妬だろうか。

あんな素敵な眼、ファインダー越しに何かを見つめる真摯な目、あんな瞳は、私にはない。

だからか。羨ましいから、ああやって突っかかるのか。

熱いお湯を見つめても見つめても、答えなんか、でるはずもなかった。

「……あしただ」

とにかく明日。明日、がんばる。

堅守の相手、出番は無いかも知れない。だけど、ベンチでも目一杯がんばって、それから、目一杯、謝ろう。そうしろというのなら、土下座でもなんでもする。

笑われたって構わない。何を言われたって、構わない。匠君のこころを傷つけた

のだから、埋め合わせは、きつとする。

彼は、誰よりも仕事熱心な彼は、カメラを構えるとうとうしようにもなく熱い彼は、きつと試合に来てくれるだろう。そして試合時間中、転げ回るように写真を撮ってくれるのだろう。

ベンチにいても、その彼に、撮ってもらえるぐらい、がんばる。

それだけが、今私にできること。

それが、私のやるべきこと。

“……よし”

ザバザバザバツ!!

「いくぞ!」

乱暴に顔を擦って、立ち上がった。浴室を出る。バスタオルを被ると、洗面台の自分と、眼があった。

キツい眼。怖い眼。鋭い眼。

人を人とも思っていない、「正しさ」という刃を抜き身で持つてる、光りすぎる、眼。

でも、嫌いじゃない。

だって私はこうだもの。昔から、こうだもの。

“……匠君。センス悪いよ。これのどこが「綺麗」なの”

と、また、匠のことを、考えた。

“……バカ”

だけでも、今度は、自分を嗤えた。

「綺麗」だなんてそんなに簡単に言うのなら。

見せつけてやろうじゃない。嫌つていうほど。

目を閉じて、髪を拭いた。

とにかく熱い。肌も、
ハートも。

堅守

ウウウウウウウウウウ……ドンドン！

ミラックルズ!!

ドンドン！

ミラックルズ!!

いつもなら一瞥もせぬ観客席を、はなこは振り返った。千、という大きな数字を超えるサポーターが、スタジアムをチームカラー、ピンク一色に染め上げる。

丸珠公園第二球技場。クイーンズカップ・地方予選第四戦。

“これが、奇跡”

たかが街のクラブ・チームを、なぜここまで熱心に応援してくれるのだろう。

休みを潰し、スタジアムに足を運び、気持ちと絶叫を、消費する。私達に、それほど価値があるというのか。

“ちがう”

そんなことを考えること自体が、間違っている。

応援したいかしたくないか、そんなことは、ここに来てくれるみんなが考えることだ。私達は……

“……限界まで、戦うだけ”

それが、彼らに報いる、唯一の方法。

——ピッチに目を戻した。すると。

「おはなちゃ~~~~ん!!」

甲高い絶叫に、思わず振り向いた。最前列、中学生ぐらいだろうか、いくつか年下の女の子が、ピンクのマフラーを振り回して、叫んでいる。緊張感のない愛称の絶叫に、周辺に笑いが起きている。

はなこもニヤリ、と笑って、親指を立てて、応えた。

ワ——ッ……

サッカー・サポーターは、時に本人よりも、選手の調子を見抜くことがある。彼らはそれが、普段の美原参謀にはありえない不敵な姿だと、よく知るのだ。

“おいおい、今日のはなちゃんは一と味違うぜ！”

試合が、始まる。

年に一度の女子サッカークラブチーム・日本一決定戦クイーンズカップ。ミラクルズは前年、地方予選を勝ち抜いて全国に出た。今年は、大穴馬券として優勝すら伺う。

司令塔・難波鳴海、エース・此花可憐、キャプテン・長居美緒はユース女子日本代表。それを個性派アスリートスガツチリ支える。出身校では伝説化してる短距離ランナー・和泉流乃、元中学日本一バスケット・センター森之宮胡桃、ジュニ

ア世代では世界戦を戦ったフィギュアスケーター平野エレナ、幼少から古武術研究家の父に鍛え抜かれたG K・守口忍。ここに天満蘭の破壊力、天王寺ありすのファンタジー、梅田もものタフネス、そして西九条明日葉の絶対守備力を加えたもの……これが本日の先発、ミラクルズの基本、ダブルダイヤモンド4―4―2である。

注目も、高まっている。

可憐が光のシュートで相手G Kを病院送りにすれば、守護神・忍は自ら八〇mを独走、ドリブル・シュートを決めてしまう。

なにより指揮官・上町大地の超攻撃的サッカーだ。負けていようと勝っていようと、リスクを怖れず前へ前へと突き進むその姿は、観る者に勇気と力を与え、ただ、酔わせた。

こんな面白いチームを観に行かない手はない。

勝ち上がるにつれネズミ算式に増えていくサポーターに、空堀三十六、プロデ

ユーザーは、恐れさえ感じていた。スタンドを見上げて、ぱちり。首からつり下げた小さなデジカメに、その盛り上がり記録する。

“もう、俺には何もすることがない”

何も言わなくとも始まる大応援に、少し寂しさすら感じたが、すぐ自分を戒めた。まだひとつ、やらねばならぬことがある。

“……あとは、勝ち上がるだけだ”

向こうサイドを、フアインダー越しに睨んだ。

堅守の相手を、ミラクルズは苦手にしている。何度も何度も、苦戦をした。今日の相手も、アップを見ればハツラツとしている。いい動きだ。

簡単な試合には、ならない。

そう思つてカメラを下ろすと、視線に気づいた。

黒い物体と、目が合う。

「……匠。俺なんか撮つてる場合やないやろ」

「試合が始まったら、撮ってる場合じゃなくなるから」

ニコリともせずに言う。

“おや”

見たこともないほど鋭い眼光、気合いが、入っている。

その証拠に、出で立ちから違う。いつものカメラ・ベストの下には、匠らしくもない派手なピンクのシャツ。そして額には、ピンクのバンダナ。

ピンクは、俺達の色だ。

サポーターのなんたるかが、よくわかっている。それに、抜群に似合っている。

コイツ、こんなにセンス良かったつけ。

心が軽くなって、口も軽くなる。

「でや！ 今日の雰囲気は！ いけそうかな！」

「何言ってるんだよ」

またらしくもなく、怒ったように問い返される。

「あんな相手に、僕らのミラクルズが負けるはずないじゃないか」

「それはカメラマンとしての勘か？ サポーターとしての願いか？」

「両方だよ」

匠には珍しい、ものすごいぶつきら調子に面食らう。本人もあまりに愛想が無いと思つたか、付け加えた。

「あんなチーム、絵にならない」

そういう直感ほど、アテになるものはない。

「邪魔したみたいやな、悪い。思いつきり、撮りまくってくれ！ 頼むで！」

「まかせてくれ」

力強く、言い切った。

らしくもねえ。

駆け出す親友を、茶々で送り出す。

「はなちゃんばかり撮つとつたらアカンで！」

「気をつけるよ！」

ニコリともせず、怒鳴り返された。

“……ゆーねー……”

——選手入場が始まった。

ピンクのユニフォームが、緑に映える。

花のように、絵になるチームだ。

親友は、いいことを言う。

“……負けてられませんな。よし！”

三十六も、首のデジカメや携帯を振り乱しながら、駆け出した。

——案ずるより産むが易し。

カギになると思われ、喉から手が出るほど欲しかった先制点は、意外にも簡単に手に入る。

敵守備陣の脚がこなれぬ間に、全開運転で仕掛けたミラクルズ、開始七分。ゴール前右四五度二五m、ナナが誘ったファウルからFKを取る。これをナナ&ありす二枚金看板、ナナを囷にありすの変態右脚炸裂、どうしても理解できない角度で落ちるボールがゴール・イン。1点。

「…………ふう」

歓喜の絶叫が木霊するスタジアムで、指揮官は思わず一息ついた。マネージャーも、破顔で応える。

「やりましたね！」

堅守速攻型のチームが得意とする、「カウンター」という戦術は、相手に攻めさせ、そこに出来た隙を、一瞬で突いて得点を奪うものである。前掛かりに攻めてこない敵、つまりリードして余裕のある敵には、効果的ではない。

1点リードしたミラクルズ、あとは自分達の戦い方を、じっくりやればいい。この早い時間帯に先手を打てたのは、大きい。

古都、嬉しくなつてベンチを見渡す。どの顔にも安堵と、これで行けるという充実の表情……では、なかった。一人、睨みつけるように敵陣を観察し続ける、美原参謀。

“はなこ先輩らしいな”

絶対出ない単語でも公式でも覚えてしまう、そんな執念。古都も見習わなければ、と思ひ直して、顔を引き締め、敵選手達を見た。

……なるほど、強敵かも知れない。

攻撃大得意のミラクルズ、一試合平均得点6点に近い我々に1点リードを許しておきながら、なお、彼女達はとも冷静に、今の守備の反省や確認を、身振り手振り熱心に行っている。誰一人うなだれたり、うろたえたりしていない。

強いハートが、備わっている。

それを感じたのだろうか、コーチもすでに厳しい表情に戻っていた。

——しかし、一旦攻勢に出たミラクルズは、手がつけられない。得点を決めて波に乗るありすを切っ先にして、敵陣を切り裂く。敵DFはありすにべったりとマーカ―を張りつけて、彼女を潰すのが精一杯。しかし、そうなればそこに……

「……スペースができませんね」

「データ以上だ。なんてしつこいマン・マーキングだ」

人を追いかける古典的マン・マーキングの弱点は、追いかけて空いてしまった穴を、敵に使われるところにある。しかし彼女達は、「空いた穴を塞ぐ」ことを

何よりも最優先し、時にはFWまでもが最終ラインに駆け戻って守備をする。
だから攻めは遅く迫力は無い。が、こちらの攻めも、タイトに無効化されている。

「……でも、これを九〇分やつても、勝てません」

「セットがある。ウチの１点も、それで入った」

考えてみれば、ミラクルズの１点も、流れで崩したのではなく、個人技でもぎ取ったものだ。つまり、五分の戦いが続いているのである。彼女達はそれを知っている。だからあんなに冷静で、自信に満ち、力強く自分達のプレーを続けるのだ。

“……強いな。本物だ”

大地、普段には無いことに、敵のベンチを見てしまう。いや、見させられたのか。その強いチームに興味があつたからか。何か感じるものがあつたからか。

たたずまいがあつた。静かな自信と、秘めた情熱。

敵将。

銀髪、刻まれた皺。随分なお歳に見えるのに、存在感は、大きい。伸びる背筋に、視点は遠い。

“……名のある方か”

で、あつたらどうかというんだ。

戦うのは、選手だ。選手ならこつちが、何段も上だ。

だからこそ、負けは許されない。

大地、キリキリと痛む内臓と頭脳に、発破を掛けた。もちろん、顔には出さない。能面を、作った。

“……へたくそ”

しかしベンチで、側で長らく彼を見ていた二つの眼には、そんな一夜芝居は通用しない。参謀は、指揮官の苦悩を知る。

“……コーチは、考えすぎる”

まともにやれば、一〇回やつて一〇回勝てる相手だ。現にリードもしている。多少向こうの士気が高いからと、怖れることは何もない。

しかし、だからこそ頼もしい。リーダーは、一番のオプティミストでかつ、一番のペシミストであるべきだ。上町大地は、それを兼ね備えている。先天的に持つ巨大な樂觀性は、チームがどんな厳しい状況でも希望を失わない、明るい光になつていた。そこに、考え得る可能性を考え尽くす理性が加われば……

生まれつきの、将である。

そして、生まれついて何かである人は、もう一人。

はなこは、その姿をスタジアムで認めた瞬間、息が止まりそうになった。

ピンクのシャツは、昨日のもの。そして額に、ピンクのバンダナ。それだけでもう、なにかが通じた。

許されてるように、感じた。

バンダナの下には、あの明るく強い目が光る。

今そこにいたと思えば、もういない。試合前から、コマネズミのように、サポーターをスタジアムを撮り、撮影ポイントを確認に走る。こんな、素人試合にも関わらず。

彼の目には、生まれつきの写真家の目には、効率とか、成果とか、そんなものは写ってないのだ。ただ、そこに、写したいものがあるだけ。写したい、人がいるだけ。

かつこいい。

素直にそう思った。

自分も、ああなる。

そう誓った。

その機会を、虎視眈々、うかがっていた。

——知らず後半も三〇分を過ぎる。時の流れが速い、それは拮抗した好ゲームの証拠。相変わらず、1―0。一進一退。

あと一五分。

今まで巧くいっている。あと一五分このままで勝てる。だが、敵選手のパフォーマンスは変わらず高く、こちらは飛ばした前半ほどの迫力はない。が、FWを代えて崩せるとは思えない。MFを代えてバランスを崩したくない。動きたい。動けない。

まさに敵陣の、威力変わらぬ鋭いカウンター攻撃。ありすからボールを奪うや、小気味よいリズムで繋いで運んで、瞬く間にゴール前。忍が弾いて、ももが大きくクリアして、事なきを得る。逆にいえば、もし忍で無ければ危ないシュート、ももを持ってしても慌てるシュート。

「……コーチ」

はなこが声を掛けると、待つてましたと言わんばかりに大地が振り向いた。質問は、ひとつ。

「守る？ 攻める？」

「攻める。我々に、守つて勝つメンタリテイはない」

「ならば、昨日の私の提案を」

はなこを守備真ん中に入れたオーソドックス3―5―2だ。確かに、守備力を減じず、目先を変えられるかもしれない。

「それとも、ありすと心中？」

一発のあるありすにしがみつきがちなのは、大地の悪いクセだった。本人もよくわかつている。だが他人に突かれると、痛い。

「……そこまで言うなら、行つてもらおうじゃないか」

煽るような言葉に、思わず意地になった。

はなこには、男をそうさせる何かがある。

いいとか悪いとかではなくて、それが、美原はなこである。

凄みのある大地の声にも、平然と眼鏡を置き、ヘアバンドを締める。身体は熱い。心も熱い。

「はな！ 3バック中央DFコントロール！

ラインを押し上げ、攻めて攻めて攻めまくれ！」

「御心のままに」

フツ……

笑みが零れた。

いつもとはまるで逆、吼える上町に、静かな私。

それが、おかしくて。

タツチラインに歩み寄る。いつもより静かに、だがいつもより、力強く。

視線を上げると、目に入る、バンダナの彼。レンズ越しに、感じる視線。動く試合を撮っているのか。

それとも、私でも。

“愚問ね”

両方に決まっている。

匠君は、そういう、人。

“……やるか”

むしろ動く試合の中心に、私がいればいい。

腰に手をあて、決意を胸に、審判の許可を待つ。

「……交替はありますね」

「うむ」

「……コーチ。本当にはなご先輩でいいんですか。なんだか意地になつてらつし

やいましたよ」

「意地にさせたなら、はなの勝ちだよ。出るべきプレイヤーさ」

「……はい」

なんとなく釈然としないけれど、コーチの横顔には納得があつた。それに、昨日今日チームで一番迫力のあるプレイヤーは、はなこ先輩以外にない。

「……でも、はな入れて3バックって言くと、フィールドの選手には守備固めっぽく聞こえないかしら。5バックみたいになつてしまわない？ はなは『攻める』って言つてたけど」

「あつ」

ユミの疑問に、古都、思わず声を出す。コーチを見ると、顔を歪めている。

「コーチ！」

「……謀られた……」

だがその唇の端が、吊り上がる。見る間に、笑いになった。

「……今ならまだ間に合いますよ？」

「男に二言はないさ」

こちらを向くと、眼も笑っていた。コーチはやっぱり、笑顔がいい。それに……
……コーチが笑ってる時の方が、このチームは、強い。

「我ががブレーン、美原はなこのお手並み拝見、といこうか」

「はいっ！」

「？」

話の流れがわからないユミが、疑問符を頭の上に浮かべている。大地がそれを
吹き飛ばすように、叫んだ。

「ユミ姉！ マキ！ 愛！ 千里！」

「「はいっ！！」」

「アップ開始！ 早めに仕上げろ、何が起こるかわからんぞ！」

「は、はい！？」

疑問符は四つになる。が、急げと言われれば事実時間がない。大慌てでベンチを飛び出していく四人。

「ふふふ……」

コーチも、人が悪いんだから。「何が」って言っても、悪いことばかりじゃないのに。

古都は胸のワクワクを隠さずに、笑っていた。

そう、今日の試合に足りなかったのは、この胸躍る気持ち。

サッカーは所詮、球遊びである。

遊びならば、楽しんでいるものの方が、上手くやる。

ブラジル式4バック

4-4-2



3-5-2



両サイドバックがガンガン上がる。そのスペースをセンターバックがカバー、開いた真ん中をボランチが下がって対応する。
チャレンジの例は多いが、成功例は極めて少ない。
人材面もだが複雑な運動を強いるため破綻すると隙が大きく、これはあくまでブラジルの攻撃力(特に両SB)を前提としたフォーメーションである。現に2002年W杯ではセレソンも3-5-2に決め打ってきた。

ミラクルズ・フォーメーション（クイーンズカップ・地方予選第4戦）

4-4-2 Double Diamond



Reserve
GK20千里 DF2はなこ MF16由美子 MF19マキ FW11愛

註:MF/DFの上につく白い△は攻撃参加の頻繁な選手。

4-4-2 Fiore Fiore



Reserve
GK20千里 MF16由美子 MF19マキ

OUT
MF21ありす FW14胡桃

フィオーレ・ミッシーレ

「……はな！ 3!？」

「いえ、4バックのまま！」

キャプテンの眼が光った。それだけで伝わる。さすがだ。この人は、やっぱり、
凄い。

「……ぶつつけ本番なんて、コーチも酷いね」

「発案は私」

「おー……大胆だね」

「いけるところまでいきたいのだけれど」

眼と眼が合った。

明るいはなの眼は、誰かの眼に似ている。誰の眼だろう。

「……フォローします。駄目なら私が入ります。思いつきり」

こくりと無言、だが力強くうなずくはなこ。

美緒、作戦企図を意識して怒鳴る。むろん、相手に聞かせて混乱を招く意図もある。

「2バック1ボランチ！ 両サイドバック、ウイングバックのつもりで縦に攻めまくれ！」

はなこが入った、守備固めだ、とばかり思っていた選手は、驚きの表情が隠せない。しかし、

「トップ下ナナ、エレは現状維持！ 私が右サイドハーフ入ります、はっば、オフェンスよろしく！」

「はいっ！」

攻撃は、どの選手も好きである。堅実な敵サイド攻撃に苦慮していた明日葉でさえ、元氣よく応える。

疲れた身体に、「攻める」意図がカンフルになった。

ナナが懐かしのトップ下に駆けながら振り向く。唇だけを動かして、問う。

「ぶ・ら・じ・る・し・き？」

美緒がうなずく。ナナ、呆れた表情で肩をすくめた。が、次の瞬間ニヤリ笑って、もう一度唇を動かした。

「お・も・ろ・い」

それもまた、モチベーションを高める極めて有効な薬だった。

ぶつつけ本番はリスクーだが、そこは、気持ちでカヴァーするしかない。位置についた。最後尾から、華々しい柏手が響く。

パアアンツ！

はなこのそれは、集中を要求する、いつもの仕草。だがいつもよりはるかに激しく、叫ぶ。

「行くぞおお!!」

「オオオオッ!!」

蘭が全身で吼えるように応を返した。気迫が、うねりを上げて瞬く間にチームに伝播する。

“——キャプテンマーク、渡した方がよかつたかな?”

美緒ももちろん、沸き立つ心で笛を待った。

——サポーターは、顔色を失った。

はなこが入ったことでDFラインの連携が明らかに悪くなった。流乃と明日葉が無理に位置取りを上げようとするのが見え見えで、後ろに空いたスペースを使われた。両サイドが慌てて守備に走る機会が増える。

この時間からこんな無理をする必要があるのか。そもそも、この時間に「攻撃的なDF」であるはなこを入れるのは矛盾ではないのか。守るなら守る、攻めるなら攻める、中途半端なプレーが、一番怖い。

そしてこれを活かさぬ敵将ではない。切り札を、切った。

右サイドで献身的に走り回っていたMFに替えて、小柄な、いかにも機敏そうな選手を投入する。

ファーストタッチ、敵陣がいきなり彼女を走らせる。流乃の後ろを目ざとく突いた。すかさず右サイドバックが、この試合初めてのオーヴァラップ。流乃、ほんの一瞬、そちらのカヴァーに気を取られた。ほんのわずか、スペースと時間を、ボールを持った選手に与えてしまった。

やはり、テクニシャン。ここ一番の切り札だった。

ズバッ——

あ、と声が出るほど良いボールが、美しいカーブを描いてゴール前に降る。

もも、蘭、間にはなこを挟んだが故に、位置取りが変わり目測を誤る。FWが跳んだ。押さえきれない。ぽーんと大きく、ファースイドへ振った。逆から軀ごと投げ出すようにして、長駆進出してきた左MFが、飛び込んだ。

ズバンッ！

ゴール左サイドネット対角撃ちへディングシュート。教科書そのものの一撃、忍の左手を持つてしても、わずかに届かない。

わあああああああああ……

悲鳴が上がった。少し遅れて、歓声らしきものが小さく上がった。

銀髪の敵将が初めて感情を露わにした。拳を強く握りしめ、スーツの裾がはためくほど、振り抜いた。

敵ながら、絵になる姿。歴戦の名将、風格である。

「アアアアモオオオオオ!!」

つんぎくような絶叫を上げて、マキがいつものようにオーヴァーに地を転がった。あとわずか一〇分もない。こんな戦況で守りの選手を入れて失敗する、その

未熟さが青さが、マリーシアの国ブラジル生まれのマキには、信じられない。

古都はしかし、自分の心が意外に平静なのを不思議に思った。まだ同点。それもある。しかしそれ以上に……

ピッチ上では敵将が激しいゼスチャー、怒鳴り散らすように指示を出している。ここが勝負所だと、よく知るのだ。

対するミラクルズは、はながその中心。しかし冷静沈着、ぶち抜かれた流
乃も、ポストを許したももも蘭も、シューターを絞り切れなかった明日葉も、強
い表情でうなずき、言葉を返す。

つまり。

「……これで形勢逆転、ですか」

「さすがこつとん、そのとおり」

答え合わせのようにして見ればコーチは、口元に不敵な笑みさえ浮かべていた。
彼女達は、火を点けてくれた。

ミラクルズ、ようやく、追われる立場から、追う立場へ。守る立場から、攻める立場へ。

尊敬するコーチが、ため息混じりに軽口を叩いた。

「つたく、ここまで追い込まれなきや火が点かないのは、なんとかならないものかな。これさえ治りや、もつともつと強いのに」

「でもコーチ」

ポジションはそのままだった。はなこが変わらずCB前に陣取り、両サイドバックは高く構える。このままでやれる。いや、やる。自信ではない。決意の表れ。「これだから、ウチは強いんですよ」

試合が再開された。

ミラクルズの選手達は、さつきまでとは別人だった。目を覚ました雌獅子達が、白く丸い小兔を追う。いきなり切り替わったギアに、敵陣がとまどいを隠せない。

溜めた鬱積を一気に爆発させる。

それがミラクルズの強さの秘訣。さつきまで惰眠を貪っていたはずの雌獅子が、咆吼を上げ牙を剥き爪を振り下ろす、そのあまりのギャップに、気持ちの、技術の、ズレが生じる。

そこを、突く。

「があああああ！」

得意のドリブルで、ナナが正面突破を図る。が、ペナルティエリア寸前、ファウルすれすれのタックルでボールを失う。敵DF、FWに直接、くさびのボールを入れた。キープ、左右の上がり待っ……その瞬間。

スパンツ！

小気味良い音が聞こえてくるような、切れ味鋭いスライディング・タックルがその足元を見舞った。たまらず転げてボールを失う。瞬速弾けるように立ち上がったDFは……美原はなこ。

見事なまでのお返しタツクル、位置はセンターサークル付近。CB真ん中ならこんなところからスライディングなどできようもないが、ボランチなら、できる。そして右半身、駆け上がる明日葉を見た。

いざ駆け出せば明日葉の脚も尋常ではない。見る間に、右サイド敵陣奥、フリースペースを切り裂く。スタジアムの誰もが、そちらへロング・フィードだ、そう思った。その瞬間。

「あああつ!!」

身体中の酸素を全て吐き出すかのような、絶叫とも悶えとも取れぬ奇妙な呼吸を上げ、はなこが奇怪に身体をヒネった。ネジる。回す。身体中の骨を軋ませながら、筋原繊維をブチ切りながら、右脚を、信じられない方向へ振り抜いた。足首など、まるで骨折したかのように、変な方向へ折れている。

なんだあれは!?

問いの答えはボールの行方。

ありえない体勢からありえない角度ありえないスピードで、「左」サイドにパスが出た。

幻の右を見せて、放たれる必殺の左ストレート。

スタジアム中の対応が遅れる。いかに集中しようとも、たった一拍なりとも隙ができる。

その隙を突くには、「出る」と信じ切って先読みで走るしかない。そう、和泉流乃のように。

やられる。

そう思った。

やる。

そう思った。

ぽん、とワントラップ、完全どフリー。もうこうなったら遠慮も会釈も必要ない。魂込めて撃ち上げる、火を噴くがごときバーニング・クロス。

受け取るは胡桃。ハラワタ煮えくり返っている、胡桃。二人三人囲まれ潰され続けた、胡桃。

飛んだ。誰よりも高く遠く速く強く。

だがそこは胡桃。どんなに怒りに震えても、「敵を倒す」という目的を忘れない、「くー」ルガル。

角度の無い自分よりも、愚直なマーカーが貼りつく可憐よりも、可能性のある空間へ、ヘディング・パス。

そのスペースには。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお」

絶叫と、まるで地響き聞こえる猛突進。難波鳴海。

ナイスパス、拾うまでもない。身体投げだし右脚を天空高く突き上げ、鉈のようには振り下ろした。オーヴァーヘッド・ジャンピン・ヴォレー。

ドガアアアンツ!!

爆発音が鳴って、ゴールネット上面が、噴水のように噴き上がった。敵GKには、一体何が起こったのか、見えてさえないなかった。恐怖に目をつぶる時間さえ、与えてもらえなかった。

「うおおおおおおおつしやああああああああああ!!!」

右拳巻いて突き上げて、勝利の雄叫びを挙げる。駆け寄る流乃、美緒、蘭。

「OKナナ、ナイス・ゴールッ!!」「ナナ! ナイツシュー!」「ナイスガッ

ッ ナナア!!」

「つたりまえやあ!! 見たかボケエエエ!! ああああほおおおおんんだあ

ああああああああああああああああ!!!」

絶叫ごときでは、溜めた気持ちは晴らせない。あれほどのスーパーゴールを

決めてなおナナには笑顔なし。可憐、胡桃、流乃、みんな同じ。そう、もう1点、もう2点、もう3点、得点でしか晴らせない。厳しい表情で、終盤でリードを得

たにも関わらず、飛ぶようにポジションに帰る選手達。

美緒、キャプテン、そんなみんなを頼もしく思いながら、基点となった殊勲の選手に目をやった。

“……おや？”

彼女はあらぬ方向を見ている。敵ゴールでもなく、ベンチでもなく、その逆サイドの……

“……ふふっ”

黒い機械越しに、二人は見つめ合っていた。何を語り合っていたのかまではわからないが、見つめ合っていたという事実だけで、充分だろう。

“じゃわたしも”

真似をしてみようと視線を走らせると、その人もあらぬ方向を見ている。辿ってみれば、一人の選手に行き当たる。

“うひゃー……両手に花ですかー。いや、はなが両手？ はなに両手？”

キックオフの笛が鳴る。美緒、顔を引き締めなおして、肩をすくめた。
「やっぱり、今日のキャプテンはおはなちやんでしたね。」

「……とほほのほ」

「……い、今のパス、ものすごかったですね、はなこ先輩」

「あんなに身体って捻れるものなのかな、身体、壊してないかな、はな」

「アタシ、負けたヨー!」

トリック・プレーなら任せとけ、のマキがベンチで地団駄を踏む。ユミの心配をよそに、はなこは得点前にも増して凛々しくキレよく走り回る。あそこは本来パーフェクトボランチ・美緒の位置だが、決してひけを取っていない。その危うげにも華麗な姿に、さっきのプレーも込み、ありすが詩的な表現をした。

「まるで舞い散る薔薇の花みたいでした!」

「それだ! あの花、『ラ・ヴィ・アン・ローズ』と名付けましょう、コー

チ！」

気が早い千里がそんな提案を叫んだ。大地、笑いながらもたしなめる。

「勝ってからだよ、必殺技の名前を考えるのは」

「はい」

「ちーちゃん、それってどういう意味？ よく聞く言葉だけど」

「知らん！」

「だあ」

「「わはははは……」」

ベンチには、すっかり笑顔が戻っていた。

“……『バラ色の人生』か、はなにぴったりだな”

しかしなお、はなこはその上に行く。

——ミラクルズ・アレンジ「ブラジル式4バック」は、機能し出すと止まらな

かった。

自身のランが隙を作った、それを目の当たりにした明日葉が、まるで新しいオモチャを与えられた子供のよう、走って走って走りまくった。左にはもちろん、怖い怖い流乃がいる。ベツタリと引かざるを得ない敵陣。押し込めば中央では、ナナが暴れ、エレーナがミドルを放ち、美緒が神出鬼没の動きで敵を翻弄した。そして彼女達の美しい攻撃を盛り立て引き立てるのが、はなこの正確なロング・フィード。

そう、皆は忘れていた。このキー・ポジションに収まるべき、守備力が高く、長いパスが蹴れ、視野が広く戦術眼があり、なにより度胸溢れる選手の存在を。あれほど堅守を誇った敵陣が、ボロ雑巾のようにズタズタに引き裂かれる。得点は時間の問題、しかし大地はなおカードを切る。昼み掛ける際の戦力の一気投入は、彼の十八番。

残り三分。森之宮胡桃に代えて堺愛。

「――胡桃の代わりだが、できるだけ大きく動いてマーカーを引つ張り出せ。特に右に開いて、MFが突っ込めるスペースを作ろう」

こくり。深くうなづく愛。

大地、FWの気持ちをくすぐることも忘れない。

「もちろん、チャンスポールが来れば……華麗に決めろ」
にこつ。

白薔薇のような笑顔残して、ピッチサイドに立つ。第四審が、交替の札を出した。それで、ピッチにも意図が伝わった。

ワアアアアアアアアア……

交替の意図を誰より知るのは、サポーターかもしれない。物語最終盤、しかしまだ攻める、まだ攻める。まるで時代劇のように、立ち上がった主人公が、斬って斬って斬りまくる。

この瞬間を待ちに待ってた声援が、激しく高く大きくなって、止まらない。紙

吹雪が舞い、手拍子足拍子が舞い、そして歌が舞う。

それでも健気に守備からの一本を狙い続ける敵陣だが、愛の投入は外で見るより選手には応えた。フレッシュで強引、最前線から狂ったようにボールを追いついては、組み立てもなにもあったものではない。必然、クリアじみた長い蹴り出しになる。

大地の策は、当たった。

そこに網。蜘蛛の網。

軽やかに跳ぶ天満蘭。

今日はべらぼうに暇だ。敵は守備ばかりで、攻めてこない。何もやることが無くて、体力があり余っていた。1トップで走り回り、もう朦朧としている敵FWでは、相手にもならない。身体半分勝って、斜め前にいる明るい髪、背番号2に、ヘッドで、パス。

はなこ受け取ると、まず司令塔を見た。

フツ……

相手DFのボールウォッチのわずかな隙を突いて、ナナが消える。その目の前の小さな小さなスペースに、素早く出した。

一〇分前なら無理矢理にでもクリアしただろうDF、しかし、ギアの変わったミラクルズ・アタックに曝されてもう一步、脚が届かない。

ナナ、受け取ったそれを、しかしいつものようにウチがウチがで持ち込もうとはしない。マーカもついてる、スペースもない。今日はコンダクター、ならば、最も確率の高いプレーを。

ワンタツチ、斜め後ろ、右サイドハーフウェーちよい敵陣にフリーで居た美緒にパス。美緒ならば、ここからどんなことでもやってのける。

可憐がDFを連れ左に大きく開いた。愛はマーカーを押さえ込んで右に張ったまま。ナナは二人を背負うようにして、パス&ゴー。右コーナーフラッグ目指してクロスステップ・ラン。

前線三人が全員、マーカーを引きずり出す動きをしたことで、ゴール前ど真ん中に、大きな穴がぽっかり開いた。さすがに三人分は、埋めきれない。

ナナのパスを得た美緒、ぴたり、止めた。

選手達の動きもぴたり、ほんの一瞬、止まった。

これが美緒の、誰にも真似の出来ない天性だった。時間と空間を自由自在に操るその様は、まさに、女神。

選手達の、反射で動かしていた身体が、思考で動かす身体へと、スイッチが切り替わる、まさにその刹那。

クロスが、上がった。

寝入りばなを叩き起こされたように、敵陣、誰一人、何も、どうすることも、できなかった。

全員で築いた舞台に、大輪の花が咲く。

C B真ん中の選手が、最終ラインから、真っ直ぐに駆け上がっていった。一直線、白い軌跡を引くように、放たれた矢のように、ただ、真っ直ぐに。

マーカーがへばりつくなら、遠い彼方へ引きはがせばいい。

そして、マーカーのついてない選手が、攻めればいい。

奇策のようで、基本だった。

なによりそれを大切にするから、優等生である。

なによりそれを大事にするから、みんなに、信頼される。

開いた穴から飛び出した。

目の前にはキーパーしか居ない。

空からボールが、降ってきた。

すこし、遠いと思ったけれど、届かないとは、思わなかった。
飛んだ。

頭から、おもいきり、手を伸ばして、身体を伸ばして、そう、
あの時の、ように。

スパアアアアアン!!

美原はなこのダイビング・ヘッド炸裂。

GKあまりに綺麗に頭上を抜かれて、倒れ込む暇すらなく、ただ虚しく、バン
ザイをする他なかった。

文字通り、お手上げである。

「フィオー——レ・ミツシイ——レ！」

はなのミサイル。

千里を叱った本人が、そう叫んでピッチサイドへ走った。もちろん、ベンチ中が飛び出した。

しかし当のフィオーレは、あらぬ方向へと走っていった。祝福に駆け寄るみんなを振りほどくように、ただ真っ直ぐ走っていくのは、バックスタンド側逆サイド。

言うまでもない。

そこには、専属カメラマンが、黒い愛機を構えて、準備万端。

派手なポーズはなかった。

ただ、拳をひとつ作って、目をギュツとつぶって振り下ろして、そのレンズを見た。レンズ越しの、瞳を見た。見えないけど、見た。

心の底から、溢れるように一言だけ、出た。

「たくみ、やった！」

一言だけ、返した。

「はな！ ナイツシューツ！」

カメラは構えたままだった。

濡れた瞳は、恥ずかしい。

ゐ

——試合終了の笛が鳴った。

大地はいつも、この瞬間のためにコーチをやっているのかもしれない、とさえ

思う。

魂が抜けるように肩の荷がどこかに消え、光り輝く野に放り出されたような、圧倒的な解放感と多幸感に包まれる。

人生の最後の瞬間も、こうでありたい。

そんなことを思うほど。

結果から見れば、3―1、危なげない勝利だった。

だが、学ぶところの多い、とても多い、試合だった。

見よ、相手の選手達を。

笑顔、笑み、笑い、微笑み。自ら進んで、ミラクルズの選手に握手を求め、肩を叩き、腕を組み、健闘を讃え合う。そこにあるのはただ、自分の力を出し尽くした満足感。

勝つても負けても、こうでなくては。

素晴らしいチームだった。

「……おめでとう」

聞き慣れぬ声に振り返ると、なんと老将が豊かな微笑みを浮かべながら、手を差し伸べていた。大地、どきまぎしながら、汗ばむたなところをシャツでこすつて、差し出す。

「ありがとうございます！ ナイス・ゲームでした!! 勉強になりました!」
偽らざる感想だった。深々と頭を下げる。

そして気づく。僕よりも、随分と小柄な方だ。視線は二〇センチ近くも低い。それでなお、あの圧倒的な存在感。

「いやいや」

歳に似合わぬ力で大地の手を握りしめたまま、彼は左手をゆつくりと振った。

「ナイス・チーム。」

こんな素晴らしいチームは、見たことがない。私の方こそ、勉強になったよ。
ありがとう」

社交辞令でない証拠は、その微笑みひとつで充分だろう。そしてそれで、お互いの気持ちは尽きた。ただ笑顔で、握手の続きをした。

「……ひとつだけ、もしよければ聞かせて欲しいのだが」

手を離すと、今はもうただサッカーの好きな、昔は大企業の部長でもやってたような、街のご隠居にしか見えない、そんな彼が笑って言った。

「はい、なんでも！」

「途中で入れた2番の選手の使い方、あれは君の独創かな？」

「いえ」

こういう人物に、偽りや誤魔化しは通用しようもない。ブラジル代表の真似だ、大地は正直に説明した。

「……ふむ」

ひとつ、顎に指をあてて、間を置き、うなるように。

「これだけ若いチームでそんな凝ったことをやり遂げられるのは、凄い」

「いえ、というよりも」

苦笑する。

「2番、美原が勝手にやってくれたことです。私の指示ではなく」

頭を掻くようにして自分の指導力統率力不足を、照れるでもなく白状した。だが、紳士はそこに感心した。

「ならばなおのことだ。何も言わずとも自分達で局面を打開する。時には監督の言うことも無視してね。それができるチーム……」

を、作ったのは君だ、と言おうとし、さすがにそれは、年相応の言葉数ではない。孫よりも若いこの青年に。

言葉を呑み込み、もう一度繰り返した。

「ナイス・チーム。応援しているよ。必ず全国に行ってくれ」

「はい！」

「またよかつたら……戦つて欲しい」

もう一度差し出された手を、今度は力一杯、握つた。

「よろこんで!!」

——青年の前を辞すると、可愛い選手達が駆け寄るように集まってくれた。

「負けちゃいました」

だがその顔に、悲壮感はない。自分を出し尽くした爽快感だけが、あつた。やつてきたことは間違いではない。

逆に、この試合途中で「勝ち」を意識してしまったのは、私の方ではないのか。

——この歳になつても、まだまだか」

だが、だからこそサッカーは、おもしろい。

輪になつて言葉を待つ愛しい子供達に、先ほどの賛辞を、そのままに伝えた。

「ナイス・ゲーム」

それ以上は、今は要らないだろう。

「……美味しいものでも、食べに行こうか！」

勝ったような歓声が上がった。

ゐ

選手整列、礼が終わると、その場に転げるようにひっくり返った選手がひとり。
はなこである。

顔をしかめて、足を押さえる。

「攣った？」

「……ん」

美緒が伸ばしてあげる。

ピッチに大の字に寝そべってみれば、高い空の青が染みた。全身脱力、珍しく弱音じみたものを、吐いた。

「……もう動けない……」

「ご苦労様。キツイでしょ、あそこ」

「うん」

改めてこの人のバケモノっぷりを痛感した。いつも彼女はあそこで、ピッチの全てに神経とボールを配る。そして前線に駆け上がってパスを出しシュートを撃ち、サイドへ張ってクロスを上げサイドバックを援護し、CBのカヴァーをする。一五分だからなんとかやれたことだ。あんなもの一試合、できっこない。

「……甘く見てました。すみません」

誰に謝るともなく、謝った。極度の疲労が、はなから棘を抜き去っていた。

「いやいや、素晴らしかったよ。今日は、おはなちゃんに勝たせてもらったよう
なもんだよ」

「……」

追いつかれなければ何の問題もなかった、いわば独り相撲……そんな口を動か
すことすら、疎んじられた。

忍が、そんな様子を見てやってきた。微笑みながら美緒に目配せをする。

「いつまでも寝転がってるのも都合が悪かろう。運ぼう」

「へ？」

言うやひよい、と担ぎ上げる。はなこ、二つ折りになりながらも、抵抗する
元気もない。

「……あうー」

美緒も気づいた。タッチラインに、カメラを肩から下げた男の子がいる。心配
そうに、「おろおろ」という擬音を頭上に浮かべて、こちらを見ている。

「ちよつと、そのの君―」

わざとらしく呼ぶと、飛ぶようにやつてくる。

「この荷物、運んでつてくれないかな？」

どうすればいいのか、とまごつく男の子の背に、忍が幾分乱暴に、どきりと乗せた。

「わふ」

おんぶ。

そこがどこかはすぐにわかった。いろんなことが頭をかすめた。でも、どうでもいいような気もした。脚も動かない。楽もしたい。疲れて、いた。

しがみついた。

さつそく騒ごうとする周囲に、にたつと笑って唇に人差し指、キャプテン。黙って微笑み、カメラ・バッグをかついであげる、忍様。

——ロッカー・ルームへの短い距離を、そうやって歩いた。歩いてもらった。

「……重くない？」

「慣れてるよ」

先ほどのまでの感情の高ぶりに比べれば、照れなんか、感じない。

「……そういう時はね、『軽いよ』って言うの」

「あはは、ごめん。軽いよ」

「ばか」

「ほんとに。上の空ぐらい」

「なにそれ」

なんでもよかった。ただ、広い背中に揺られるのが、快適だった。優男顔から思っていたより、ずつとずつと広い背中に。

「……あせべつちより。ごめんね」

「いいよ。僕もそうだし」

「拭くー。これ貸して」

「あ、それも」

両手がふさがっているのをいいことに、バンダナを奪った。額でも拭こうかと思つて当てて、めんどくさくなつて、そのまま被った。すっぽり、収まる。しつとり、する。

でも、気持ち悪くなかなかつた。それだけ彼が走り回っていた証拠。なんとなく、うれしい。

「……洗つて返すね」

「いいよ、そんなの」

「素敵なバンダナ」

「実はママさんに貰つたんだ」

「そうなんだ……あのあと？」

「うん。そのかわり、また二人の写真を持つてこい、つて」

「ふふふ……じゃ、行こうね、また。」

……そうそう、あのオープンカフェね、モーニングもやってるんだって。バゲットかトーストだけの方が、逆に美味しいかもしれないよ？」

「僕はクロワッサンがいいなあ」

「ふふ、あるといいね。」

……あそこも、また一緒に、いこ」

「うん。きつと」

それでもう、よかった。

「ごめんなさい」は、夕陽と一緒に、呑み込んだ。

その広い肩に頭をもたせかけると、まるで小さかった頃に帰る。

沈む夕陽、遊園地の帰り、父の背に揺られた。

大きくて、温かくて、安心した。

どんな乗り物よりも、素敵な乗り物だった。

どこまでも、揺られていたいと思った。

今も、そう思っている。

もちろん、その背中も、そう思っている。

大切な写真

「大黒勇美……あつ」

「せや、お前やつたら聞いたことあるやろ!? なんつーても天皇杯ウィナーやで!」

「道理で……横にいても、正直、気になってしょうがなかったよ」

月曜日朝。

学校に着くなり三十六に敵将の名を聞かされる。日本リーグ時代の名将、天皇杯、そしてリーグを制したこともある。メキシコ五輪の栄光を知る長老、齡はゆうに七十を超えている。もうすでに第一線からは引退されたものとはかり……とんでもない。今も現役、サッカーを、楽しんでおられる。

「そんな名将に誉めて貰えたんや、ええなあ、大地」

「……そういえば」

振り返ってみれば、そうではない。思わず、笑った。

「『ナイス・チーム』って言われたよ。僕が誉められたわけじゃない」

「お前もチームも一員やろ。そのチーム作ったんは、お前なんやし」

「そんなことないさ。特に、昨日はね」

「それにしてもすごかったね」

いつのまにかみんないる。流乃が昨日以来何度目かになる同じセリフを、また
呟いた。

「あんなうまいこと当たるとは思えへんかったなあ。昨日のんはちよつとできず
ぎやで」

ナナも同意。蘭も愛もうなずく。

「愛ちゃんもよく効いてたけど……やっぱり、あのお方ですね」

「あのお方やねえ。『一五分しかできへん』とか言うてたけど、ホンマかなあ。」

あれ、あれちゃうん、あれをああしてもらうために、擽ってるように見せかけてるだけちゃうん？!？」

「まさか。そーゆー腹黒い女じゃないよ。誰かと違つて」

「誰かつて誰。」

わかんないですよお、恋は人を狂わせますからねえ」

などと美緒がおぼさんくさく一般論を述べていると、隣の教室、そして廊下がなにやら騒がしい。これは……

「お邪魔しまーす！

月曜朝のお楽しみ、ミラクルズの勝利号外です!!」

新聞部の名物記者、樹先輩が、大きな紙束抱えて駆け込んできた。一枚、教室後ろの連絡ボードに貼りつける。その作業中すでに人だかりができています。

週明けいつもの光景、いや、今日はいつもより、盛り上がりが激しい。

馬鹿笑い、女子の黄色い歓声、男子の興奮した声、釣られてまた、人垣ができる。樹さんは貼り映えにうなずくと、ミラクルズご一同を見つけた。駆け寄って、ぺらりと一部を空堀に手渡す。

「空堀君、ナイスショット！」

「ははっ、樹先輩、いい写真だったでしょ」

「写真の力は大きいよねえ、あれ一枚で本文なんか意味ナッシンだもん」

「なに言ってるんスか、樹さんの記事あったればこそ、添えものの写真も活きるつてもんで」

「また、文章だけじゃなくて口も巧いんだから」

「なに、もう、見せてえやあ」

ちよつぴり焼き餅焼いて砂糖醤油をつけて、身を乗り出したナナ、三十六の手から新聞を奪った。みんなで見れる、机の上に置く。

「……」

樹さんはにた、と笑うと、空堀に小さく手を振って、次の教室へと走り出した。
一瞬の間、上がる、雄叫び。

「な、な、なんじゃこりや~~~~~!!!」

「ちよつ、これ、うわ、こんな」「う、うわ、わう~~~~~!」「……わんだほ

ー」「三十六、これ、こんな、ウチ、ウチもやる!」「こんなステキな……大地
君、負けていられないよ!」「あなたは特に負けてません」

「これは……いい光景だね」

こちらでも、連絡ボード前と同じ。わいのきゃいのと大はしやぎ。

三十六、うんうんうなずきながら、腕を組んで胸を張る。

「……エエ写真やろう?」

新聞一面トップデカデカ、記事を圧する説明要らずのその写真は。

——おはなちゃんは、へとへとだった。

くたびれた。

試合も実に厳しかったが、その後の祝勝会でも、特に1年のお子様達がきやーきやーぎやーぎやーとうるさくてうるさくて、いーじゃない別におんぶしてもらうぐらい、とりたてて何そんな、ねえ、別になんでも、たまたま匠君だけだったじゃない別にあのまま忍様に担がれてたって良かったわけだし私が望んだことじや……

そんな訳で珍しく、いつもなら教室で一番二番を争うはずなのに、今日は予鈴五分前。

歓声が聞こえる。教室からだ。そっか、月曜朝だから、また新聞で盛り上がってるのかな。ありがたいことだね、学校中の応援を背に戦える、っていうのは

……

あー、いちおー昨日は頑張ったし点も獲っちゃったから、ひよつとするといろいろ書いてもらってるかもしれない。

ま、後でゆつくり見よつと。

ところがどっこい、教室に入るや否や、まるでみんなして待ちかまえていたかのように一斉に振り向かれる。ざわめきまで止む。そして手招きする、福山さん。

「おはなちゃん！ おはなちゃん！」

「はい？」

「主役！ 主役！」

手招きして、新聞を指す。そうまで言われて見に行かないのも感じが悪いので、幾分重い身体を引きずって新聞の前。

人垣が割れて、見えた。

呼吸が、止まった。

.....

「ちよつ！ちよつ！！でやりや、ちよわつ、によつ、しゆるわつ!?」

怖くない。ね？」

おもしろい。冷静な人ほどパニックになるとおもしろいなあ。

また美緒が机の上の件の新聞を、両掌で指す。

373

匠の背に全身を預け、首元にピンクのほおを寄せ、まことに幸せそうな顔をして、眠るように目を閉じるはな。横顔の匠がまた、優しそうないい表情してんだこれが。

そしてはこの髪にはもちろん、二人を繋ぐピンクのバンダナ。

『額のバンダナは試合中駒川カメラマンが着用していたものである。私はこれに、『桃の絆』と銘を打ちたい』

阿呆なキャプションはもちろん、写真と共に空堀三十六。

「上手く撮れたと思ったのだが。あきませんか」

「いや、あの、あの、あのかんとか、あきませんか、そゆ話じゃなくてね、あの、これ、これ」

「そーそー、まーったく羨ましいよ、はな」「幸せそうだね」「……いい」

「いや、だから、幸せとか羨ましいとか、なんか、なんかひどい誤解が」

「誤解？　こんな写真見せつけられて何をどう誤解するつちゅーんや！　なんや

のんこれ、ほつぺた真つ赤つかにしてヤラシイなあもおお！」

「なつ、なに怒ってんのよナナ、これ、これ試合直後じゃない、熱くて、ほら、夕陽だし、これ、ほら、あの、だから」

「こんなエロ写真見せつけられて黙ってるウチやないで!? カラ、覚悟しいや!?」

「俺かい！ ていうかなんでお前そんなに怒ってんねん」

「ウチは人前でいちゃいちゃするのが好きやねん！ いちゃいちゃされるのはあんま好きちゃうねん！」

「ワガママやな」

「だからいちゃいちゃなんかしてないって!! これだつて、これ、ほら、あの、わた、私足攣つて、だから、ほら、ね、ね、ね」

もちろん、ナナも油をちゅーちゅー注いで遊んでるだけなのだが、生まれて初めてこういう持ち上げられ方をされているはなこには、それがわからない。

やはり参謀というものは、ベンチにおらねばならぬようだ。

「ホンマかく!? 極限まで幸せそうやで〜!?」

「だつ、だつて頑張つて勝ったんだもん、幸せそうに、き、決まってるじゃない、こんな時に写真撮つたら、誰の顔だつて幸せそうに決まってるわよ!」

「そおおかなああ」

「だつ、だからそのヤラシイ目はやめてよ! そのなんか三日月型の目!」

「うつしやつしやつしやつ。ウチだけやないで〜」

見ればほとんどの人物がおんなじよくな目をしている。

『ほお〜、ほお〜、そお〜ですか』 って目を。

「ああ、もう! だから違うつてば!! 全然違うの!!」

「なにとなにか?」

「うつ。だつ、だから、えと、その、み、みんなが考えてることと、わ、私の考えてること」

「そんなの当たり前じゃない」

「い、いや、そう、そうなんだけど、いや、そうじゃなくて、あ、あの」

フランスの哲学者の名前のようにシドロ・モドロ。

そこへタイミング良くあるいは悪くやってきてしまったのはもう一人の主演、お姫様を助けに來たナイト様。

「おはようございます」

いつもののんきな挨拶、いつもの笑顔、いつものカメラ。どこをどう見ても、

駒川匠。

「「おはようございま——す!!」」

「た、匠君……」

はなはもう、なにをどうしていいのやら。

「あ、これ」

新聞を見つけると、手にとってジッと見る。

「あ、わわわ」

手から奪つていいものやら、そんなことしたつて各教室に貼り出されているのやら。

「見た？ 匠？」

「うん」

「ご感想を、ひとつ！」

照れさせ困らせようという三十六の言葉、しかし匠も負けていない。

「よく撮れてるね！ 素晴らしいよ。構図もピントもバッチリ、逆光加減なんか憎いね。三十六、才能あるよ、きつと」

「「……」」

さすがプロ。写真としての出来映えしか、目に入つてない。完全に客観化して見ちゃつてる。それが証拠に。

「みんなが騒ぐのも、無理ないね」

「……」

ダメだ。

ホンモノだ。

この人やっぱり、ミラクルズに縁があるだけのことはある。

「たはー、そうじゃなくてー！ この、美原女史とのなんていうの？ コンビネーション？ コラボレーション？ コミュニケーション!? その具合が！」

「あ、そうそう、美原さん」

「えっ？」

「それで思い出したよ」

「ごそごそ、と鞆を漁った。出てくるのは、街のカメラ屋さんで現像した時に貰う紙アルバ……やばい!!」

「ゲッツ!! ナナッ！」

「ほい来た！」

あらゆる可能性を先読みする策士・三十六の瞬即反応、匠の手からボール奪取、ハートコンタクト・ナイスパスが相方に通る。

「あつ!!」

遅い。はなこ遅い。

キャプテンがはなをカヴァーする。身体を寄せて張ってスクリーン。

「あ、あああう、あああああううううう!!」

なんとかそのアルバムに手を伸ばそうとブンブン腕を振るはなこ、しかし美緒のマークに掛かつては文字通り手も足もでない。

「見てもええよな! 匠!!」

「……うん」

どうしたもんかと片手を上げかけたけど、押し切られた。

基本的にかメラマン、自分の写真を見てもらうのは嬉しいものである。特に、自信作は。

顔の目の前で横から見られないようにばさばさ繰ったナナ、ぴたり、止まる。
ニタリ、笑う。

ばさり、置いた。

「うつひよ~~~~~!!!」

「わふー……」

現実のはな、泣きそう。

でも写真のはな、笑ってる。

なんだかパンみたいなの嚙ってるおはなちゃんと、なんだかフランスパンみたいな嚙ってる匠ちゃんが、二人揃ってカメラ目線で、につこりにつこり、笑ってる。

オープンカフェのワンショット、誰がどこからどう見ても、

彼氏と彼女のステキなデート。

「エエ絵面やなあ……」 「素晴らしい。あまりにも素晴らしいわ」 「わはは、おいしそうだね」 「……いい」 「しかもなんやのんこれピンクピンクでめっちゃパールックやんかヤラッシーなあもおお！」

「いいねえ……こんなデート、してみたいよね、大地君!!」

「えっ!? えー……美味しそうだね」

「ウイイイイイイイ」

「ちえ」

「ちよつ、ちよつとちよつと待つてよ待つて、デデデデデデートつて、そそそそそそそんなのじゃないもん！」

「はい!」

「おはな……これをデートと言わずしてなんて言うのよ!」

水飴を『小僧が舐

めると死ぬ薬』だなんて言わないで！」

あの流乃でさえ幾分興奮している。

「さ、撮影」

「却下！」

「はな、わかつてる、わかつてる。恋はいつでも夢芝居や。浮かれて頭おかしいなるのはようわかるけど……」

これは、デート、です」

「ち、ちが、違うよ、ね、匠君！」

「えっ……えつと、あの」

「あ、そら酷いで、おはな、それはたくみん傷つくわ」

「いやナナ待て、これはアレや、『秘めたる恋』にしてそれをも燃料にしてしま
うっちゅー高度な作戦やな！」

「なんと！ それウチらもやろや！」

「もうでけへん」

「匠君は、デートのつもりだったよね？」

美緒が重ねて問う。

匠も、真面目すぎる。

その真面目は相方のとはタイプが違い、あまりに素直すぎるところに起因する。

「えーつと、最初は単なる撮影のつもりだったんだけど、なんだか楽しくて」

うんうん。

そりや楽しかろう。

そんなもん見りやわかる。

「それで、美原さんに訊いてみたんだ」

「!? わ、わー!・わ——! わああああふー」

いかん。全部言われる。

しかし抵抗は、身体の自由を蘭に奪われ発言の自由を美緒に奪われ、虚しい。

匠、バリバリと頭を搔いて、言った。

「『これって、デートみたいだね』って。そしたら」

「うんうんそしたら!？」

「『だったらいいね』って。

だから、デートじゃないよ」

「デートです」

あまりにも、おなかいっぱいである。

「はいはいごちそうさまごちそうさま。まったく、こんな幸せそうに美味しそうにパン食べてまああなたたちは」

「うん、長居さん、そこ美味しかったよ、結構」

「あら。私がチェックしてたの、はなちゃんに聞いた？」

「うん。美原さんと今度ぜひ、モーニング一緒に食べに行こう、って」

「「ふえええええええ……」」

美緒と流乃がひっくり返る。三〇度ぐらい。

「モ、モモモ、モーニングつてのはちよ、ちよつと大胆すぎない？」

「はな……あんた、やるときややるね。むしろやりすぎ」

「……はい？」

きよとんなはなこに、解説する。

まったくこの優等生め。説明する方が恥ずかしいではないか。

「だって朝モーニング一緒に行くってことは」

「一晩中一緒にいるってことじゃん？」

「うっ・ひよ~~~~~~~~!!!」

「!!」

はなこもう、言葉もない。

そんな解釈が世の中にはあるのか。

知らなかった。

世界はあまりに広すぎる。私はまだまだ、愚かに過ぎる。

いや、そない反省しなくても。

「あ……み、美原さん、そ、そういうことだったの？」

「ちつ、ちがふご、ふごごごご」

「確認せんでええねん。匠、まさにその通りや。もう、一晩中でも二晩中でも一緒に居て朝から一本のフランスパンを両側から二人で齧ってくれ」

「ふごーつ、ふごーつ、ふごーつ」

もうなんか血圧心配になるほど顔中真っ赤で手をぶおんぶおん振るオクトパシイはなこ。そんなはなこの必死の願いも虚しく、匠は、いつでも、とつても素直。そこが彼の、一番の魅力。

ぽりぽり、と頬を搔いて、思ってることをそのままに言った。

「はは……うん。」

……そういうの、できたらいいね」

「!!!」

おはな、もう、銅像。

みんな、もう、言葉なし。

もう、好きにするがいいのさ。

ナナ、悔しいんだか楽しいんだか、感極まって立ち上がり、叫ぶ。

「皆の者おお！ その写真も良いがこの写真も良いぞおお！」

見よ、見よ、我らが美原委員長のこの勇姿をおおおお!!」

「ふも、ふもももももももも、ふももももも——っ!!!」

ロバ耳立ててたクラス中が、ナナの高く掲げ上げるラブラブラブラブツーショツトの下へと集った。瞬間沸き上がる歓声、嬌声、絶叫、笑顔。

男子女子問わず肘でつかれる匠、わけもわからずまたバリバリと頭を掻い

た。

確かに『写りマス』にしてはいい写真撮れたと思ったけど、そんなにいい写真かなあ。

しかし瞬間、盛り上がる隙を突き、はなが自由を回復、あ、と思う間にナナの手からアルバムを奪い取る。

べたつ。

開いたまま胸に抱えて、顔、真っ赤。

「も、もういいでしょこんな写真ッ!!」

「ええやんかー、減るもんやなしー!」

「駄目、もう駄目、見せない絶対見せない」

「美原参謀、しかしいくらご自分が写っておられると言っても、匠の写真ってこ

とは、ミラクルズ公式写真ですぜ？ 一人占めにするのなら、それ相応の理由がなければなりませんなあ」

「りつ、理由!? そんなの、そんなの、そんなの……」

はなこは、やつぱり、生真面目に過ぎる。

よせばいいのに、一生懸命考えて、これ以上ない正しい答えを思いついた。それをそのまま、言う。

「……た、大切な写真だから」

ワ——ツ……

言ってからまた、自分の言葉の意味を知る。

もう、いや。

もう、今日は、いや。

だからまた、叫んだ。

それはいつものセリフ。

みんなに求められる、いつもの、セリフ。

「BE QUIET!」

「「Yeah——ッ!!!」」

「よっしゃいくではなこコ——ル!!」

「「うおおおおおおおおおお!!!」」

私は、私。

なにを求めようと、なにを不満に思おうとも。

「BEE QUIET!!」

「「みつ・はっ・らっ!! みつ・はっ・らっ!!」」

こんな私も、喝采を受ける。

半分ふざけていようとも、求められるのは、悪いことじゃない。

叫べと言われるなら、叫んでいよう。

守れと言われるなら、守っていよう。

だってそれが、私だから。

「BEEEE QUIEEEET!!」

「はっ・なっ・こっ!! はっ・なっ・こっ!!」

鳴りやまない囃子の前で、ただ、はなこは叫び続けた。

その横で笑い囃す友人達と、いつものように髪を掻く男の子が、いた。

胸に抱えた「大切な写真」に写る、そして写した、男の子が。

彼は、はなこがどんな大声で叫んでも、笑っていた。

あの時のように、そして、
これからの、ように。

強さ溢れる言葉と気持ちは、真実ひとつを見つめてる。
頼みのDF頼れる参謀、無理でも無茶でもやり遂げる。
ガッツと頭脳をフル回転で、どんな敵をも跳ね返す。
生き地獄さえウェルカム、散ってその名が残るなら。

文句あるなら聞いてもいいけど、忙しいから後にして。

恋にゲームに気持ち全開、
彼にチームに想い満開、

美しき、みどりの原に君は咲く。
はなこ花の子、花と咲く。

Never Give Up, Go Ahead, and DO MIRACLES!

「フィオーレ・フィオーレ」

【あとがき】

ありがとうございます、ながたかずひさです。

お楽しみいただけましたでしょうか。

さて今回はおはなちゃん。気の強い女の子の裏側にある「ホントのキモチ」。

そこんところを描きたかったのですが……ムズカシイ。

喧嘩（というより一方的に言っちゃうところ）は、「心を許すが故に言っ
てしまふ」あたりを表現したかったのですが……いやはや。

「本当のところはどうなんだ」を語り合うことは、なかなかできません。

どんなに親しくても、いや、親しければこそ。

はなこと匠のように、そこを言い合える、刺激しあえる、そして成長しあえる

関係、それは羨ましいな、と思いつつ描きました。

描き終えて考えてみれば、「Girl meets boy」は、ミラクルズでは初めてです。恋の始まる、好奇心の矢が一直線に向く感じ、微妙なズレを埋め合う楽しさと嬉しさ、

「これ、つてひよつとして……恋？」

そんな淡い、なのに胸一杯な気持ちは、いつまでも忘れたくないステキなキモチです。

と、いつもどおり甘ったるい締めで。

ああそうさそれがミラクルズ！

「Mimolette」 Web には「ミラクルズ！」の詳しい設定資料などあります。

ぜひ一度ご覧ください。

<http://rakken.net/>

感想、お褒めの言葉お叱りの言葉ございましたら、お気軽にお声おかけください。

nagata@mti.biglobe.ne.jp

です。よろしくお願いします。

【おくづけ】

「Miracles! Episode 2 - フィオーレ・フィオーレ -」

著者 ながたかずひさ

発行 Mimolette

初版発行 2004.11.1 第二版発行 2011.1.11

WebPage : <http://rakken.net/>

E-Mail : nagata@mti.biglobe.ne.jp

twitterID : KazuhisaNagata



Miracles! Episode 2 [no.8] - Fiore Fiore -
Powered by Kazuhisa Nagata
web: <http://rakken.net/>
mail: nagata@mti.biglobe.ne.jp
TwitterID: KazuhisaNagata
2004.11